

書評

人旅本 学年主任の読書日記 その3

幸松 世剛

Seigo KOMATSU

この『外苑春秋』の場をお借りして、学年主任の読書日記を紹介させてもらうという、ある意味で大胆な試みも、おかげさまで今年で第3弾を迎えることができました。昨年、30冊の書評を掲載させていただいたところ、予想をはるかに超える反響があり、國學院高校の生徒諸君や先生方から温かい言葉をいただき、正直なところ、胸がいっぱいになるほど嬉しかったです。

何よりも、何人かの生徒が僕の書評をきっかけに、実際に本を手に取り、ページをめくってくれたという事実、言葉では言い表せないほどの喜びを感じました。中には、読後の感想をわざわざ伝えに来てくれた生徒もいて、彼らの瞳の輝きに、僕自身の読書体験が新たな意味を持つことを教えられました。

若い先生たちの反応も、僕にとっては新鮮で、非常に興味深いものでした。僕が紹介した本を既に読んでいた何人かの先生からは、「あの本、本当に面白いですよね」と、まるで旧知の友人に再会したかのような親しみを込めた言葉をかけてもらいました。その瞬間、言葉を交わした先生との間に、不思議な連帯感が生まれ、僕は勝手に、ささやかながらも確かな仲間意識を抱いていました。「先生っ

て、意外と真面目な一面もあるんですね」と、少し茶化すように話しかけてくれた先生もいました。おそらく、普段の僕からは想像もできないような一面を僕の書評に見出したのでしょう。

今回は、主に2024年に読んだ32冊の本について紹介します。その時の気分や興味の赴くままに、様々なジャンルの本を読んできたので、哲学や経済に関する硬めのものから、心を揺さぶる小説、日々の疲れを癒すエッセイまで、多岐にわたるラインナップとなりました。これらの本を改めて振り返ってみると、それぞれの本を読んでいた当時の情景が鮮やかに蘇ってきます。「この本は、修学旅行の準備に追われていた時期に、移動中の電車の中で読んでいたな」とか、本の内容とともに、その頃の自分の身の回りで起こっていた出来事や、感じていたことなどが、まるで走馬灯のように思い出されるのです。僕にとって、これらの書評は、単なる読書記録ではなく、1年間の個人的な日記のような、かけがえのないものとなっています。

本を読んで感じたことを、あるがままに、自由に述べているだけの書評ではありますが、それでも、いざ文章にしてみると、決し

て簡単な作業ではありません。本を読んで心に残った、まだ形になっていない曖昧なイメージを、言葉を選び、論理的に整理して文字に起こしていく作業は、僕にとって、時に苦痛を伴うほどの、骨の折れる作業です。1つの書評を完成させるのに、2週間近くかかることもあります。集中力が途切れそうになると、ついつい、どうでもいいYouTubeの動画を観たり、SNSをチェックしたりして、現実逃避してしまうことも決して少なくありません。

「アウトプットすることで、学びはより強固なものになる」と、よく言われます。僕も、この書評を書き始めてから、本から得た知識や感動を、以前にも増して明確に記憶し、思い出すことができるようになったと感じています。また、アウトプットという行為を通して、初めて、自分自身の内面と深く向き合い、自分が何を考え、何を感じているのかを、より深く理解することができるようになったように思います。本から得られるものだけでなく、僕たちは日々の生活の中で、様々なことを感じ、考え、そして少しずつ変化していきます。そういった、目には見えないけれども、確かに今ここにあるものを捉え、言葉にしていくことは、決して容易なことではありませんが、非常に意義深いものだと、僕は信じています。1冊の本を読み終え、書評を書き終えるたびに、頭の中がすっきりと整理され、ささやかながらも、確かな達成感を、1人で噛み締めています。

僕たちが学ぶ理由は、決して受験や資格試験、昇進のためだけではありません。大げさに言うならば、人生という旅を、より豊かに、

より深く楽しむためなのだと、僕は考えています。ですから、学びという営みに、年齢は関係ありません。受験が終われば勉強が終わるわけではありませんし、就職が決まったら、もう学ぶ必要がないというわけでもありません。

この書評を書き続ける理由の一つは、学ぶことの楽しさを、僕自身が先頭に立って証明したいからです。「本って、こんなにも面白いものなんだ」「大人になっても、学び続けることはできるんだ」と、1人でも多くの人が、そう思ってくれることを、僕は心から願っています。

あこがれ

著：川上未映子

新潮文庫

なんの根拠もありませんが、個人的経験からすると、直感やひらめきに従って決断をする方が長期的には正しい選択ができると感じています。僕



たちは日々のほんの小さな選択にも効率や根拠を追い求めていて、そしてそれはあまりにも行き過ぎてしまっているように感じます。僕は数年前に、そんな味気のない生き方が嫌になって、特にプライベートにおいては少しずつ直感やひらめきや偶然の出会いを大切にしようと考え出し始めました。

それは決して適当に決定することではありません。人間の脳、手足や細胞のレベルに至るまで、僕たちは身体全体を使って過去の経験や感情を記憶していると言われていました。ですので直感的に感じたことには、無意識に身体が反応している可能性が高いのです。僕はつまらない合理性よりは自分の感性を信じて生きています。

この本は、美術館のカフェでくつろいでいる時に、店内に展示されていたのです。まず『あこがれ』という、ありそうであまりない単語に目がいききました。後述しますが、僕は多くの人にあこがれを抱き、その人に近づきたい気持ちを原動力にして成長させてもらったという実感があるので、このタイトルはどうしても気になりました。表紙のイラストもポップで良いです。小学生か中学生と思しき

男女が2人並んで立っています。2人の顔の表情は笑顔でありながらも何か複雑なものを抱えている深いものを感じさせます。

みなさんは「憧れ」という言葉を聞いてどんなことを連想しますか？この本で描かれている「憧れ」は、一般に使われているように、誰かを尊敬し目標にすることだけでなく、もっと広範囲の意味で使われていて、「愛情」や「畏敬」といった意味も含蓄しているように思います。

「ヘガティ」とあだ名をつけられた女の子がこの小説の主人公の1人ですが、彼女の母親は、ヘガティが幼い頃に亡くなっています。父親との日常の生活の中で、亡くなった母親のことを思い出すことはほとんどないのですが、あることがきっかけで、父親には前妻がいて2人の間には子供、つまり自分の姉がいることを知ります。みなさんがヘガティならどのように感じますか？

小6の彼女の心理に大きな変化が起こります。まず父親が、今までの父親ではない別人に見えてきます。多くのことをすでに経験し、必死に生きている1人の人間であることを認識します。そしてまだ見ぬ自分の姉と、その母親、つまり父親の前妻に会いに行くのです。最大の変化は実の母親への気持ちです。抑え込んでいた母親に会いたいという感情が一気に込み上げ、その抑えきれない感情と必死に向かい合おうとします。

その時の心情を筆者は以下のように述べています。

「そうだ、かわいそうなのは、ひとりぼっちなのは、わたしなんかじゃないんだ、お母さんなんだ、みんな生きているなかで、お母

さんはひとりで死んでしまったんだ...」

もう1人の主人公は同級生の「麦彦」です。彼も4歳の時に父親を亡くしています。彼の憧れの対象は、スーパーでサンドイッチを売る自分より遥かに年上の女性です。麦彦は彼女に人知れず「ミス・アイスサンドイッチ」というあだ名をつけ、恋心とは少し違う甘い感情を抱くのです。本文には述べられていませんが、小学生が経験する初恋のような感情なのかもしれません。

麦彦は自分でもうまく処理できないその思いを、自分の祖母と最終的には同志のような存在である同級生のヘガティにだけ伝えます。麦彦は「ミス・アイスサンドイッチ」の堂々とした強さやかっこよさに自分の想像や願望を重ねながら、どんどんと惹きつけられていきます。いよいよ彼女が店を辞めてもう会えなくなると分かって動揺する麦彦に、ヘガティがかける言葉がこの本のハイライトの1つです。

「だって、会うためにはぜったいにあいになかなきゃならないんだから。でも、だから、それをやめちゃうと、もうほんとうに何にもなくなっちゃうんだよ。」

小学生の同級生の2人の「憧れ」は、大人が忘れがちな人生の大切なことと、子供時代に抱いたことのある懐かしい感情を思い出させてくれます。

それは、いなくなってしまう人と会うことはなによりも難しいという非常に単純な現実です。亡くなった人と話をすることはできない。だから生きていることは貴重で、会いたいと思うなら、生きていうちに会いにいった方がいい。そういった単純な事実を思

い出させてくれます。

自分が同じように小学生だった時に、友人が転校した時や親戚が亡くなった時に抱いた、心の中の真っ黒な雲のような存在に、押しつぶされそうで逃げ出したくなるような感情を思い出し、懐かしい気持ちになりました。

「あこがれ」の形や対象は様々です。ヘガティのように亡き母を思うことも、麦彦のように異性に惹かれることも含まれます。

みなさんのあこがれはどのような形をしていますか？僕は幼い頃から常にモデルとなる人を見つけて、その人に近づきたいという気持ちをモチベーションにしてきたように思います。つまり僕にとって憧れは非常に身近なものであり、例えばスポーツをする時でもギターを弾く時でも、英語を話す時でも、常に「こうありたい」というモデルがある訳ですね。父親としても先生としても、1人の大人の男としても理想像としての憧れの対象は常にあるのです。

個人的なことなので参考になるかは分かりませんが、誰かを尊敬しその人に近づこうとすることや、亡くなった人のことを常に心に抱き、その人に常に見守られていると感じたり、もしくはその人の分まで精一杯生きようとすることは、僕たちに大きな力を与えてくれると思います。

最後にこの小説で最も感動的なのは、決して恋人同士ではない小学生の男女がお互いを理解し、支え合っていることです。大人であっても子供であってもみんながそれぞれの問題を抱えて生きています。時として、その問題は1人で抱えるにはあまりにも深刻で、押しつぶされそうになることもあるものです。そ

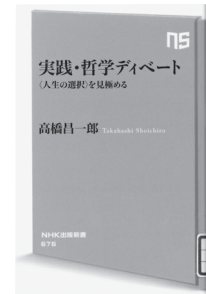
んな時に、自分と同じような境遇にある人や、自分の置かれている状況を本当の意味で分かってくれる人や、自分と考え方が似ている、同じように物事を捉え感じることができる人の存在は本当に貴重だと思います。人は思い悩むと、いつの間にかまるで世界で生きているのは自分1人のような孤独感を感じるものです。そんな時に、自分と似ている人の存在は、生きる勇気と希望を与え、一歩前進しようとする大きな力になるのです。この小説では、子供の2人がなんの打算もなく純粹にお互いに辛い時に支え合う姿が描かれていて、その様子はこれ以上ないほど美しいものだと感じます。

実践・哲学ディベート 〈人生の選択〉を見極める

著：高橋昌一郎

NHK 出版新書

この本は、質の高い哲学の入門書であると同時に、ディベートとはどうあるべきなのかを明確に教えてくれます。テーマは「出生前診断と反出生



主義」、「英語教育と英語公用語論」、「美容整形とルッキズム」、「自動運転とAI倫理」、「異種移植とロボット化」が選ばれています。高校生でも理解しやすく、実際に誰もが実生活の中で遭遇する可能性のある問題が取り上げられているので興味を持って読めると思います。

5人の大学生が順番にそれぞれの意見を述べ、1つの問題に多種多様な意見や立場があることが浮かび上がってきます。様々な意見が述べられることで、より深い本質的な問題が炙り出されることもあります。語り口調で述べられているので、哲学的内容であるにもかかわらず非常に読みやすい印象を持ちました。高校生でも十分に理解できると思います。

僕自身が最も興味深かったトピックは「英語教育と英語公用語論」です。20年以上英語を教えてきましたし、英語を教えることは僕自身の職業でありライフワークであり、趣味の1つでもあります。ここでは英語教育について考察することは、本筋とはかけ離れてしまうので避けますが、常に頭の中で考えていることの1つであることは間違いありません。

この本の中で取り上げられている小学校での英語教育導入については、およそ10年前、この話を初めて聞いた時、僕はほぼ100パーセントで賛成の立場でした。日本人の英語力の底上げのためには、早期から取り組むに越したことはないと思っていたからです。しかし実情はそれほど甘くないということを実感する出来事がありました。

僕の卒業生で小学校の先生がいます。高校生の時は学級委員を務め、いつも快活で小学校の先生にぴったりの女性です。彼女は、英語教育小学校導入と同時に突然英語を教えるように指示されました。特に英語が堪能だったわけでもなく、専門教育を受けたわけでもなかったのです。僕は何度か彼女の苦労話を聞いたり、時にアドバイスをしたりしました。ただでさえハードな職務であるのに、そこに英語を教えることを無遠慮に押し付けられたかたちです。

彼女と話をして小学校の実態を知れば知るほど、1つのテーマにおいても、見方を変えると全く違う景色になるということを知りました。「小学校から英語教育導入賛成」と熱心な英語教師らしく僕が吠えていても、それがいかに机上の空論であり、当事者意識の薄い意見だったか思い知らされたのです。

「美容整形とルッキズム」の章では、学生の白熱した議論の中から、より本質的で抽象的なテーマが抽出される様子が描かれています。まず、みなさん自身は美容整形についてどのような意見を持っていますか？賛成ですか？否定的ですか？この本で紹介されている学生の中に賛成派は少なく、反対派が多く、その理由もさまざまです。親からもらった体

に傷をつけないことが親孝行だという学生もいれば、美容整形は一種の商売になっているという立場の学生もいます。

その議論の中から、そもそも主に女性が美容整形をしたいと考えるのはどうしてなのかという議論に転じます。外見を過度に重要視して社会的な評価をする「ルッキズム」がその根底にはあり、さらにその根っこには男性からの女性支配という差別があるのではないかという本質論となります。かつて中国には「纏足（てんそく）」と呼ばれる俗習があり、女性は足が小さいほど美しいとされ、発育を抑えるために幼い頃から指を内側に曲げて木綿の布で縛っていたようです。実際は、足が小さいことそのものが魅力的だったわけではなく、足が小さいゆえに移動が制限されて、家にいて1人の男性に尽くすことしかできないという結果が、男性にとって都合が良かっただけのようなのです。今の時代では考えられないことですね。

最後に、ご存じの通り現代社会はとにかく多様性重視で、かつて厳格に区別されていたものの差が曖昧になってきています。かつてのルールは曖昧なものになり、あらゆるものがリベラルになり、一言で言うならば「なんでもあり」といった状況に変化してきました。そのような状況下で、自分の意見に固執し、時に自分と違う意見を持つ人を貶める態度をとることは、非常に危険な行為だと思います。筆者はこの「哲学ディベート」の意味を、議論に勝つことではなく、「多種多様な哲学的見解を浮かび上がらせて、自分が何に価値を置いているかを見極めること」だと書いています。

この本からは、僕自身が経験したとおり、立場が違えば多くの違った意見があり、それぞれに説得力があることを認識することができます。最初から自分と違う意見を遮断してしまうのではなく、まずはしっかりと自分と異なる意見に耳を傾けて理解することが大切なのだと思います。互いにそのようなスタンスをとることができて初めて、本当の意味でクリエイティブなアイデアが出てきたり、物事の本質の理解に至るのだと思います。

ホーキング、宇宙を語る

著：スティーヴン・ホーキング

訳：林一

早川書房

みなさんにはいつかは読まなくてはならないと思える本はありますか？僕はありすぎて困っています。普段はあまり意識して生活していませんが、常に「読



みたい本リスト」と「死ぬまでに読まなくてはならない本リスト」が頭の中にあります。

僕はほとんどの本を電子書籍のkindleで読んでいて、電子書籍と紙の両方でも購入できる場合は、電子書籍を選びますが、この本は紙書籍を購入しました。2024年1月の休日に、家族でブックオフに出かけることになりました。そこでこの本に出会ってしまったのです。『ホーキング、宇宙を語る』は僕の「死ぬまでに読むリスト」の最上位ランクに位置していた本で、世界中で読まれている名著です。宇宙の神秘とその可能性を解き明かす人間の可能性を語るこの偉大な本に、何と110円の値札がつけられているではないですか。僕は掘り出しものを発見した喜びと、あまりに評価の低い値段設定に怒りのようなもの感じ、この本の購入を即決しました。

多くの哲学者や宗教が「人間はどこから生まれて、どこへ行くのか」という難問に挑戦し続けてきました。みなさんならこの問いにどのように答えるでしょうか。僕は「人間は星の欠片からできていて、死んだら星の欠片に戻る」が現在の最適解だと思っています。

これはなにも恋人たちのロマンスの話ではありません。もしかりに僕たちの細胞が声を出して話せるのなら、「僕は80億年前の〇〇星雲の核融合で生まれた炭素原子です。恐竜の時代にはティラノサウルスの足でした。それから…」などと話すことと思われまます。その歴史は、我々ホモサピエンスが誕生した20万年前が、ついこの間のことのように感じられるほど途方も無く長い歴史です。

人間と人間社会を丸ごと理解するためには、その土台となる宇宙論、生物学、進化論、脳科学、こういったものを理解することは必須のように思われます。

この本を読んでいて、まず圧倒されるのが、著者であるホーキング博士の探究心と情熱です。意外なことですが、彼がこの圧倒的な才能を発揮したのは、21歳になってからのことでした。その時彼は筋萎縮性側索硬化症という体がどんどん動かなくなっていく病気であると診断され、余命2年を宣告されました。そこで彼は残りの全人生をかけて宇宙について学び、人類の発展に貢献したいと決心したそうです。顕著な研究論文を発表し彼の名が知れわたるようになったのは、その頃からでした。彼は、人間が世界の秩序や存在理由を知りたいという根源的な欲求を持っていることが探求の原動力だと述べています。そして、この強い知識欲こそが探求を続ける理由であり、宇宙の完全な記述がその究極的な目標であるとしています。

ますます不自由になっていく身体のハンデに屈することなく、宇宙研究に全人生を捧げた76年の生涯は、多くの人に感動を与えるほど情熱的なものだったと思います。そして

自然科学の研究が彼の専門でしたが、彼が本質的に追い求めてきたものは、古代ローマの哲学者たちと同じような、人間の存在のど真ん中を問うものであったことに気付かされます。彼の研究の功績は、今後も我々人類の中で決して風化されるものではないでしょう。

この本の中で、個人的に最も興味深かったのは、全体の中ではややマイナーな印象のある、「空間と時間」という章です。僕はせっかちな性格で、常に時間に追われている感覚がぬけませんし、自分で自由に使えない時間に我慢ができません。最近では死をも身近なものに感じ、自分の人生の持ち時間を意識するようになりました。時間は常に僕たち人間に、もっと言うと全生物に平等に与えられた絶対的な存在です。今まで僕が読んだ本の中では以下のものが非常に読み応えがあったので、興味のある方はぜひ手に取ってみてください。

• 『時間は存在しない』

カルロ・ロヴェッリ 著

• 『いつも「時間がない」あなたに』

センディル・ムツライナタンなど 著

しかし僕たちが当たり前だと思っている絶対時間の感覚は間違っていることがこの本で述べられます。僕らは、空間と時間は、固定された競技場のようなものだと考えています。競技場内で物体が動き互いに影響しあったとしても、その場の空間と時間はひたすら持続し、影響を受けないと考えます。時間だけに限定して述べるならば、絶対的な時間というものが存在し、それはどの空間において

も変わることはなく、ちゃんとした時計を持ってさえいれば、どの空間にいても測定する時間は同じになると思込んでいます。幸松は何を当たり前のことを言っているのだと思うかもしれませんが、この考えは誤っているようです。地球上でも、その重力の影響を受けて、地球に近い、つまり下にある方の時計の方がゆっくり進むことが証明されています。

彼は、双子のパラドックスについて、双子の一方が山の上で、もう一方が海辺で暮らす場合と、一方が光速に近い宇宙船で旅をする場合を例に挙げて説明しています。相対性理論によると、時間はお互いの相対的な位置と運動速度によって変化するため、再会したときには年齢に差が生じます。この現象がパラドックスに感じられるのは、僕たちが絶対的な時間が存在するという固定観念を持っているからであり、相対性理論では、絶対的な時間は存在せず、個々の時間尺度はそれぞれの位置や運動によって決まると述べています。

他の書評でも書きましたが、宇宙について学ぶ時、いかに僕たちが地球というローカルな場所において、ローカルな感覚や常識に支配されていて、それらに何の疑問も抱かずに普段生きているかを痛感させられることがあります。例えば、宇宙空間に一步踏み込めば、酸素はありませんし、無重力で上下左右前後といった感覚も失われます。そして時間も同じようにローカルなものなのです。僕らは「時間を大切にしよう」だとか「時間厳守」だとか、もっともらしいことをよく言いますが、その本質についてはなにも分かっていないのです。

宇宙の運命について、博士は当初、宇宙が収縮する際には無秩序が減少し、秩序のある状態に戻ると考えていました。彼は、収縮期の人々は時間を逆行するように、死から生まれる方向へ、つまり若返っていく生涯を送ることになると推測しています。

これらの説明は、理屈ではなんとか理解することはできますが、現実問題として実感をともなって理解することは簡単ではありません。僕は一歩立ち止まって考えてみました。絶対時間は存在せず、僕らが当たり前だと思っている時間の概念が非常にローカルだと分かったところで、僕らのような凡人が「わあ、すごい」で終わらず、何かを学びとるためにはどうやって頭の中を整理すべきなのでしょう。僕は以下のように考えました。「時間は空間によって、人によって、さまざまな形で存在し得る。ひょっとするとそれぞれが、全く違う時間感覚で生きている可能性もある。だからこそ今、自分がいる空間に流れるこの時間を大切にしよう。」と。ローカルではない本質を知ること、その奥深さや、本当の味わいを享受することができるのだと思います。

それにしても、繰り返しになりますが、我々が持つ時間感覚がローカルであると思うことはそう簡単なことではありません。それほど、僕らの日常は、そして生命そのものも時間によって絶対的に支配されています。宇宙と地球は、よく並べられて語られますが、実はスケール感が全く違います。僕らが見ている太陽の光は、実は8分前のものです。そう考えると宇宙の途方もない広さを感じるができるような気がします。

僕はこれまで、いろいろな本を読んだり、時に生命の誕生の場に立ち会ったり、死に直面したりして、自分なりの死生感を形成してきました。そんな中で、僕が今お気に入りなのが、「人間は、ビッグバンは今も終わることのない果てしない爆風の中を、ほんの一瞬だけ生きる存在」というものです。何の本で読んだのかは失念しましたが、今僕はこれと非常に近い感覚で毎日を生きています。

ホーキング博士によると、1929年のハッブルの発見は、遠い銀河ほど地球から速く遠ざかっているというものです。この発見は、宇宙が静的なものではなく、銀河間の距離が絶えず広がっている、つまり膨張していることを示していると述べています。

僕らが一般的に考えている静的な宇宙像はどうやら間違っているようです。地球が自転・公転をしているどころか、宇宙そのものが、その始まりの勢いを失うことなく、膨張を続けているのです。それを知ると、僕らの存在は、壮大な宇宙空間と宇宙時間の中で、ほんの一瞬だけ輝く儂い存在であると感じ、心に抱いている不安や悩みが、なんと小さいことであろうかと感じざるをえないのです。そして一瞬一瞬が愛おしく美しい瞬間であることを思い知らされるのです。

やや話はこの本から脱線しますが、最新の物理学を知ると、その内容があまりにもぶっとなでいることが分かります。僕は専門ではないので、量子力学や超弦理論は何とかぎりぎりのところで理解できますが、最先端の研究である「マルチバース」は凡人の理解を超えています。その研究を通して、我々の知る宇宙が無数に存在するということが真実らし

くなってきたのです。どうやら我々のような知的生命体が存在する確率は、宇宙の創造主の存在を信じるか、無数の宇宙が存在するかのどちらかしかないようなのです。

最後になりますが、みなさんは「パラダイムシフト」という言葉を聞いたことがありますか？これは、その時代に当然と考えられていた物の見方や考え方が劇的に変化することを指します。宇宙の探求は、劇的なパラダイムシフトをこれまでももたらしてきました。地動説が正しいと分かった時も、宇宙が太陽系だけでないことが分かった時も、人間の価値観や死生感には大きな影響を受けてきました。これからも宇宙についての発見は、我々人間存在の本質を知る大きなきっかけになることは間違いないでしょう。宇宙論や物理学に関心のある人は是非読んでみてください。

脳はなにげに不公平

著：池谷裕二

朝日新聞出版

世の中で「常識」として信じられていることを無防備に鵜呑みにして、がんにがらめになってしまうことは、非常に危険だと個人的には考えています。大



切なことは、常識としてこれまで学んできたり、身につけてきたりしたことを、「本当なのかな」と問い直すことだと思います。大人になり社会に出るといろいろな人に出会います。世間の常識に囚われてしまって、その中でしか物事を判断できなかつたり、行動できなかつたりする人がいます。個人的には、そういう人は創造性に欠けていて魅力的には映りません。どこかみんなと同じで個性に欠け、何を言っても本音ではないような印象を受けることがあるのです。また、日本では常識だと思われていることが世界的に見ると非常識であることも多いですし、20年前に常識だと思われていたものが、現在は通用しないことだってたくさんあります。

これまで多くの本を読んできたことも影響していると思いますが、とにかく僕は世の中で一般的に常識だと思われているものには、まず疑問を持つようにしていますし、なぜそう考えられているのかという本質を理解して納得したいと思っています。また、それが何の根拠もない無意味なものなら、他人に迷惑をかけない程度に無視するようにしています。空気を読むようなことはしません。

人間の思考や行動は、動物としての本能や遺伝子や脳の機能に大きく影響を受けています。その影響は非常に大きく、社会や文化が作り出した常識が、決して太刀打ちできるものではないように思います。

僕の印象では、2000年頃から急速に脳科学に関する本がどんどん出版されるようになり、脳科学が一般の人にも認知されるようになったように思います。脳科学の歴史を簡単にネットで調べてみても、1990年代から急速に脳の研究が進んだことが分かります。その中でも、日本の研究者である小川誠二氏はMRIの技術を応用し「fMRI（機能的磁気共鳴画像法）」の原理を開発し、脳活動の計測に大いに貢献したようです。脳科学の進歩は、僕たちの日常生活にも幅広く影響を及ぼしていて、例えば睡眠や記憶やうつ病についての考え方も大きく変わりました。僕が関わっている英語教育においても、その教授法がひと昔前とは大きく変化したのは、脳科学研究によって今まで解明できなかった言語習得のメカニズムが分かってきたことが大きく影響していることは間違いありません。

前置きが長くなりましたが、人間の本性を理解する上で脳科学の本を読むことは大変有意義だと思うのです。「人間とは何か」という多くの哲学者が挑んできた問いの答えに、大きく近づくことができるものだと思うのです。この本は非常にポップなタイトルですが、人間の本質を知るための名著として多くの方が紹介しています。最新の科学論文を筆者の感想と解釈を加えて紹介するような形式で書かれているので、非常に読みやすいので高校生にもお薦めできます。

この本の中で印象に残ったことの1つは、「平均より優れていると思う衝動」についてです。人間には「ベターザンアベレージ効果」と呼ばれる、自分は平均よりは優れていると勘違いする傾向が普遍的に見られることが述べられています。みなさんはどうでしょうか？みなさんは平均に比べて賢いですか？平均に比べて外見が優れていますか？特に面白いものとして「平均に比べて公平に振る舞っていますか」という質問には、ほぼ100パーセントの人が「はい」と回答するという研究が紹介されています。

特に日本では顕著かもしれませんが、世の中に平均は溢れています。勉強、スポーツ、身長、体重、仕事の成果から性格まで、なんでもかんでも平均を算出し、それと比較することで一喜一憂したりします。

この本によると、人間は、進化の過程で自分を勘違いして実際以上に高評価をする特性を獲得していったそうです。そのポジティブな自己像や健全な幸福感と自己肯定感が、現代の複雑な社会で成功するのに役立つとのこと。そう考えると、人間がこの能力を獲得していったことには生物学的には意味があることですし、無意味に自信満々の人を見ても不思議に思うことがなくなります。やはり「根拠のない自信」をもつことは人間としておかしなことでもないし、むしろ生物の進化という視点では強みであることを学びました。

みなさんはふとこんなことを思ったことはありませんか？「自分が見ている色って他人からも同じように見えているのだろうか？」と。僕は自意識が芽生え始めた中学校時代に

こんなことを考えたことを覚えています。脳による認知は人それぞれです。僕たちは脳があるからこそ、世界を眺めることができるし、世界を解釈できるのです。

筆者は、色を物理的な「实在」ではなく、人間が光を認識することで生じる「知覚」と説明しています。この考えは、ニュートンが「光線自体に色はなく、色の感覚を生じさせる力があるにすぎない」と述べたことや、ゲーテが「色は人間から離れては存在し得ない」と記したことによって補強されています。

つまり僕たちが、当たり前のようにみんなと共有していると思いついて色であっても、実は他人が同じように見ているとは限らないということです。これは色だけに限ったことではありません。ありとあらゆることを、僕たちはそれぞれの脳を通して認知しています。人と人の脳同士は決して接続されることはありませんので、言わば脳は孤独なのです。

そう考えると、家族や友人といった親しい仲間であっても意見の食い違いや誤解が生まれるのは当然のことだと思えますし、人はそれぞれが違った方法で世界を見ていることを心から理解することができるのです。

スイスのヒルズ博士とヘルトヴィッヒ博士の記憶についての論文もとても面白かったです。彼らの論文のタイトルは「なぜ我々はこれ以上賢くならないのか」というもので、人間の総合的知能レベルが実は何千年も進歩していないことが述べられています。この本では以下のように述べられています。

「著者らは『記憶は諸刃の剣だ』と言います。実際、記憶力が病的に高い患者は、現実と脳内の世界が区別できず、日常生活に差しさわ

りが出ます。そこまで極端な例を出さずとも、一般に『記憶力と想像力は反比例する』と考えられています。」

確かに毎日の生活は楽しいことばかりではありませんし、深い悲しみが数日で忘れ去られるのではなく、何年も続くのなら人生は本当に辛いものになってしまいます。実際にトラウマやPTSD（心的外傷後ストレス障害）などの精神疾患で苦しんでいる人の中には、極端に記憶力が良い人が多いそうです。

テスト前や受験を目前にした学生は、自分の記憶力の無さに失望するかもしれませんが、記憶力はあればあるだけ良いというものではないようです。やはり僕たちの脳はちょうど良いようにチューンアップされているのです。

最後に直感について述べたいと思います。この本のような脳科学の本を読んでいると、直感には意味があるという内容のものが多く、その影響で今では直感を強く信じるようになりました。この本にも以下のように書かれています。

「自然界では直感的な判断は命に関わります。ライオンに追われたシカは逃げる方角を瞬時に決定します。理詰めや熟慮する時間はありません。判断を誤れば餌食となります。野生の世界では瞬発的な直感が正しかった動物だけが生き延びることができたはずです。」

ライオンやシカまではいかないまでも、我々人間にも長期間の狩猟採集時代を生き抜いた動物としての直感が働いているはずで、僕たちは自分たちのことを、他の動物とは極端に違う特別な知性を備えた存在だと思いがちです。特殊な知性をもつ自分たちの意

思決定が、他の動物のように直感で行われてはいけないと思いがちです。しかし脳科学の研究は、僕たちの直感は生物進化の産物そのもので、表層的な知性や常識などまったく通用しない力強いプロセスであることを教えてくれます。熟考して物事の意味決定をすることも良いですが、時には自分の直感を信じて大胆な決断をすることが良い結果につながることもあるのです。

ORIGINALS 誰もが 「人と違うこと」ができる時代

著：アダム・グラント

訳：楠木建

三笠書房

僕自身は「変わっている人ですね」とか「個性強いんですね」といった言葉を褒め言葉として捉えています。僕のこのマインドセットが確立した理由は



主に2つあります。1つは、子供の頃から自分が「カッコいいな」と思える人のほとんどは、普通とは程遠い超個人的な人ばかりだったからです。もう1つは、北海道の田舎で幼少期を過ごしたので、そこから抜け出して新たな道を切り拓いていくには、人と同じことをしている訳にはいかなかったのです。

この本の著者アダム・グラント氏は、1981年生まれのアメリカの心理学者で、彼の書いた本はどれも世界中で高評価を得ています。今最も勢いのある作家の1人だと思います。僕はベストセラーになった『GIVE&TAKE』を読んで彼のすごさを知りました。

今回読んだこの本も、テーマとしてはよくあるものなのですが、アダム・グラント氏にかかると他の人とは違う切り口で、かつデータや研究に基づいて、客観的で説得力が桁違いです。

僕が最も引き込まれたのは、誰もが知っているキング牧師の有名な演説についての話です。あのスピーチの中で最も有名な“I have a dream.”はなんとアドリブだったそうなの

です。

みなさんは「先延ばしをする」と聞いてどのようなことをイメージしますか？多くの人は、ネガティブなイメージを持っていて、極力避けるべきものとして認識していることと思います。しかしこの本では、「先延ばし」は他の人と差のある「オリジナルな」人になる性質として以下のように述べられています。

「先延ばしのもう一つのメリットはここにもある。それは、即興で何かをする余地が残るとのことだ。かなり前から計画しておく、用意しておいた構成に凝り固まってしまう、視界にふっと現われるかもしれない創造的な可能性をシャットアウトしてしまう。」

公民権運動でのあの演説は、実は何週間も前から構想が練られていて、何度もテーマや方向性の軌道修正がなされました。しかも、前日にも大幅な書き直しがなされ、当日になってようやくその原稿は完成しました。しかし、面白かったのはここからで、完成したはずのその原稿に、例の“I have a dream.”はなかったのです。キング牧師が話し始めた時ですら、その4単語を発する意図は彼の中にはありませんでした。演説が始まって11分が経過したころ、彼の後ろにいたゴスペル歌手が「夢をみんなに伝えて！」と叫びました。それを聞いたキング牧師は、その時の感情に任せて、予定にはなかったこの4単語を発したのでした。なんてカッコいい話なんだと思いませんか？

ここから見えてくるのは、キング牧師のセンスということではなく、数週間に及ぶ準備とその間の試行錯誤、そして最後の最後まで

考え抜くことの重要性なのです。“I have a dream.”は即興で彼の中から出てきたものであることに間違いはありませんが、同時にこれ以上できないと思われるほどの準備と試行錯誤がなければ生まれなかったものだったでしょう。さらに言うと、だからこそ多くの観衆を魅了し、この演説の代名詞として何十年も語り継がれているのだと思います。

次に、僕になかった視点として驚かされたことは、他の人と違うことができる人ほど、しっかりとリスクへの対策をしているということです。何事にも思い切りよく挑戦できる人は、そうでない人より向こう見ずで勇気があるというわけではないようです。筆者は次のように書いています。

「ある分野で危険な行動をとろうとするのなら、別の分野では慎重に行動することによって全体的なリスクのレベルを弱めようとするのだ。リスクのポートフォリオという概念を考えると、人生のある部分でオリジナルな行動をとりながら、その他の部分では標準的な域を出ない人が多いというのも納得できる。」

この本の中で、他人とは違うオリジナルになるために、特殊な才能が必要なわけではなく、ごく普通の人にも十分に可能性があることが強調されています。大切なことは、時間や自分の体力を何に使うかの配分を、なんとなくみんながやっているからという理由でそうするのではなく、戦略的に自分独自の配分をすることなのです。面白いことに、世の中でユニークだと言われている人や、外見的には大胆で自信満々に見える人は、実はそうではない人と同じように不安や自己不信と戦って

いることが指摘されています。また、ある一面においてはリスクを顧みず大胆に挑戦できるのは、その挑戦に集中できるように、その他のことがリスクにならないようにしっかりと準備ができていくということなのです。換言するならば、リスクへの配慮の分配が他人と違うだけなのです。

この本では、ユニークな成功を収めた人には、兄弟姉妹が多く、その中でも年下である人が多いことが指摘されています。人生の多くのことを、先駆者になることなく、身近にいる年上の兄や姉がすでに歩んだ道を安心して進むことができたことが原因だろうと書かれています。僕自身の経験からも、趣味でも仕事でも何においても、なかなか真似することができないような成功をしている人には、その挑戦を支える恋人や友人や家族の存在がある人が多いように思います。

ここからはやや個人的なことになりますが、冒頭にも述べた通り、僕は中学生くらいから他人とは違う存在になりたいと思って生きてきたので、職場においても友人付き合いでも、ユニークな存在の人に魅力を感じます。ここでみなさんに質問です。親しみやすく周りや協力できる先輩と、他者や慣習に立ち向かうトゲのある先輩と、どちらについていきたいですか？僕が変わっているのかもしれませんが、迷わず後者の先輩を選びます。この選択について、本文にも以下のように述べられています。

「研究によると、現状に異議を呈したことのある管理職は、新しいアイデアに対してより寛容で、他者から提案があっても、それを脅威ととらえない傾向があることがわかって

いる。』

経験上分かってきたことは、周囲にどう思われるかを考えずに誰にも媚を売ることなく自分の意見をはっきりと言える人は、同じように自分の意見を主張する人を許容できる器があるということです。それを認めないことは、自分を認めないことと同義ですからね。逆に、周りとは協調し、基準に従うことを重視しすぎると、対人関係を乱すことを避けようとするあまり、本質を見失うことがあります。

僕は表面的なことや他人からの評価には興味がないので、このような見かけだけの関係性にならないように常に努めています。僕も年齢的に、職場ではもちろんですが職場以外でも年下の人たちと接する機会が増えました。表現は難しいですが、この本で紹介されているように、一般的な優しい先輩になろうとするのではなく、自分の信念を貫き通せる「トゲのある」先輩であり続けたいと思うのです。本で紹介されている、経営管理学の研究者であるカール・ウェイックの次の言葉が非常に印象に残りました。

「自分が正しいつもりで議論し、自分が間違っているつもりで話を聞け」

最後に、今回の書評では個人的に感銘を受けた内容にフォーカスして、一般的なものには触れずにきました。それは、この本に書かれている「人とは違う」ことをするマインドセットを僕が経験上すでに身につけていたからです。しかし、1度きりの人生をより幸せなものにしたいと願うなら、どんな人にとっても、この本から学ぶことは大きいだろうと思います。おそらく、オリジナルになろうとして自分の人生を主体的に歩もうとすること

は、そもそも逆風の中を歩いていくことに近いのだらうと思います。しかしそんなことは慣れてしまえばなんてことはないですし、「俺はこの道を自分で選んだんだ」という確かな手応えを感じながら歩いていくことはスリリングで楽しいものだと思います。

決定力！ 正解を導く4つのプロセス

著：チップ・ハース ダン・ハース

訳：千葉敏生

早川書房

最初から最後まで面白くてどんどん読み進めてしまいました。リーダーシップについて興味を持っていて、何かを学びたい人や、中学校や高校



の部活のキャプテンや大学サークルの幹部のような人、企業の管理職の人。そういった大切な決定をしなくてはならない人にとって、この本は重要な役割を果たしうるだろうと思います。みなさんは「決定力」と聞くとどんなことを連想するのでしょうか？例えば政府が重大な決定をなかなかできずに、対応が後手に回っているような時に「あ～なんて決定力がないんだ～」などと漏らしたりしますよね。

みなさん自身の決定力はどうでしょうか？たとえ高校生や中学生であってもそれまでの人生でリーダーとして何かを決定しなくてはならなかった場面は何度かあったはずです。今回は僕自身の経験を紹介しながら、この本で印象に残ったことを述べていこうと思います。

自分で言うのは気が引けますが、僕自身は決定力がある方だと思っています。客観的に自分を分析するなら、「スピーディだけど強引」な決定をしがちです。正直言って物事を判断したり、他者と意見を交換したりするの

はやや面倒だと思っています。また、どちらでもいいような決定に時間を割くのは貴重な自分の時間をもったいないと思っています。

僕は普段からどうでもいいことをあれこれと考えながら生活していて、朝起きてその3分後には集中力マックスで読書や仕事を始めることができます。そのせいか、日常的な話し合いや進行の遅い会議は、まるでスローモーションのように感じるのが時々あります。答えが分かりきっている話し合いから心が完全に離れてしまって、他のことを考えていることも少なくありません。それで何度も失敗し反省してきましたがなかなか変わりませんね。

中学時代の僕の失敗を紹介します。中3の春頃だと思いますが、野球部のキャプテンだった僕は、合唱部の男性パートを歌う何名かに選ばれてしまって、放課後は合唱の練習をしてから野球の練習にむかうという日々を何日か続けていました。そんなある日のこと、理由はよく覚えていませんが、ほぼ準備はできているにもかかわらず、なかなか合唱の練習が始まらず、みんながどうでもいいことを話しはじめ、時間だけが過ぎていきました。少しでも野球をしたかった僕は、いらいらがピークに達し「おい、早く練習始めてさっさと終わりにしようぜ」と大声で叫んだのです。その場は凍りつき、翌日には合唱部の女子が2～3人僕のところにやってきて「部長の〇〇が傷ついたので謝って！」と言ってきたのを覚えています。

集団における意思決定は本当に難しいものです。ビジネスにおける意思決定の失敗は、会社に大きな損害をもたらすこともあります

し、長い年月をかけて築いてきた人間関係が、そのたった1回の失敗のせいで破綻することだってあります。ましてや現代社会は多様性が尊重され、ますます唯一の回答を、自信をもって導き出すことが難しいのです。ときには自分の意見を固持するのではなく妥協が必要なことがあるのも確かです。この本では、以下のように述べられています。

「むしろ、妥協自体に価値があることもある。多種多様な意見を聞き、リスクを緩和しているという証だからだ。」

また、集団での意思決定のプロセスに時間をかける意義として、この本が伝えようとしていることは、僕にとっては意外なものでした。その意義は「自信」だと、この本では述べられています。時間をかけることで、偏った情報だけを集めて自分の考えを過信するのではなく、多様な意見をしっかりと考慮した上で最終決定をしたんだという自信。僕にはなかった発想だったので、読んだ時は驚きで声をあげそうになりました。確かに時間をかけてあらゆる可能性を考え抜いた結果として時間がかかってしまった決断なら、自信をもつことができるでしょうし、仮にその決断が誤りだったとしても後悔は少なくなるでしょう。

社会人として働く人なら誰もが経験することですが、集団での意思決定は簡単なことではありません。僕がリーダーを務めるグループの中では、まずは少人数のチームで企画を練ってもらい、全体では基本的にその承認と周知徹底に時間をかけるようにしています。そうしないと会議はどんどんと増えていき、その度に全員が1～2時間の時間を割かねば

なりません。

大人数で議論をしていて、よくあるのがどんどん話し合いが本質から遠ざかってしまっていて、議題のゴールに全く近づくことができないことです。多くの人が重要度の低いものに着目しはじめると、問題の解決策は全く見い出せないので注意が必要だと思います。筆者は本の中で次のように言っています。

「スポットライトが当たっている情報だけで、正しい判断が下せることはめったにない。でも、私たちはスポットライトを動かすのをしょっちゅう忘れてしまう。それどころか、スポットライトの存在自体を忘れることもある。小さな光の輪の中にずっと住んでいると、その外側に広い風景が広がっていることを忘れてしまうのだ。」

「スポットライトを当てる」という感覚は、ユニークですがとても重要なものだと思います。上の一節を端的に言い換えるなら、「時に多様な意見にスポットライトを当て、時に細部にもスポットライトを当てながら、全体にもライトを照らし続ける」ということだと思います。

本では「ズームイン」と「ズームアウト」という表現もたくさん使えます。僕が特に興味を惹かれたのは「ズームイン」の手法です。個人的な感想ですが、日本には、僕も含めてですが、この感覚が今後重要になってくるのではないかと感じました。「現場」という日本語がありますが、「現場としては助かります」とか「事件は現場で起こっているんだ」のようにして使われますが、「ズームイン」とは、換言するならば「現場で実際に経験する」とか「本気で現場視点で物事を考える」

ということになるのだと思います。本には以下のような一節があります。

「状況にクローズアップし、五感を使って調査してこそ、最善の案が生まれると考えられているからだ。物事を十分に理解しないまま改善することなど不可能なのだ。」

僕が行動を共にしてきたリーダーたちを考えてみると、この「ズームイン」の手法が得意な人もいれば、全くその手法を備えていない人もいます。僕自身にも当てはまることですが、リーダーとしてのスキルを身に着けなければならぬ人にとっては、物事に意識的に「ズームイン」し、自分の判断が正しいのか確認することは大変重要なことだと思います。

もう1つこの本の中で面白かった言葉は「ウーチング」です。筆者は、この言葉について、「やるかやらないか」の二択ではなく、「ちょっとだけやってみる」という戦略だと説明しています。この方法を用いることで、本格的に行動を起こす前に、仮説の現実性を確かめるための実体験を得ることができると述べています。

この本で言う「ウーチング」とは、まずは小さな実験からやって検証してみようということなのです。この手法のメリットは2つあって、1つは、最初から判断や行動を「実験」のように捉えているので、フィードバックして改良したり場合によっては撤退したりする準備ができていることです。もう1つのメリットは、新しい挑戦のハードルを下げてくれることです。最初から少しだけつまみ食いしてみようという態度で臨むなら、様々なことをより気楽に挑戦することが可能になりますし、

多くの挑戦をすることによって成功を掴む可能性も高くなるはずですよ。

最後に、僕は学校では学年主任をしており、スローガンを「パッション」にしています。「教える」行為も「学ぶ」行為も、情熱がなければ成り立たないと思っているからです。情熱が必要なのはなにも教育だけではありません。人が成長したり、挑戦したり、物事を決定したりするには、その一歩を踏み出させる情熱が必ず必要になるのです。世の中はどんどん便利になり効率化されていきます。僕たちが日常的に行うどんな判断だって、スマホでインターネットを開けば、そこには最適な解答らしきものをいとも簡単に発見することができます。しかし僕たちは機械ではありませんし、時には一時の感情や直感によって、非合理的な決断をする方が幸せになれることだってあると思っています。

筆者は、合理的な側面を取り除いた意思決定の核心には感情があると述べています。「あなたにとっての原動力は？」といった感情に訴えかける問いに答える際、僕たちは論理的な機械としてではなく、自身の情熱や価値観、信念、欲求に基づいた人間として判断を下します。最終的に、意思決定を動かすのは感情であると結論づけているのです。

最後はなぜかうまくいくイタリア人 著：宮嶋勲

日経ビジネス文庫

現代では「多様性」が強調され、ことあるごとにこの言葉を見聞きします。個人的には多様性を学ぶことには大きなメリットがあると思っています。



そのメリットを端的にまとめるなら、多様性を知ることで自分の考え方や行動を変えることができますし、変えないにしろ、多くの選択肢からこの選択をしたのだという自信を得ることができるということになるでしょう。

人生には決まったレールはありません。また「ここを歩くべきだ」というフェアウェイがある訳でもありません。しかしながら、僕らはあたかも幸福を約束してくれるフェアウェイがあって、そこを歩むべきであるかのように教えられることがあります。この考え方は、多様性を知り、自分と違った考え方を受け入れる妨げになることがあります。

僕は数年前に約4週間をフィリピンのセブ島で過ごしました。フィリピンでは男女にかかわらず、働きに出ない大人はたくさんいるそうです。日本では「ニート」と呼ばれる人たちです。そこでは兄弟姉妹の中で、1人か2人がお金を稼いできてくれて、それで生活できればそれでいいという考え方が根強く残っているそうです。

本校の姉妹校があるオーストラリアのタウンズビルという町には6、7回訪れました。

その町ではどの学校でも、授業終了近くなると学校の前の道路はお迎えの車で埋め尽くされ、下校時間になると一斉に生徒が学校を出ていきます。その30分後には先生方も次々と帰宅し始め、最後の先生が、大抵の場合、校長先生か教頭先生でしたが、宿泊しているホテルに向かうためにタクシーを待っている僕たちに挨拶をして、去っていきます。16時30分には学校は完全に静寂に包まれます。また、その町で、日曜日の午後買い物をするとうとすると多くのお店が閉まっていることに気づくはずです。そこに住む人たちにとっては、日曜日の午後は、大切な家族と過ごす時間なのだそうです。家族への愛は会話の中にもにじみ出ていて、僕らが家族のことを聞くと、あからさまに“I'm proud of my son.”などと始まり、延々と自慢話を聞かされたことが何度かあります。日本で同じことをすると、相当な変わり者だと思われるでしょう。

僕たちは、知らず知らずのうちに、社会や学校や親から価値観を刷り込まれます。その刷り込みから脱却することはそれほど簡単なことではありません。

筆者は、日本では、子どもの頃から「脱線」や「寄り道」をしないように教えられ、本来の道から外れることを叱られて育つため、寄り道を楽しむことに罪悪感を抱くようになったと述べています。その結果、目的を達成する能力は高いものの、その過程を楽しむことができなくなってしまったと分析しています。

正しいことだと教え込まれたことに疑問を抱く時、僕らは疑問を抱くこと自体に罪の意識を持つことはよくある気がします。例えば、

自分が完全に気に入っているモノを購入する際に、お金を使う行為そのものに罪悪感を感じたり、友人の恋人を好きになってしまった自分が嫌いになったりします。しかし多様性を知ることで、その罪の意識はどんどん薄れていき、時には完全になくすことができます。

この本は決してイタリア人と日本人を比較してその優劣を決めようとするものではありません。しかし、時に両極端とも言える両者の比較は、物事の捉え方や人生の価値観の幅の広さを教えてくれます。

筆者は、すべてが完璧に機能することは本来の目的ではなく、それによって人が幸せになることこそが重要だと述べています。効率や完璧なサービスを追求しすぎると、働く人にストレスを与え、豊かな人生を妨げてしまうことがあると指摘しています。そして、日本人が持つ完璧主義は素晴らしい長所であると認めつつも、イタリアでの経験から、もう少し肩の力を抜いて、身近な幸せを大切にすることも良いのではないかと提案しています。

日本は確かにいろいろな面において、効率化が図られ、無駄に見えるものを排除し、リスクを極限まで避けるためにマニュアル化が進み、世界の中では非常に組織化された社会だと評価されていることは確かです。しかし同時にそれが“too much”な状態になり、幸せになるための仕組みが多くの人を苦しめる結果になっていることもあるのです。例えば、日本では社会は原則的に“punctual”（時間厳守）で動いています。電車も地下鉄も数分遅れただけでも乗客は不満を感じ、JRやメトロはその遅れの原因を説明し、時に謝罪しな

くてはなりません。接客サービスは客に最大限に敬意を払い、まさに「お客様は神様」の精神で業務に当たることが望まれ、客が従業員に対して高圧的な態度をとる姿を頻繁に目撃することがあります。時にこれらは「時間を守らなくてはならない」という重圧となり、「時間を守れない人を許せない」というマインドを形成します。「サービスは完璧でなくてはならない」という重圧となり、「完璧なサービスでないと許せない」というマインドを形成します。この状況は決して健全とは言えないでしょう。

日本人の中にもイタリア人っぽい性格の人もいるでしょうし、イタリア人の中にも日本人っぽい人もいます。国や文化の違いと言うより、個人差と言っても良いのかもしれませんが。みなさんはどうでしょうか？

僕自身は、生まれつき日本人っぽいところ、この本で述べられているイタリア人っぽいところを両方持ち合わせています。また、生きる年数を重ね、さまざまな経験をする中で、半ば意図的に日本的というよりイタリア的な発想に変化していったものもあります。例えば旅行をするにしても、かつてはきちんと計画を立てて無駄なく効率的に動き回りたいと思っていましたが、今はあえて計画を立てずに、偶然に出会う人やものとの出会いを精一杯楽しむほうがスリリングだと思っています。何が起こるか分からないのがそもそも生きることの本質でしょうし、目の前で起こることを、その時その時で、対応したり楽しんだり悲しんだり、時に感動したりすることは、人生の楽しみの醍醐味でもあるのではないかと思うのです。

最後に、まとめには全くなりませんが、この本を読んでいる間ずっと感じていたことを2つ述べたいと思います。

まずは、人生には「ゆとり」や「余裕」や「余白」が必要だということです。1つの考え方に固執し、時間管理や自己管理をストイックなものにしすぎては、不幸になることがあります。自分を肯定し、スローダウンして休息をとったり、自分を甘やかしたり、時に嫌なことから逃げ出したりすることも大切です。

もう1つは、自分の「感性」を大切にすることです。自分が好きだなとか気持ちいいなと思うことは、頭というより身体全体でそれを感じているはず。その自分だけの感覚は、社会が創り出したどんなものよりも、みなさんを幸福な人生へと導く道しるべになってくれるはず。その感性を磨くために何か特別なことをする必要はありません。日常の自分の意識の流れを感じてみましょう。日常の中に底光りする美しさを探してみましょう。それだけでも感性は十分に磨かれていくと思います。

死者を弔うということ

世界の各地に葬送のかたちを訪ねる

著：サラ・マレー

訳：椰野みさと

(草思社)

今回のテーマは「死」についてなので、ややシリアスな内容になります。最初にお断りしておきますが、生死に関わる深刻な問題について、あえて考え

ないようにしている方は、この書評を読まなくて結構です。また、僕はこれから、普段の生活の中では語ることのない、ごく個人的な死に関することを述べていこうと思います。他人の死にまつわる非常にナイーブな事柄について、僕が主観的に書くことを不謹慎だと思う方もいるかもしれませんが、そういった方にも、申し訳ない気持ちはありますが、これより先は読まないでいただきたいのです。

みなさんは「葬儀」と聞いたらどんなものを連想しますか？日本では、通夜と告別式という儀式が行われ、遺体は火葬されることが多いですね。これらは形式的であって、あまり独特なものを見ることは少ないのではないのでしょうか。この本では世界各地の様々な葬儀のあり方や埋葬の仕方が述べられています。

どの地域においても、大きな感情の振幅を伴う死との向き合い方を1つの形式に標準化することによって、人々の感情を抑制しようとしているのだと考えられます。しかしながら、形式的であるがゆえに抑えきれない即興



的な感情表現が非常に感動的で、その人の死者への思いを鮮明にすることがあります。

僕の祖母の葬儀でのことです。遺族代表のスピーチの最中に、頑固で弱いところをほとんど見せなかった父親が、「みんな、ばあちゃん、ばあちゃんって呼びますが、私にとっては母親で…」と言葉を発した直後に、嗚咽して泣き始めました。僕は、息子として父親の涙をこのたった1回しか見たことがありません。父の妹である叔母は、みんなで最後の別れを告げ、亡骸が火葬炉に入っていこうとする時、誰の目をはばかりことなく「おばあちゃん。今までありがとう」と大声で叫びました。

自分の家族のことですが、この時の光景を思い出す度、僕は心の奥深くが揺さぶられるのです。普段は表面化することのない3人の親子の絆、親への愛情、2人の感情の高ぶりを、はっきりと感じ取ることができ、それは僕にとっては忘れることができないほど人間的で感動的なものでした。

この本の作者は、自分の父親の死をきっかけに、人間がどのように亡くなった仲間を見送るのかといった疑問や、有限である我々の命と自らがどう向き合っていくのかという疑問に、真正面から対峙しようとしています。特に後半の「自分の命は永遠ではない」という感覚は、高校生のみなさんにはとても大切なものだと思うのです。それはなぜかと言うと、自分の命が有限であると自覚することは、「何かを学びたい」とか「もっとうまくなりしたい」とか「昨日より今日を充実させたい」といった、成長へのモチベーションの源だと思うからです。もし仮に命が永遠だったなら、僕たちが今日や今を生きる特別な意味がなく

なってしまいます。僕たちは終わりがあることを明確に自覚してこそ、今を大切にしようと思えるのだと思うのです。

筆者は次のように言っています。

「誰か愛する人を亡くしたとき、そのことは私たちが悲しみと喪失感で満たすばかりではなく、私たち自身の死の影をより鮮明なものにする。父の死と時期を同じくして、私自身もまた、これから何十年かのうちには、いずれ終わりを迎えることになるのだと考えるようになった。」

僕は48歳になり、これだけ生きていて家族、友人、時には自分よりもはるかに年下の知人も含めて、多くの死を見てきました。高校生のみなさんは、誰かの死に直面することで、自分の命について本気で考えさせられ、生き方や考え方が変わったという経験をしたことはあるでしょうか？

個人的かつやや重苦しい話になってしまいますが、僕自身が大人になってからの経験を書いていきたいと思います。2013年と14年に、慕っていた2人の叔父が立て続けに亡くなりました。2人とも誰も予期できない理由で突然いなくなったのです。子供の頃は本当によく遊んでもらいましたし、大人になってからは北海道に帰省するとゴルフをしたりお酒を飲んだり、大人同士の新たな関係を築いていたので、僕にとっては大きなショックでした。さらにその3年後の2016年に、父親が脳梗塞で亡くなりました。つまり僕は3年間で、自分と同性の家族の支柱であった3人をいっぺんに失ったのです。この3人の死を通して、人は必ず死ぬ、そして死はなんの前触れもなく急に訪れることもあるという当た

り前のことを、身体全体で学ぶことができたのだと思います。

この出来事を通して僕に起こったことを考えてみます。まずは時間を大切にするようになりました。自分の人生の持ち時間が無意味になくなっていくのには耐えられなくなり、時間が何よりも大切だという強い信念を持つようになりました。次に、自分の命の基盤となる精神と肉体の健康に注意を向けるようになりました。自分にとってストレスになることからなるべく距離を置き、自分で自分の人生の主導権を握れるように意識するようになりました。健康的なものを取り込めるように自炊することを心がけ、積極的に料理をするようにもなりました。最後に、「仕事が忙しい」とか「育児が忙しい」とか言って目を背けていた、「自分が本当にしたいことは何なのか」という問題に向き合いました。その結果、興味はあったものの、何かと理由をつけて先送りにしてきたことを、とにかく挑戦していくようになりました。それは具体的に言うと、英語教授法を海外で学ぶことのような仕事に関係することから、登山やゴルフや料理といったプライベートなものまで多岐に渡ります。今思うと、自分自身の感情と真正面から向き合うことこそが、最も僕が変わったところかもしれません。

この本の中で、筆者のサラは父親の死をきっかけに、世界中を巡ります。本で述べられていることは、有史以来変わることのない、人が生きて死に、残された者が弔うという現象の記録であり、ある種の人類史と言って良いのだらうと思います。僕が個人的に最も心に響いたのは、世界中を旅しながらも、著者

のサラと亡くなった父親の心の交流が途絶えることがないことでした。それは正直に言うと、自分も亡くなった父親と同じようなことをしているからです。

筆者は、死を目前にした父との最後のやりとりを回想しています。来世を信じていなかった彼の父は、末期がんであることがわかった後、「私にはもう未来がない」と静かに語ったそうです。父は、過去や現在という時間は残されているが、未来だけが自分にはないことを穏やかに受け入れていました。

筆者もこの本の中で語っていますが、死別には決着がつけられない後悔を残すことがありますし、亡くなる晩年の会話や表情が強い印象を残すことがあります。

僕の場合は、父が2回目の脳梗塞で倒れたという報告があつてすぐに帰郷して父の元へ駆けつけましたが、その時はもうすでに意識はなく、心臓が止まるのを待つだけの状況でした。それから3、4日間、家族で交代で父に寄り添い、心で、時には実際に一方的に言葉を発しながら父と最後の対話をしたのです。振り返ると、父が健康なうちにきちんと「生んでくれてありがとう。父さんが俺の父さんで良かったよ。」と自分の声を届けたかったですね。僕はそのことだけを後悔していません。また、父が最後の時に、僕は長い間手を握っていたのですが、自分よりはるかに大きくて肉厚だろうと思っていたその手は、ほとんど自分のものと変わらず、同じような形状をしていることに気がつきました。その時伝わってきた、握った父の手から感じる父の生命の鼓動と、間違いなく僕はこの人の血を継いでいるのだという確かな手応えを、僕は今

でも大切にしています。そして今でも、例えばゴルフをしている時に「父さん、今のショットすごかったら！」と心で父に語りかけたり、人生の選択で悩んだ時は「父さんならどんなアドバイスをする？」と質問したりしています。父はまだ僕の中で生きているのかもしれないですね。

最後になりますが、この本のラストは本当に感動的でした。タイトルである『死者を弔うということ』とはどういうことなのか、筆者は父親の死を契機とした長い旅路の終わりに、その答えを見出したようです。

筆者は、死後の世界で自分の存在を感じる方法について述べています。たとえ死んだ後、景色を楽しんだりすることはなくても、自分の死が誰かの経験（例えば、インドでチャイを飲んだりすること）につながると想像することで、死後の世界に自分の居場所を見出せると言います。この考え方は、慈善家や研究者、教師、親といった人々のように、後世の創造力や発展を助けることにつながり、たとえ命のスイッチが切れても、少しでも「電気の火花」を散らし続けること、つまり「命をつなぐこと」だと考えています。

僕の父が僕の中に存在するように、僕もこの世から消えて無くなった後、誰かに時々思い出されることがあるといいなと思えてきます。また、僕が仮に人生の絶望の縁に立たされ、生きる意味を見失ったり、死を必要以上に怖く感じた時は、この一節を読み直すことでしよう。

「死」について興味のある人には、ぜひ読んでもらいたい名著です。

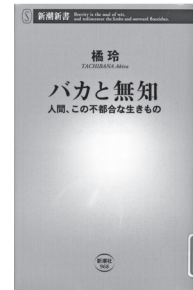
バカと無知

人間、この不都合な生きもの

著：橋玲

新潮社

筆者の著作の中に『言うてはいけない—残酷すぎる真実—』というタイトルの本があります。橋玲氏の著作の多くは、このタイトルが端的に言い表



しているように、世の中のきれいごとや、普段は隠されている人間の本質を、痛快なまでに正直に描き出しています。僕はその潔さが好きで、彼の本は定期的に手に取ってしまいます。

僕はこの本のテーマを「衝動からの解放」と感じました。どういうことかという、僕たちは特別な嗜好を持つ人を除いて、自由を好み、拘束されることを嫌います。思考、居住、職業選択といった自由が約束され、人種や男女といった差別からも解放されました。自由や解放を求めるのが人間の本性であるなら、そこから一歩踏み込んで、自分自身が抱えている衝動や矛盾からも解放されたいと思うのは、ある意味当然のことにように思います。

今回は、僕が本を読んでいる間ずっと感じていた「衝動からの解放」という視点で、本の中に書かれている言葉を紹介し、僕が感じたことを述べていきたいと思います。

まずは、「マジョリティになりたい」という衝動についてです。僕らは、少数派のグループにいるよりは、多数派のグループにいたい

と思いますよね。例えば小学校のクラスで、可能ならクラス内で華やかで頭が良かったりスポーツができたり、異性からモテたりする人と一緒にグループにいたいと思う。こういう衝動をみんなが持っていると思います。僕にもあります。筆者はこの衝動について以下のように述べています。

「一般的には、マジョリティ（強い集団）のメンバーは自尊心が高く、マイノリティ（弱い集団）のメンバーは自尊心が低い。いったん戦争になれば皆殺しにされてしまうのだから、弱い集団は強い集団に従属する以外に選択肢はないのだ。」

この本の中では、リチャード・ドーキンスの名著のタイトルである『利己的な遺伝子』という言葉が何度も登場します。僕たちは果たしてしない生存競争を生き抜いた末裔です。その激しい生存競争の中で、僕らは弱い集団に所属するより強い集団に所属した方が生存に有利であることを学んだのです。しかも遺伝子レベルで学んできたのです。このように、人間が、種の保存というなにもとも比肩できないほど重要な目的の中で、身につけてきた能力が「利己的な遺伝子」と呼ばれるのです。

利己的な遺伝子が発動させる衝動は、理性的かつ人間的であろうとする我々の中に矛盾を生じさせます。例えば、このマジョリティでいたい衝動も、冷静に考えると、戦国時代ならともかく現代社会においては、そんなに躍起になる価値があるものとは思えません。どのグループに所属しなくても、SNSで友達とチャットして寂しさを紛らすことができますし、ある程度のお金さえあれば美味し

い食事を食べることもできるし、欲しいものを買うこともできます。つまりたった1人だとしても幸福を感じることは十分に可能なのです。しかし、この衝動は子供たちの中だけでなく大人の中にも確かに存在します。どのグループに所属しているかで悩んでいる女子高生がいなくなることはないでしょうし、どの国と親密にするかは国の安全保障にも関わる大きな問題にもなるのです。

問題はここからです。「マジョリティでいたい」という避けられない衝動や弱さが備わっていることを知ると、そこで初めてその弱さを俯瞰することができ、そこから逃れ、より自由かつ理性的に生きようとする意思が生まれるのだと思います。つまり自分の衝動からも解放されたいという意味ということになります。

僕自身のことを述べるなら、10代の頃は確かにどんな集団においてもマジョリティでいたいという思いがありましたが、マジョリティにいるために自分のしたくないことをしたり、嫌な人と付き合わなくてはならないような経験をして、この衝動からどんどん解放されていったように思います。そして何よりも僕はとことん自由が好きなので、無意識にこの衝動から解放されたいと思って行動していたのかもしれませんが。特に大学生の頃は、同じ大学の大多数がやっていることに非常に否定的で、あえてみんなと違うことを選んで行動していたように思います。

次に考えてみたい衝動は、やや過激になりますが、「他者の信頼を裏切り、権威に服従して自分の利益を最大化したい」衝動です。

筆者は、「信頼」の裏側には「服従」が存

在すると指摘しています。社会が成り立つ上で信頼は不可欠ですが、それはコインの片面に過ぎず、僕たちは日常生活で、信頼と裏切り、服従と反抗という複雑な駆け引きを常にしていると述べています。

僕は、他人を都合よく利用しようとする人が大嫌いです。そういう人は、普段は信頼しているフリをして近づき、自分の利益になるように、自分が楽をするために、他人に仕事を押し付けたり、責任を押し付けたりしようとします。そういう人が嫌いだからこそ、自分もそうはなりたくないと強く思っていますが、正直言うと、自分だって無意識に他人を利用するような行動をとってしまい、「俺って最低だな〜」と反省することが未だにあります。筆者がここで述べている通り、僕たち人間はどうしても自分がかわいいわけで、自分の幸福のためには他人すら利用したいという衝動にかられるわけですね。それが、世の中に昨日まで味方だった人が今日には敵になっている話が数え切れないほど存在する理由なのでしょう。

筆者はこの衝動と切っても切り離せない人間社会を、信頼と裏切り、服従と反抗の複雑なゲームだと述べていますが、僕自身はこのゲームからは可能な限り距離を置きたいと思っています。筆者の言う通り、「信頼」と「服従」がコインの表裏ならば、他人を信頼することは自分にとってのリスクでもあるわけですし、そのコインが裏返らないように努力する必要があります。僕はそれが面倒だし、その努力に価値を見出すことはできません。

さらにこの本では、人類特有の普遍的な美德とされている愛についても以下のように述

べています。

『愛は世界を救う』のではなく、『愛』を強調すると世界はより分断されることを示しているようだ。』

ビートルズは世界に向けて“All you need is love.”と歌いましたが、この本では「愛は世界を救わない」と述べられているのです。さすがに、僕だってこれを言っておしまいだなと思いますが、愛するがゆえに傷ついたり、苦しんだり、殺し合ったりすることは日常茶飯事レベルで起こっています。愛は深ければ深いほど、スポットライトを当てるようにその対象にのみ愛が注がれ、周囲が見えなくなります。愛を注ぐ対象が味方になり、それ以外は敵になりかねないということです。

最後に、筆者が人類の究極の矛盾と述べている点について考えてみたいと思います。

「共同体のたんなる使い捨ての部品では、性愛競争に勝ち残ってパートナーを得、子孫（利己的な遺伝子）を後世に残すことができない。生存のためには他者と協働しなければならないが、生殖のためには他者を押しなければならぬ。これが、数十万年前から人類が直面してきた究極の矛盾（トレードオフ）だ。」

僕はこの一節を読んで真っ先に、最近あまり使われなくなりましたが「草食系男子」という言葉が頭に浮かびました。書評の中でも何度か書いてきましたが、今の高校生は一昔前と比べるとずいぶんと大人しくなり、中にはクラスでなるべく目立たないように努めている男子すらいるのです。確かに、みんなと同じことをして、何かに突出して優れているでもなく劣っているでもなく、平均的で画

一的に生きることは、平穩で安定的ですし、それはそれで良い生き方かもしれません。しかし、子孫を残すという動物の避けられない生存意義の観点からすると、他者との違いを生み出し、グループの中で優れた能力を示していかなければならないことも事実であり、その本能は確実に僕たちの中に備わっているということを否定することはできません。

この本にはやや過激だと思われることも書かれています。しかしそれは僕たちが平穩な社会を維持するために、話題にすることを避けたり、見ないふりをしている人間の本質でもあるのです。その不都合な事実を知っておくことは、人間の行動を、ひいては自分自身を正確に理解するためには大変重要なことだと感じました。

The Catcher in the Rye

著：J.D. サリンジャー

訳：村上春樹

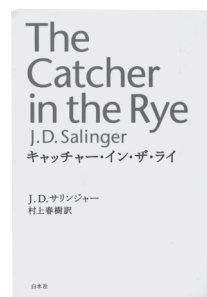
白水社

教員として、自分には大きな欠陥があるようにずっと感じていました。僕には、子供たちが喜んでいる姿を見て、素直に喜べないことがあるので

す。毎回ではないのですが、子供たちが躍動し、打算なく素直に何かに没頭している姿を見ていると、なぜかその姿を遠くから見つめている自分が情けなく感じ、妙な孤独感を感じるのです。僕はこの書評を体育祭の直後の休日に書いていますが、まさに体育祭の時にも同じような感情がこみ上げてきました。

この小説は、僕の中にあつたこの問題に答えをくれました。この小説の邦題は『ライ麦畑でつかまえて』です。このタイトルは非常に印象的であり、ずっとその存在は知っていましたがし気にはなっていたものの、今まで読まずにきました。しかし、ある日の休日に何気なく『マイ・ニューヨーク・ダイヤリー』という映画を観たんですね。それが著者サリンジャーとこの『ライ麦畑でつかまえて』に関するものだったので、一気に興味を持ちました。

この小説は、学校の寮を飛び出した16歳の少年ホールデンが、ニューヨークの町をさまよう3日間を語ったもので、子供から大人へと成長していく少年の心の葛藤を描いています。主人公のホールデンは、大人の世界の



汚さや無責任さにうんざりし、大人のそのような行為を“phony”という言葉を使って非難しています。一方で、子供の世界をイノセントな物として捉え、大切にしています。

この“phony”という単語は「うその、偽りの」という意味で、本の中で頻繁に登場します。思春期ど真ん中のこの主人公は、「あれも嘘っぽい。これもうんざりだ。」というように文句ばかり言い続けています。正直言うと、読み始めの時はホールデンが一体何に対して不満なのか理解できませんでした。読み進めて少しずつ彼が大人や大人の社交が嫌いであるということが分かってきます。

「正直に言わせてもらえば、どんな芝居だってたいして見たいとは思わないんだよ。まあ、映画ほど悪質じゃないとは思うよ。しかしそんなに後生大事にたてまつるほどのものでもない。だいたい僕は俳優ってのがちっとも好きじゃないんだ。彼らは生身の人間みたいに振る舞わない。生身の人間みたいに振る舞っていると自分で思いこんでいるだけだ。」

この一節から分かるように、ホールデンは「演じている」と思うものに嫌悪感を抱いているのだと思います。思春期は子供が大人になる通過儀礼です。その過程で、生物学的には大人になることを拒むことはできません。しかしこの頃の若者にとっては、未熟で純粋な自分と、周囲にいる大人とは大きな違いがあると感じる場合があります。自分が大人になることを想像できないし、子供のままでいられないのは分かっているが大人にはなりたくない。程度の差はあるでしょうが、このような矛盾した気持ちを、多くの思春期の若

者は抱えるものではないかと思います。

僕がホールデンと近い感覚だったのは大学1～2年生の頃です。周囲の連中がどこに就職しようかを話題にしたり、資格試験を受けだすようになって、能天気だった自分も焦りはじめると同時に、自分が普通のビジネスマンになって毎日会社に出社することは到底不可能なことに思っていました。今振り返ると、僕がこのころ“phony”だと思っていたものは、たいして興味もない会社に給与が良いとかモテそうとかいう理由で就職しようとする人たちや、学歴や職種でマウントをとろうとする人や、世の中の一般的な価値観を押し付けてくるような人たちでした。

一方でホールデンが求めていたのは“innocent”なものだったように思います。それは子供のように無邪気で打算がないことや、変わらないものも含まれるかもしれません。例えばホールデンは妹のフィービーを心から好きで、一貫して妹のことを好意的に思っているようです。また、彼には白血病で亡くなったアリーという弟がいるのですが、彼のことも誰よりも良い人だったと表現しています。ホールデンの望んでいた世界は以下の一節によく表現されているように思います。

「ある種のものごとして、ずっと同じままのかたちであるべきなんだよ。大きなガラスケースの中に入れて、そのまま手つかずに保っておけたらいいんだよ。」

ここから分かるように、ホールデンは純粋なものがそうではなくなってしまうことがとにかく許せないのです。彼が博物館やミイラや亡くなった人を好きなのにはこのような背

景があるのです。

家出をして誰も知らない遠くの町に行くことを決心したホールデンは、最後に最愛の妹であるフィービーに会いに行きます。フィービーは彼が将来何になりたいかを尋ねるので、以下がホールデンの返答の内容です。この本のハイライトであり、本のタイトルがなぜ『ライ麦畑でつかまえて』なのかが良く理解できます。

ホールデンは、広大なライ麦畑で無邪気に遊んでいる子供たちが、目の前の崖に気づかずに落ちていくのを防ぎたいと願っています。彼は「ライ麦畑のキャッチャー」として、子供たちを崖から落ちないように見守り、助ける存在になりたいと語っています。この「崖」は、子供たちの純粋さが失われ、大人の世界の偽善や汚れた部分に染まっていく境目を象徴しています。ホールデンは、世の中のインチキな大人たちを強く嫌悪しており、無垢な存在である子供たちを守りたいという強い思いを抱いています。

僕はこの一節を読んで、子供から大人になるために葛藤しながらも“innocent”なものに憧れを持ち続けるホールデンの純粋さに感動すると同時に、もし仮りに現在の自分がこのライ麦畑の話の中に登場するなら、一体どんな人物になるだろうか考えていました。

ライ麦畑は子供たちが所属する打算のない世界のことで、崖から落ちることは大人の“phony”な世界に落ちていくことを意味します。ホールデンはそれを阻止しようとする唯一の大人ということですね。僕も彼と同じように18歳くらいの頃は、インチキ臭いと思う大人の社会ではなく、ライ麦畑で無邪気に

ずっとゲームをしていた気持ちでした。しかし現在の自分は間違いなく、ゲームをする少年ではありません。それなら、かつてインチキ臭いと忌み嫌っていた崖の下の世界にどっぷりハマってるのかと言うと、それを完全に認めてしまうのは何か抵抗があるのです。

自分で言うのは恥ずかしいですが、僕もホールデンと同じようにライ麦畑のキャッチャーでいたいのです。そして時々、子供のようゲームを楽しみたいです。ライ麦畑のキャッチャーは、子供と接する仕事をする人、教員とか保育士とか親とか、全員に共通する役割であるとも感じます。子供に冒険をさせたり、夢を語らせたり、恋愛をさせたり、空想をさせたり、体力が尽きるまで遊ばせたり。とにかく子供がやりたいことを思いっきりやれるように安心させたり環境を整えたりすることは、大人が子供にできることの中で何よりも尊いもののように思うのです。この一節は、このことを強烈に思い出させてくれました。一方で、学校のような場所は、どうやったら大人の社会に適応し、そこで活躍できるかを教える場でもあるのです。つまりライ麦畑で言うなら、崖から降りることを促し、うまく降りる方法を教え、その下の世界でうまく立ち振る舞う方法を教えるということになるわけですね。純粋さや素直さを持ち続けてほしいと願いながら、社会にも適応してほしいと願うという矛盾を抱えているわけです。

冒頭で述べた、元気な子供たちを見ていて時々感じる僕の孤独感の原因は多分ここにあるのです。体育祭や文化祭といった学校行事

は、生徒と先生の関係、すなわち子供の世界と大人の世界の違いを普段よりも明確なものにします。そんな時にふと「ああ自分はもう完全に崖の下に落ちてしまった。“phony”な世界にいるのに、それに気づくこともできない」という切ない気持ちになることがあるのです。

僕はこの本のラストシーンが大好きです。家出をするなら一緒に着いていくと言い張るフィービーを、一緒に連れて行くわけにはいかず、ホールデンは家出を断念します。そして彼はメリーゴーランドに乗っているフィービーを眺めて以下のように考えます。

「フィービーがぐるぐる回り続けているのを見ているとき、なんだかやみくもに幸福な気持ちになってきたんだよ。あやうく大声をあげて泣き出してしまうところだった。僕はもう掛け値なしにハッピーな気分だったんだよ。嘘いつわりなくね。どうしてだろう、そのへんはわからないな。」

僕が思うにこの「回転木馬」は、永遠に回り続けているものの例えなのだと思います。人は子供時代に回転木馬を楽しめるけれども、大人になると楽しめなくなりそこから降りてしまいます。けれど新しい子供がまた同じように乗りに来て、その営みは止まることはありません。永遠のイノセントという彼の理想をその回転木馬に見ているのだと思います。

感受性強いホールデンは、子供から大人へと変わる思春期を、様々な葛藤を抱えながら生き抜き、必死で自分の生き方を見つけようとします。その葛藤とは、自分と他人、大人と子供、個人と社会といった、個人差はあ

るものの誰もが思春期に抱く普遍的な葛藤です。また、僕もそうですが、多くの大人は自分が“phony”な世界に生きているとは思いたくないし、子供の頃に自分に備わっていた純粹さをずっと持ち続けたいと思うものだと思います。これらの時代を超えた普遍的なテーマこそ、この本がどんな時代においても多くの人の心を捉える理由なのだと思います。

ケアしケアされ、生きていく

著：竹端寛

ちくまプリマー新書

みなさんは自分へのケアはできているでしょうか？周囲に迷惑をかけるまいとして無理をしませんか？誰かの期待に応えようとして、



したくもないことをしていませんか？何もかもを他人に頼らず自分で背負い込んでいませんか？

この本のタイトルは「ケアしケアされ」ですが、後者の「自分がケアされる」ことや「自分自身をケアする」ことの重要性が強調されています。僕はこの2つのことは、現代を生きる僕たちが幸福感を得るためにとても重要なことだと思います。様々な本でも述べている通り、多様性が尊重されリベラルになる社会では、全体から個人へと分断化が進むようです。乱暴な表現で取って分けやすくなるならば「私はあなたに依存しません。ですから私を自由にさせてください。」と考える人を大量生産する社会と言っても良いのです。それはかつての相互依存を前提にした社会の在り方を一変させ、その結果、元来社会的な存在であったはずの人間に孤独感を感じさせるのです。

人と人とのコミュニケーションの変化はごく身近でも感じられるのではないのでしょうか。メールやチャット等の電子テキストによるコミュニケーションは、友人同士のやりとりだけでなく、ビジネスにおいても非常に重

要で必要不可欠なツールになりました。これらは仕事効率化に大きく貢献すると同時に、かつての人と人とのリアルなコミュニケーションの機会を減少させます。その変化は、なにも高度にIT化された企業間だけに起きているものではなく、僕らのような学校にも、ひょっとすると友人関係や家族のような身近にも起きているのではないかと思います。

僕はそうした社会や人とのコミュニケーション方法の変化は、子供達に大きく影響を与えているように感じずにはいられないのです。高校教師として20年以上の間、同じ学校で高校生を定点観測して思うことは、高校生は年々自己主張をしなくなり、周囲の空気を読むことに注力するようになってきているということです。筆者は、ひたすら他人の空気を読んで生活しなくてはならないこのような状況を、『迷惑をかけるな憲法』と呼び、次のように述べています。

「周囲の目を気にせずしたいことをするのは『わがままだ』と思い、『迷惑をかけない』ために、必死になって取り締まっています。まるで『他人に迷惑をかけるな憲法』の世界の住人のようです。真面目な努力と『迷惑をかけるな憲法』に従うと、『世間にとって都合のよい子』が生まれていきます。」

少し話が逸れてしまいますが、僕は学年主任としての学年スローガンを「パッション」としていて、いろいろな場面で情熱の大切さを語っています。しかし、我々が生きる社会では、情熱的に生きることは全ての場面で良いことだとは限りません。情熱的な人は、時に強いリーダーシップを発揮して周囲に敵を

つくることもありますし、正直に本音を語ることによって他人を傷つけることもあります。並外れた行動力ゆえに度を超してしまうこともあります。つまり分かりやすく言う、パッションはなくてもだめだし、ありすぎて困ったことになりうるのです。でもだからと言って、筆者の言うところの「迷惑をかけるな憲法」にがんじがらめになって、子供の頃から自分のやりたいことを我慢して、それが当たり前になってしまうよりは、失敗も挫折もある情熱的な生き方をすべきだと思うのです。

この本は、僕のような教育関係の仕事をしている人や、将来そういう仕事に就こうとしている人には、学ぶべきことが多い本だと思います。それは大人と子供の関係性の本質が明確に述べられているからです。正直に言うと、僕ら大人は時々子供を管理しようとし、自分の思い通りいかない子供を、力でねじ伏せようとし、僕らも子供の頃はそうされてきましたし、それが大人というものだと思い込んでいる可能性だってあります。しかし本当にそれで良いのでしょうか？僕は筆者が繰り返し述べている「関係性のダンス」という表現がとても興味深く感じました。

筆者は、親が子供の言動に苛立つのは、親自身の生き方に対する問いかけだと述べています。親がその問いと向き合いたくない時、子供を強く叱りつけて従わせるのは、自分の見たくない一面を抑え込もうとする行為かもしれませぬ。このように、親子の関係性は、お互いの感情や行動が影響し合う「ダンス」のようなものだとして表現しています。

僕も20年位前は、乱暴な言い方をすると、

生徒が言うことを聞かなかつたら大声を出して力でねじ伏せてやればいいと思っているところがありました。そういう態度で子供たちと接していると、時として子供たちが「この大人と話をしても無駄だ」と思っている雰囲気を感じることがあります。子供たちのこの態度は、大人の子供たちに向ける態度の鏡そのものなのです。子供たちは、非常にシビアに大人を見ていて、正直に接してくれる人なのか、話を聞いてくれる人なのか、それとも自分の思い通りにしようとする人なのか、鋭く観察しているのです。

ここで大切なのは、「世の中はそんなものだ」とか「子供は大人の言うことを聞くべきだ」とか、そういったことを教えるのではなくて、相手が子供とはいえ本質的なコミュニケーションをとることが必要なのだと思います。つまり大切なのは互いに自律的に考え、相手と対等に対話をしようとする姿勢なのです。大人とこのコミュニケーションをとれるようになる子供は、多くの人と同じようにコミュニケーションをとることができるようになります。逆に、支配的なコミュニケーションをしていると、子供は親の意向や顔色をうかがうようになり、自発性や自律性が育まれません。さらに悪いことに、同調圧力や服従関係を教えこむことにもなり得ます。そして1度「人間関係はこんなものだ」と思い込んで身につけてしまったものは大人になってもなかなか変えることは難しいのだと思います。

著者は1975年生まれなので、多分僕と同学年ということになると思います。この本の中で、彼は子育て中の苦しさを述べているの

ですが、僕自身もほとんど同じような経験をしたので心の底から共感しながら読みました。

子育てとは、ほぼ一方的に他人を「ケアする」行為です。僕の場合は子供が双子だったということもあり、僕が積極的に子育てに関わらないといけない状況で、妻と文字通り二人三脚で非常に辛い時期を走り抜けました。その経験から分かることは、毎日毎日、自分が「ケアされる」ことなく「ケアする」側にずっと続けることは誰にとっても難しいことだということです。筆者もそうですが、どんな屈強に見える人だって、他人からケアされたり、自分で自分自身をケアしたりすることは、普通の健全な精神状態を保つのに必要不可欠だと思うのです。

具体的に言うと、ケアにまわっている側の人に励ましの言葉をかけたり、その行為を労ってあげたり、ケアすることを忘れるような時間を作ってあげたりすることが大切です。また、その人が自分をケアすることができるような物理的、精神的な余裕が必要だと思うのです。1人で美味しい食事を楽しんだり、友人と話をしたり、キャリアアップのための勉強をしたり、スポーツをしてリフレッシュしたり。

僕の場合は子供が7～8歳になった時に、彼らが生まれてからそれまでずっと封印していた感情が一気に込み上げてきました。仕事においても遊びにおいても、チャレンジしてみたいことが急に次々と頭に浮かんできて、エネルギーに満ち溢れている状態でした。子供が自立を始め、その結果としてもたらされた時間を、どんどんと新たな挑戦に費やすよ

うになりました。僕はこの頃、それまでなかった感情や意欲が自然と湧いてくる自分自身に驚くと同時に、子育ての時期にいかに自分が無理をして多くの感情に蓋をしてきたかに気付かされたのでした。

筆者は以下のように書いています。

「ケアを通じて相手の人生の意味に関わる際、当然ながら大切になってくるのは、ケアを提供する側の人生の意味が、ケアされる側のそれと呼応し、共鳴する、という関係性です。ケア提供者は、ケアされる側の人生に大きく意味づけを行いうるし、ケアされる側の生き様は、ケアする側の人生の意味づけを大きく変えうるものなのです。」

子育てはやや特殊かもしれませんが、ケアをする側とケアをされる側は、上下関係や主従関係で成立しているわけではありません。その関係性は相互依存の「ギブ&テイク」で成り立っており、互いに苦手なところを補い合い、ケアを受けるだけでなく、ケアを与えることによっても互いに喜びを感じる関係性が理想的なのです。

ケアしケアされる関係性は、相手がいることが前提になり、相手がいるということは自分の思い通りにいかないという怖さを包含します。人間関係にこうあるべきという正解はありませんし、自分が言ったことを理解し受け入れられるかはやってみないと分かりません。自分自身が傷つくことだってあるでしょう。ですが、この不安に飲み込まれてしまって、メールやチャットなどのテキストによるコミュニケーションに依存してしまうと、心はどんどんと孤独感を感じるようになり、筆者の言うところの「魂の植民地化」が進行し、

自律性や主体性を失い、周囲に迷惑をかけないように必要以上に周囲の目を伺い、空気を読み、忖度することが身についてしまったのです。

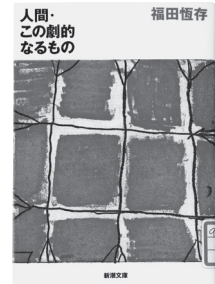
最後になりますが、この本は、人と人とのコミュニケーションの本質について非常に分かりやすく説明されていて、読み終わった後、大切な相手には自分の思っていることをもっと素直に伝えていかななくてはならないと思われました。そして、自分の子供たちや國學院の生徒たちにも、なんらかの方法で、ケアしケアされて互いに幸福感を高めていく関係性の在り方を伝えていきたいです。

人間・この劇的なもの

著：福田恆存

新潮文庫

本にはいろいろな楽しみ方があると思いますが、読んだ後に自分の考え方や行動が変わることは、読書の貴重な体験の1つだと思います。この本は、僕にとってまさにそういう本でした。



この本は昭和35年に発行されています。著者の福田氏は主にシェイクスピアの翻訳で知られていますが、劇の演出や小説の執筆もしていたようです。やや古い本ですが、著者の人間の生に関する洞察は鋭く普遍的であり、文章もさすがに翻訳家だけあって面白く、のっけからグイグイと引き込まれていき、2日間くらいで一気に読み通しました。

この本のテーマは2つあり、1つは「自由とはなにか」で、もう1つは「劇的に生きるとはどういうことか」です。

まず1つめについて、著者が述べていることを振り返り、僕が感じたことを述べていきます。みなさんは自由が好きですか？僕はもともと自分の行動や考えを他人から強制されることが大嫌いで、大人になった今も「自由」は人生で最も大切なことの1つだと考えています。しかも恥ずかしいことながら、時には自分が英語指導を担当している生徒に向けて、時には自分の息子たちに向けて、「自由」の価値を説いたりしているのです。僕のようにわか自由至上主義者は、著者によって次のように一刀両断されます。

「自由とは、所詮、奴隷の思想ではないか。私はそう考える。自由によって、ひとはけっして幸福になりえない。自由というようなものが、ひとたび人の心を領するようになると、かれは際限もなくその道を歩みはじめる。」

ここでまず考えてみたいのは、自分が「ああ私は自由だわ」と感じる時はどんな時かということです。例えば定期テストを終えた学生が、大きなプロジェクトを成し遂げたビジネスマンが、幼い子供を寝かしつけた母親が、ああようやく自由になれたと感じることでしょう。これらに共通することは、自由を感じる時とは、なすべきことがなくなった状態であるということです。そうであるならば、自由を求める行為は、なにかをしなくてはいい状態からの逃避とも考えられます。個人差はあるでしょうが、多くの人にとって労働や勉強はしんどいものでしょう。あまり現実的ではありませんが、もしも完全に回避可能であるならば、喜んでこれらに取り組む人はどれだけいるでしょうか。

筆者はこの自由を「空っぽの自由」と呼んでいて、この種の自由を求めることを軽蔑しているようです。なにかをしなないことを欲することは、消極的自由であって、これをもって人間が幸せになれるわけではないと考えているようです。世の中には義務、約束、秩序、規則があります。なので労働や重圧のない人生などありえないと筆者は述べています。特に以下の一節を読んだ時は、自分の考える自由がいかに空っぽで、幼稚だったか痛感させられました。

「真の意味における自由とは、全体のなかであって、適切な位置を占める能力のことで

ある。全体を否定する個性に自由はない。すでに在る全体を否定し、これを自分につごうのいいように組織しなおすことは、部分たる個人のよくなしうることではない。」

僕もそうですが、多くの人が、全体から脱却することを自由になることだと考えます。システムから抜け出し、時間を自分の思いのままに使えることを自由だと考えます。この一般的な自由の考え方は福田氏にかかるると完全に否定されるのです。

筆者の考える本当の自由を理解するキーワードは、「役割」と「必然性」ということになるでしょう。劇の中の役者と同じように、僕たちには全体という枠組みの中で果たさなければならぬ務めがあって、それを全うすることが大切だと筆者は説いています。僕は、かつてカントが言った「人生のコペルニクス的転回」のことを思い出しました。これは「自分」が自分の「人生」に期待をするのではなく、「人生」が「自分」に日々自分のやるべきことを提供し、いかに生きるべきか問うているという考え方です。著者がここで述べていることは極論するなら、自由のコペルニクス的転回だと言えるかもしれません。全体からの脱却にではなく、全体の中の役割を演じることに自由があるという考え方です。

「自分がやるしかないんだ」という使命感を感じたことはありますか？大人になると嫌でもそう感じる場面に遭遇します。仕事では何度もそういった責任ある行いをしなければなりませんし、子育てだって逃避するわけにはいきません。高校生にだって、こういう経験はあるでしょう。例えばスポーツをするなら自分のポジションを全うしなければなりま

せん。野球で自分の方向に飛んできたフライは自分が捕る以外に選択肢はありません。吹奏楽部なら、誤った音を出すことは全体の不協和音を生み出すことを意味します。確かに、全体の中で与えられた自分だけの使命を全うすることは、時にプレッシャーになるものの、それをやり遂げた時の喜びは格別であるということも多くの人が知っているはずです。筆者は、僕たちが求めているのは、自分が宿命のうちにあるという自覚であり、その役割を演じる舞台があることであると言っているのです。そしてその宿命と向き合うことで、本物の「自由」を感じることができると言っています。

次にこの本のもう1つのキーワードである、「劇的に生きる」ことの意味について考えていこうと思います。

僕たちは誰しもが全体の中で役割を与えられています。例えば学校なら、学級委員やクラブの部長とか、職場なら管理職とか課長とか営業とか、家庭なら母親や父親などです。それらの役割を全うしようとする、全体つまり組織だったり社会だったりから責任を負わされたり期待を受けると同時に、予期せぬことが起こり自分の思い通りにはいかないことにたくさん直面するわけです。劇的に生きるとは、自分の身に起こる良いことも悪いことも、自分しか演じることのできない「宿命」と引き受けることではないかと思います。筆者は次のように書いています。

「私たちは、自分の生が必然のうちにあることを欲している。自分の必然性にそって生きたいと欲し、その鉞脈を掘りあてたいと願っている。劇的に生きたいというのは、自

分の生涯を、あるいは、その一定の期間を、一個の芸術作品に仕立てあげたいということにほかならぬ。」

劇には筋書きがあります。しかし、仮りに今日の前で役者が演じているとして、その役者は未来を生きているわけではありません。現在に集中し、身体を動かし言葉を発します。また仮りに目の前に音楽家が演奏しているとしても、その音楽家は次の1音を出すことに集中しているはずです。

やや強引なまとめになってしまうかもしれませんが、福田氏の言う「劇的に生きる」とは、自分の意思ではどうすることもできない生を、自分の「使命」として受け止め、劇の中の役者のように「現在」にフォーカスしながら生きることなのだろうと思います。

母親になって後悔してる

著：オルナ・ドーナト

訳：鹿田昌美

新潮社

人間として生まれた以上、生物学的には男性か女性かのいずれかに分類されます。与えられた性別や生物学的特徴、社会的な役割に疑問を持たずに生きる人もいれば、そうでない人もいます。僕が学生だった1990年代は、現在では当たり前のように使われる「ジェンダー」という言葉や概念が、一般にも広く知られるようになった頃だったように思います。僕の周りでも、男女の社会的差別について問題意識を持ち始めた女子学生が多く、「ジェンダー論」といった大学の講義を履修する学生も大勢いました。

僕は、家父長制で父親が常に威張っているような家庭で育ちました。正直に告白すると、僕にはかつて、「男はこうあるべき」「女はこうあるべき」といった固定観念が強くありました。しかし、18歳頃から、自分が育った環境や男女観が必ずしも正しいものではないと徐々に気づき始めました。本やテレビから学んだことも多いですが、友人たちの話を聞いたり、国内外を問わず他者の家族の在り方を実際に見たりして学んだことが大きかったと思います。例えば、2000年代後半、30歳くらいの頃に仕事でよくオーストラリアに行きましたが、そこで目にしたものは、それまでの「男はこうあるべき」「女はこうあるべき」



といったイメージとは全く異なるものでした。共働きが一般的であったり、女性のマネージャーが大勢いたり、男性が積極的に料理や家事に参加したり、大声で威圧するのではなく女性や子どもに常に穏やかな態度で接したりする様子は、僕にとって非常に新鮮でした。

誰もが多かれ少なかれ経験することだと思いますが、僕たちは自分とは異なるものを見たり知ったりすることで、無意識に信じていたことに疑問を持ち、新たな価値観を学び、真実に近づくことができます。その意味で、この本は母親になった女性が、さまざまな理由で心の奥底に秘めてきた本音を知ることができる貴重な一冊だと思います。

本書の著者、オルナ・ドーナトはイスラエルの社会学者で、すべての女性が母親になりたいはずだという社会的期待や、母親になることを価値ある経験とする評価に疑問を呈し、学術的な活動を続けています。本書では、タイトルが示す通り、母親になったことを後悔している女性が多数登場し、それぞれの境遇や悩みが語られます。ある女性は次のように述べています。

「その感情は、辛いものです。役割を演じられない、楽しみながら務めを果たせないという感情。『なぜ私が苦しまなければならないの？楽しむこともできるはずなのに』と思います。でも、楽しんでいる自分を想像することすらできません。母であることを楽しみ、子どもとの時間を楽しむという考えが理解できないのです。そのための忍耐強さはありません。」

上記を読めばわかるように、一般的に女性の子供を迎え、母親になったことに対して後

悔の念を述べることは社会的にタブーであり、友人やパートナーにさえその感情を表明することは難しく、非常に繊細な内容です。著者が本書を執筆した理由は、まさにそうした感情を文字にし、世界中の多くの人と共有することで、一人でも多くの人が「苦しんでいるのは私だけではない」「このつらさを表現してもいいんだ」と思えるようにすることにあるのでしょう。

この種の差別に少しでも関連するテーマを扱う際は、慎重に言葉を選ぶ必要があると承知していますが、ここでは本書を読んで特に印象に残った2点について率直に述べたいと思います。

1点目は「母性」の認識についてです。著者は多くの母親へのインタビューを通して、一般的に考えられている母性について疑問を感じ、それは社会によって作られたもの、あるいは不自然に強調されたものではないかと述べています。

親の愛、特に母性愛の起源については議論があり、ある学派はこれを普遍的なものではなく、現代になって生まれたものだと主張しています。この説によれば、核家族の出現や、乳児の死亡率が低下したことによって、母性愛が「私」と「公」の領域を分ける現代的な概念として形成されたと論じています。

「母性」をインターネットで調べると、「女性特有の、いかにも母親らしい性質。女性に備わっている、子供を生み育てる資質」と出てきます。女性は誰もが生まれながらにこの性質を持っていると思われがちです。また、子供を持つと母性は増大し、自分のことと同様、あるいはそれ以上に子供のことを大切に

思うものだと思われることもあります。

ほんの数十年前まで、世界には至るところに男女差別が存在し、現在でも完全にはなくなっていない。残念ながら、日本は男女差別においては後進国と言わざるを得ない状況です。社会の中に、男女を真の意味で平等に扱う考え方や制度が確立していない場合、著者の言う通り、「母性」を理由に、子供の世話には母親が見るべきだとか、子供を持つことで女性は幸せになれるといった、社会にとって都合の良い考え方を、あたかもそれが女性に「自然に」起こるものとして押し付けている可能性は十分にあると思います。女性は、母性によって子供を愛するものであるという定義を押し付けられ、少しでもそこから逸脱すると、社会から母親失格のようなことを言われることがあるのは事実です。

少し話が逸れますが、僕の子供を保育園に預けていた時のことです。僕と妻は土曜日も仕事だったため、子供を預ける必要がありました。ある時、当時の園長先生に「土曜日に預けるのは子供がかわいそうですよ」と言われたことがあります。これは、保育園の先生が言うべき発言ではなかったと今でも思っています。どんな親でも子供と一緒にいたいと思っているし、子供の世話をしなければならぬという社会的・文化的な責任を感じています。それを理解していながら、自分たちの判断で子供を預けようと決めた親に対して、預かることが仕事である人が「子供がかわいそう」というもっともらしい表現で親の罪悪感を刺激し、「親なら土曜日は子供と一緒にいるべき」という定義を押し付けるのは、決して正しいことだとは思えません。

著者は本書の中で「時に理想は標準化され、こうでなくてはならないという思想を生む」と述べています。社会や個人が抱く「母親の理想」や「親の理想」があるかもしれませんが、その理想を他人に押し付け、それが標準的なものとして他者にも適用されると考えるのは誤りでしょう。本書には、それが原因で母親になったことを後悔する女性が何人も登場します。

印象に残ったことの2点目は、主体としての母親ということです。これを説明するために、以下のケースについて考えてみてください。①父親が残業する。②母親が残業する。③休日に父親がゴルフに行く。④休日に母親がヨガに行く。

これらのケースについてどう感じるかは個人差があるでしょうが、一般的には母親が残業したり、休日にヨガに行ったり友人と食事をしたりしていると、大丈夫なのかと心配されることが多いのではないのでしょうか。つまり、母親は父親と比べて「母親」という役割を演じることを強いられるのです。

著者は次のように書いています。

「母を主体として認めることは、母を役割として規定している社会では当たり前ではない。役割としての母とは、子ども劇の中で演じられるような母だ。この社会的台本によれば、母は主体ではなく客体であり、他者の生活に奉仕するために存在する独立変数なのだ。」

著者も本書で述べている通り、母親が自分を犠牲にして、子供やパートナーのために存在しなければならないのであれば、その社会はおかしいと言わざるを得ません。そして残

念ながら、本書の登場人物だけでなく、僕の身近にも、その役割を演じることが苦手だったり、社会的重圧に押しつぶされそうになってもがていたりする人は少なくありません。本書では「オブジェクト」から「サブジェクト」への転換という表現が使われていますが、これはつまり、母親を特殊な「役割」ではなく、一人ひとり異なる感情や得意不得意を持つ「主体」として捉え直すことが重要だということです。母親であっても、自身の体、生活、決定の所有者は母親本人であることは当然のことです。

最後に、本書は子供を産むべきではないとか、母親になるべきではないといった主張をしているものではありません。母親になって後悔したり苦しんだりしている女性が、感情を持つ「主体」として自分の思いや決断を述べることで、女性とそのパートナーが子供を迎えた時にどう生きていきたいかを考える貴重な機会を与えてくれる一冊です。

パタゴニア

著：ブルース・チャトウィン

訳：芹沢真理子

河出文庫

僕らは「移動型」と「定住型」に分類できるのではないかと勝手に思っています。僕たちの祖先であるホモ・サピエンスは約20万年前に生



まれ、そこから長い間移動生活を始め、多くが定住生活を始めたのは約1万年前だと言われています。壮大な人類史の視点では、人類は移動生活をしていた時期の方がはるかに長いことが分かります。ですから、遺伝的に、定住するよりは常に移動したいと考える人がいても全く不思議ではないわけです。

「移動型」の人とはどんな人でしょうか？特定の住まいを持つことなく、自分のライフスタイルに合わせて移動を繰り返す本格的な人もいるでしょうし、自ら好んで海外出張や転勤の多い職業を選ぼうとする人もこのタイプに当てはまるでしょう。家はあるけれども、頻繁に旅行に出かけたりしないと気が済まない人も、潜在的にはこのタイプの人だと思います。

「定住型」の人とはどんな人でしょうか。例えば大人になっても実家から出たがらない人や、終身雇用が好きで、1つの職場で働くこと以外の選択肢が思い浮かばないような人です。休日に、外に出かけるよりも家にいてゲームをしたり、映画を観たりすることを好むような人もこのタイプに当てはまるでしょう。

みなさんはどちらのタイプでしょうか？僕は根本的には「移動型」に属するでしょう。中学生の頃から違った土地で生活することを想像して楽しんでいましたし、実際に高校、大学と違った土地で生活を経験してきて、そのたびに自分の世界がどんどん広がっていくような感じがして、わくわくしたのを覚えています。社会人になり家族もできて東京に家を購入しました。一度家を購入して安定してしまうと、よほどの理由がないと住む場所を変えることは簡単ではありません。また、僕のような私立の教員には転勤もありません。確かに、ある人達にとっては僕のように東京に住まいがあり、仕事も安定していて移動の心配がないことは、素晴らしいことかもしれません。でもそういう安定した状況だからなおさら、僕は時々ひどい発作に見舞われます。それは新しい場所に行ってまだ見たことのない景色を見てみたいという衝動のようなものです。僕もそうですが普通の仕事をしている人なら、1ヶ月も2ヶ月も休みをとる訳にはいきませんので、週末や長期休暇を有効活用して、そんな自分の欲求を満たさねばなりません。僕が山登りが好きなのも、安定した定住型の都市生活ではどうやっても満たされることのない「移動したい」という根本的な欲求によるものだと思うのです。つまり僕は、定住しながらほとんど毎日をぬくぬくと都会で生活をしながら、月1・2回の登山と数年に1回くらいの海外旅行でなんとか欲求を満たそうとしている、弱気な「移動型」人間と言えるかもしれません。

今回のこの『パタゴニア』は1940年生まれのイギリス人作家のブルース・チャトウィ

ンが1977年に書いた本です。僕はかなり前からこの本の存在を知っていて、いつか読んでみたいと思っていました。「パタゴニア」と聞いて多くの人が真っ先に思い浮かぶのはアメリカのアウトドアブランドでしょう。僕も登山やスポーツでこのブランドを愛用しているので、同じ名前の紀行文であるこの小説にはずっと興味をもっていました。また、紀行文の傑作としてこの本が紹介されているのを何度か目にしていました。

ところが、実際に読み始めてみると、最初は全くこの本の世界に入り込むことができませんでした。というのは、これまで読んできた冒険や登山をテーマにした、読んでいてハラハラさせられるようなドラマチックなものとは全く毛色が異なるのです。つまり、主人公が南米最南端の厳しい自然環境を舞台に、氷河を渡り、山を超えて、数々の困難を乗り越えていくような物語を想定して読むと完全に面食らってしまうのです。

この本の最大の特徴は、スポットライトが様々な人に移り変わることにあります。97の章に小分けされた短編の寄せ集めのような構成になっているのです。筆者チャトウィンはパタゴニアの地をひたすら移動し、そこで出会う人々と対話します。その相手は、先住民、冒険者、ならず者、移民者など多種多様です。その対話を通して著者が感じたり調べたりしたことが述べられます。回想、歴史的事実、作り話、言い換えが混在しており、読者に、まるで夢の中の混沌とした世界にいる感覚を与えます。読んでいて「あれ、これって誰の話だっけ」と思うような瞬間が何度もありました。単なる紀行文やルポタージュではなく、

この独特な構成がこの本を文学的なものになっているのだと思います。

読み進めていってこの文体に慣れてくると、僕らの日常は、特に旅は、この本のように分断化された短編がいくつも混在したものであることに気づきました。例えば僕の場合、1泊2日で登山に行くとしたら、事前にコースや荷物を確認し、山の歴史やその周辺のゆかりの地を調べ、「ああ、この景色を見たいな」とか「この道は険しそうだな」とか、いろいろなことを考えたりします。いざ旅行が始まると、その山までの移動中の景色に感動したり、運転する車の中で旅行とは全く関係ないことを考えたり、予想外の渋滞にイライラしたりすることもあります。登山中も、環境問題について考えさせられたり、急に幼少時代を思い出し数十分間ノスタルジーに浸ってしまうこともありますし、友人と仕事の話をして山とは全く無関係の仕事のアイデアが生まれたりします。このように僕たちの生活は、特に現代人の生活は、本質的にはそれぞれの場面で分断化されているのです。

チャトウィンは、自分の思考や感情を、時には空想すらも、正直にこの小説の中で表現したのだと思います。一般的に旅の意義はいろいろあるのだと思いますが、過去を振り返ったり、日常の中で押し殺している感情と正面から向き合ったり、未知なる未来をじっくり考えたりするには、自分自身の正直な感情や思考と対峙する静謐な時間が必要であり、旅はその時間を与えてくれる絶好の機会だということを教えてください。

読み終わってから分かったことですが、チャトウィンは俳優のようなイケメンで、博

学で多才でした。48歳で亡くなっています。超個性的な人物だったようで、彼の奇行や変人ぶりを死後に多くの人が語っています。ここでは書けないようなこともあるようで、興味のある人は調べてみてください。

僕はこの本を読んでいて、すごく印象に残っていることは、モノへの執着に関してです。そもそもチャトウィンがパタゴニアを目指したのは、祖母の家のガラス張りの飾り棚にあったプロントサウルスの皮の切れっ端のルーツを辿ることでした。登場人物の持ち物や服装についても非常に詳しく描写されています。「〇〇産のツイード」といった表現もよく出てきます。彼は数年間、現在ではインターネットオークションで有名な「サザビーズ」の美術鑑定士をしており、モノに対する目利きぶりは普通の人とは比較にならないほどだったと思われます。僕も、自分が気に入ったモノに対する愛着は非常に強く、特に皮や羊毛や麻などの天然素材には昔から関心が強かったです。モノから、それが生まれた土地を感じることができるような気がするのです。例えば僕が愛用しているイギリス製の革靴や、イタリア製の麻のシャツや、北海道の故郷の職人が作った皮財布は、身につけるとその土地の空気や雰囲気をはんの少し感じられるような気がするものです。僕が思うにチャトウィンのパタゴニアへの旅は、地球最南端の地を巡り未知なる経験をしてみたいという漠然とした本能のようなものだったと思いますが、この皮の切れっ端というよく分からないモノが、彼をパタゴニアに向かわせた理由の1つでもあることは間違いなさそうです。

今回は特にとりとめもない書評になってしまいましたが、冒頭に述べた「移動型」の人にはもちろん、「定住型」であっても未知なるものに興味をもっている人には、この本はとも興味深いものになる可能性があります。我々の祖先は、およそ20万年のほとんどの期間で移動生活をしていました。彼らはユーラシア大陸から北アメリカ、南アメリカへと移動していきました。この本や著者チャトウィンの生き様を通して、人はなぜ移動するのかという、人間のDNAに埋め込まれた、単純そうで非常に奥深い問いの答えに近づくことができると思います。

「教える」ということ

日本を救う、[尖った人]を増やすには

著：出口治明

角川書店

僕は今、國學院高校で学年主任をしていますが、その学年目標を「1人1人、生き生きと」としています。折に触れて先生方にも生徒たちにも言い



続けてきたので、だいぶ浸透してきたように思います。今回はまず、学年目標「1人1人、生き生きと」に込めた思いを述べたいと思います。

本校では1学年におよそ600名の生徒がいて、能力も興味も性格も多種多様です。良かれと思って平均的な生徒にフォーカスして指導をしていると、多くの生徒を取りこぼしていくことになります。ですから、大人しい性格の生徒も、すぐに調子に乗ってしまう生徒も、学習する能力が低い生徒も高い生徒も、1人でも多くの生徒が、自分の居場所を見つけ生き生きと生活してほしいと思ったのです。

多様性について語る時、特に学校のような教育の場においては、どうしても能力が低かったり、友達とのコミュニケーション力が欠けているような生徒に焦点を当てがちですが、強いリーダーシップを持っていたり、物おじせず自分の主張を述べられたりといった、ある側面に極端に秀でた能力を持つ生徒のことも忘れてはいけません。彼ら・彼女らが生きづらいコミュニティは正常とは言えま

せんし、そういった若者が今後の日本に望まれていると言って良いのだと思っています。

著者、出口治明氏は現在、立命館アジア太平洋大学の学長で、これまで様々なジャンルの本を書いています。どの本も大変興味深く、また読みやすいものばかりです。彼の本を読んでいて感じることは、出口氏も相当「尖った」人であろうということです。彼の読書量と知識は尋常ではありませんし、キャリアの変遷を見ても彼の行動力の凄さが分かります。

僕が彼の生き様や著作に惹かれるのは、ひょっとすると考え方や人生に対する感覚が少し似ているからかもしれません。

僕は生まれもって協調性がなく、みんなに合わせることができませんでした。その反面、リーダー的役割を任されることが多かったので、「出る杭は打たれる」的に周囲から反感を買う経験を何度もしてきました。ですが、気が強かったのと、幸運なことにそんな自分を受け入れてくれる自分と似たような友達がたくさんできたことで、妙な自信を持てしまい、ますますその個性が強くなってしまったのです。

学年主任として2023年の4月にこの学年をスタートする時、僕をサポートしてくれる副主任や他の先生方とどんな生徒に育てたいかよく話をしていました。そんな中で、「うちの学校でよくありがちな、画一的な型にはめるような教育はやめよう。今までより苦勞するかもしれないけど、个性的で尖っている生徒も生き生きできる学年にしよう。」というやりとりが自然と何度も行われました。つまり、僕らの高校の教育現場のど真ん中でも、

この本のタイトルにある「尖った人」を育てる必要性を感じている人は多いのです。

この本は、画一的な従来の教育方法に限界を感じている人や、国際社会における日本の競争力を取り戻すための人材育成に興味を持っている人には、絶対にお薦めできる本です。

筆者はまず、「教えること」の基本のキを以下のように述べています。

『教える』とは、相手にわかってもらうことです。相手に腹落ちしてもらうことです。『教える』とは、どんな人に対しても、真意を伝えることです。』

最近の先生方を見ていて個人的に心配なことは、今流行りのICT（僕も大好きです）を駆使して効率良く授業をするのは良いことなのですが、それよりも大切なことは、生徒に伝えたいことが伝わっていて、彼ら・彼女らの力になっているのかということです。手段であるはずのICTが目的になってしまって、それらを巧みに使いこなせることが良い授業だと勘違いしないように気をつけなければなりません。さらに著者は以下のようにも言っています。

「飢えた人に食べ物を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるのが教育だと僕は思いません。」

最近の教育現場は随分と優しくなりました。暴力はもちろんですが、教員が大声で怒ることもほぼなくなりました。僕が学生だった頃は、ゲンコツで頭を叩かれることは頻繁にありましたし、出血するまで殴られることもありました。かつて武闘派の先生がたくさんいたことは間違いありません。僕も含めて

最近の先生方は優しすぎるのかもしれませんが。生徒に考える間も与えないで模範解答を与えたり、最初から最も効率的な最短距離を示してしまいがちです。ともすれば、それが良い先生のすべきことだと思っているし、生徒の側もそれが当たり前だと思ってしまうようです。

しかし、本当に腹落ちして身に付くものというのは、自分で考えたり悩んだりして、苦勞して身につけたもののはずです。出口氏が言う通り、「釣り方」は教えるけど「食べ物」は与えず、1人でもずっと困らないようにしてあげることが教育の本質なのだと思います。その意味では、暴力はいけませんが、生徒に苦勞させたり考えさせたり、ときには反省させたりして、身をもって学ばせる厳しさも必要なのだと最近は感じています。

子供たちに学ぶことの楽しさを教えることはたやすいことではありません。多くの先生が毎日少しでも生徒の興味を惹こうと奮闘しています。出口氏はこの本の中で、いくつかヒントを紹介していますが、その中で印象的だったことは「学びには感動が必要だ」ということです。筆者は次のように述べています。

「そういう機会を与えたら、教師が教えなくても、子どもたちは自然に学ぼうとするでしょうね。ですから『教える』ということは、ある意味では『場所を与える』ことなのかもしれないですね。」

僕の体験談を2つ紹介します。今や國學院高校ではオーストラリア、カナダ、シンガポールと多くの研修地で海外研修を実施していますが、15年くらい前の立ち上げの段階では、オーストラリアのタウンズビルという町の1

箇所での研修でした。しかも2週間のホームステイという高校生にとってはやや本格的な留学でした。僕はこの時期に3度この研修を引率しましたが、ホームステイ最終日の朝の光景を忘れることができません。帰国するために研修地から6時間かけてケアンズに移動しなければならなかったのも、朝7時頃に参加者たちは2週間を過ごしたホームステイ先の家族と、現地の学校前に集合します。バスの出発時間が近づくと、別れを惜しんで、多くの生徒が家族と抱き合っただけ涙を流しています。ステイ先の家族の中にも涙を流している人がいます。わざわざ引率者である僕の元へやってきて、「この子は本当に優秀だったわ。どうかしてこのまま残すことはできないかしら」みたいなことを言う母親もいました。

僕はこの光景を見て、この場をつくりだすことに貢献できたことを誇りに感じ、教員冥利に尽きる思いでした。そして、この時期に日に日に成長していく子供たちの姿を見て、子供たちの潜在的な能力の高さを知り、ひいては教育の可能性を確かに実感できる経験となりました。

もう1つは、北海道での修学旅行でのことです。学校では1人であることが多く、あまり感情を表さない普段は大人しい生徒が、フィッシングを体験してホテルに戻ってきました。「釣れたかい？」と僕が聞くと、今まで見たことがないようなキラキラした笑顔で「はい。釣れました。」と返答しました。実際のところは分かりませんが、彼女にとって魚釣りは初めての体験だったのかもしれない。大自然の水の冷たさを初めて感じたのか

もしれません。

この本でも述べられていますが、その場所に行き、そこにあるものを見て、触れて、食べて、その国の通貨を使って、その国にいる人たちと話をします。これらの本物の体験こそ学びの本質でしょうし、これらの体験は、子供たちに必ず感動をもたらすのだらうと思います。ですから、僕たち教員は、毎日教室でどうやって効率良く教科書や問題集を使って教えようか悩むよりも、いかに生徒に感動する場所を提供できるかを考えることに時間を割いた方が、長期的には効果的なのかもしれないと思われました。

次に、「尖った人」の教育の重要性について考察していこうと思います。戦後、日本はスペシャリストよりも画一的なゼネラリスト（いろいろな知識を広く浅く持っている人）を育てることを目標にしてきました。そして工場のベルトコンベアを止めないような、「みんなで決めたことを守る」「協調性が高い」「空気を読める」「素直で上司の言うことをよく聞く」「我慢強い」などという能力を持った人材が求められてきました。確かにある時までは、そうやって日本が経済の競争力を高めてきたのは事実です。しかし90年代から、「失われた30年」と呼ばれるように経済は競争力を失い、未だ実感としては出口が見えないような状況が続いています。原因は諸説あるようですが、諸外国がどんどんと教育制度を見直しアップデートしていく中で、日本だけがもたもたしていたことが原因の1つであることは間違いなさそうです。筆者は次のように言っています。

「生き物は混ぜると強くなるわけです。組

織も同じで、国籍や文化、宗教、そして年齢といったあらゆる属性の人間を混ぜることで強くなります。」

まさにこの言葉は、今後教育に関係する人たちなら常に頭に留めておかなければならないものだと思います。「尖った人」は目立つかもしれませんが、協調性に欠けるかもしれません。しかし長所と短所は表裏一体で、その尖った部分は、適切に利用されればすぐに長所になり、全体に利益をもたらさうのです。

最後になりますが、この本を読み終えて改めて教育の可能性について考えさせられ、自分の仕事に誇りを感じると同時に、より前向きな気持ちになりました。僕にとって出口治明氏の本はそういう魔力をもっていて、ついつい定期的に読んでしまうのです。

愛すること

著：エーリッヒ・フロム

訳：鈴木晶

紀伊國屋書店

この本の最後の1文を読み終えた時、「おい、もう終わってしまったのか。もっと続けてくれ」と思いました。「愛」という普遍的テーマに真正面から向き

合う本で、1960年代に書かれたものですが、全く古くささを感じさせません。巷に溢れている恋愛の指南書とはレベルが段違いで、長編ではないものの、内容は愛について考えずにはいられない人間の本质に迫るスケールの大きいものになっています。

誰にだって人を好きになって、その人のことをずっと考えてしまうという経験をしたことがあるでしょう。小学生だって「あいつが～のことが好きだ」とかいう話をよくしますし、大人だって恋愛に関するネタ以上に盛り上がるものは少ないでしょう。愛ゆえに迷走し振り回されている人は身近にけっこういます。また、愛をテーマにした本や映画や歌は世の中に溢れていて、一時的な流行ではないので、人間の普遍的なテーマであるのは明らかです。

そもそも僕たちはなぜ人を愛するのでしょうか。「そんなの当たり前じゃん」という声が聞こえてきそうです。僕も「俺はなぜこの人が好きなのかな～」とかぼんやりと考えたことがありますが、本気になって考えてはこなかったように思います。著者フロムはい



くつかその理由を考察していますが、そのいくつかには本当に納得できました。

1つ目は、その原因が孤独感にあるというものです。みなさんは孤独とどのように向き合っているのでしょうか？僕自身は、幼い頃から1人であることは大好きでした。他人に気を遣うことなく何事も自由に自分のペースですることができることに大きな価値を感じていました。同時に、何もしないでじっとしていることは大の苦手で、常に何か刺激を求めて動き続けていることを好みます。ひょっとすると僕の習性は、根っこにあるものは退屈からの逃避かもしれませんし、それはすなわち孤独感を感じたくないということかもしれません。

著者は、孤独の本質について、人間が理性を持つ存在であることから生じると述べています。人間は、独立した存在として、限られた人生、避けられない死、そして愛する人との別れを常に意識しています。自然や社会の力に対して無力であることを自覚しているため、孤独を感じるのだと説明しています。

哲学めいた話になってきましたが、フロムの言っていることは、孤独感や無力感、理性をもった人間の避けられない運命なのだという事だと思います。多分、昆虫は1匹でいても孤独感を感じることはないでしょうし、犬や猫のような比較的高等な動物だって、群れを作ったり求愛したりするのは本能的によるものが大きく、人間と同じように孤独感を感じるとは思えないのです。

みなさんはどんな時に孤独感や無力感を感じるのでしょうか。僕は、自分より圧倒的に優れた能力をもつ人に出会った時とか、仕事で

情けないミスをしてしまった時とか、親しい人が亡くなった時とか、山の稜線で吹き飛ばされそうなくらいの風に吹かれた時とか、そんな時に自分の無力さを痛感します。「自分は今まで何をやってきたんだろう」とか「自分が生きていることに意味なんてあるんだろうか」とか考えさせられることだってあります。自分の弱さを知ることのできる存在である人間は、精神的にもそれほど強いものではないのかもしれませんが。だからこそ自分を愛し、サポートしてくれる人を求めるのでしょうか。

また、人がなぜ人を愛するのかという理由として、僕に刺さったのは、他人を愛することによって実は自分自身を知りたいのだという点です。

筆者は、人間が孤独から抜け出して他者と結びつきたいと願うのは、「人間の秘密」を知りたいという欲求と深く関係していると述べています。生命そのものが神秘であるのと同様に、人間は自分自身や他者にとって、計り知れない謎を秘めた存在であり、その秘密を解き明かしたいという思いが、他者との融合を求める原動力になっていると説明しています。

確かに僕は僕自身のことを知っているようで、あまりよく分かっていません。例えば、他人に「おまえにはこういうところがあるよな」と言われて気付かされることは少なくありません。自分の外見だって、鏡に映った自分を自分だと認識しているだけであって、実際の自分を現実に見ることは不可能なのです。言い換えると「自分」は「私」の中に囚われている状況と言って良いでしょう。僕た

ち人間は、このような状況を無自覚ではあるものの認識していて、自分を知るためには、「自分」を深く知る他人の存在が必要であることに気づいているのではないのでしょうか。他人を深く知ることは、その人に投影された自分を知ることに繋がります。

フロムはこの本の中で、愛は技術だと一貫して主張しています。多くの人は、誰かに愛されることを強く求める一方で、自分から与えようと努力することはしません。もしくは、与える愛は出会いによって自然と湧き上がるものだと考えがちです。しかし著者は、真の愛は自己中心的な欲望を超え、相手を思いやろうと意識的に努力することから生まれると教えています。このように意識的に自ら与えようとすることで、その技術が身についていくのだと説いています。

愛されたいのなら、ほんやりと素敵な出会いを待っているのではなく、自ら愛の技術を高める努力をすべきだという考えは、僕にとって新しい発想でとてもおもしろく感じました。巷には「どうやったらモテるのか」とか「恋人と出会う方法」とやらを、それらしく説明した本や YouTube 動画が溢れていますが、そんなものは愛の本質とはほど遠いわけですね。

人生において愛にどれほど重要度を置くかは人それぞれです。そして他人がどれほど重要視しているかは、よほど親しくならない限り知ることはありません。この本を読んで考えさせられたことは、現代の愛には損得感情の要素が含まれすぎているのではということです。現代の物質主義や消費社会が、愛の在り方に影響を与えているのは間違いないで

しょう。「お金があるからあの人が好き」という発想や、社会的地位や名声があるが故に人を好きになるといった、現代では当たり前の考え方は、根本的に間違っていて、ひょっとすると精神的には下等な態度なのではないかと思わされました。

フロムは、人間が他人を愛するためには、社会が人間中心でなければならないと述べています。経済は人間に奉仕すべきであり、単なる利益だけでなく、経験や仕事も公平に分配されるべきだと主張しています。そして、人々の愛するという社会的な本性と、社会生活が分離せず一体となるような社会を築く必要があると説いています。

確かに、愛が短期的な満足や自己利益に基づくものであると捉えるのは当たり前のようになっている現代社会において、愛の重要度は、社会や経済や仕事の重要度の下に位置しているように感じます。しかしながら、愛は、その形態はさまざま、僕たちの日常のあちこちに偏在していて、生活の根幹をなし、僕たちの幸福感にこれ以上ないほどの影響を与えていることは間違いありません。もし自分の家庭に愛がないとしたら、毎日に帰るのが嫌で仕方ないでしょう。僕たちのような教育に関わる仕事においても、与えることによって幸せを感じるという愛情は必要不可欠なものだと思います。また、顧客への愛ゆえにさまざまなサービスが生まれ、我々の生活水準を押し上げてきたのだらうと思います。そう考えると、フロムの言っているように、人間の生活の営みの中で、愛をもっと重要視し、その営みを中心に据えるような社会の在り方を本気で考えていかねばならないと思わ

されました。

ベリーベリーグッド

著：松浦弥太郎

小学館

この本の序文はこ
のように始まります。

「大切な人を思い浮
かべて手紙を書くよ
うに。大好きな人にラ
ブレターを書くよう
に。文章を書く際、心

がけていることは何かと聞かれた時、僕はいつ
もこう答えている。」

この本はまさに、この一節に述べられている
通りに恋人に語りかけるように、優しく穏
やかで分かりやすく書かれています。短い
エッセイ集なので、1つ1つが独立している
ので、読書の習慣のない人にもたいへん読み
やすいと思います。

僕はこの本を読んでいる時間がとても好き
でした。図書館から借りてきた本だったので、
電子書籍とは違って残りページの数簡単に
把握することができて、読み進めるにつれ
て残りが少なくなって行って寂しく感じまし
た。特に最近は、哲学や教育や差別などの重
いテーマを題材にした本ばかり読んでいたの
で、この本のように身近なテーマを題材にし
ていて、心温まるような内容には大変癒され
ました。

「ティーフォートゥー」というタイトルの
エッセイは、ある曲を聴くと昔のことを思い
出すという内容です。みなさんにはそのよう
な経験はありますか？ある曲を聴いて小学校
時代の家族旅行を思い出したり、その頃好き
だった人のことを思い出したりすることはな



いでしょうか。僕の場合をいくつか紹介します。

例えば、1980年代に活躍した日本のグループで「レベッカ」というグループがいるのですが、僕はそのグループの音楽を聴くと北海道の地元のスキー場のことを鮮明に思い出します。当時、僕は父親とともに冬場はほぼ毎日スキー場に通っていて、レベッカの曲を大音量で聴いていたのです。また、僕が高校1年生の時、KinKi Kidsの「ガラスの少年」という曲がヒットして、スーパーやデパートといった、街のあちこちのお店で流れていたのです。僕にとっては忘れられない1曲になったのです。この曲を聴けばその時を思い出しますし、その時を思い出せばこの曲を思い出します。

ある歌をきっかけにして、簡単に過去の出来事や感情を思い出すことができる。そんな自分だけの特別な歌がある人は、きっと幸せなんだろうと思わされました。

次に、このエッセイを読んでいて楽しかった理由は、「ああそれ分かるな～」と思わされることが何度もあったことです。毎日、自分がぼんやりと考えていることを、著者が見事に言語化してくれているのです。

例えば、筆者は愛の形について以下のように書いています。

「どんなことにもその先には人がいて、その人を思うことで、小さな工夫やアイデアが生まれ、いつしかそれが基本になっている。そうかあ、基本が基本である理由には、必ず人への愛情が隠されている。基本とは愛のかたちなのだ。」

先日、エーリッヒ・フロムの『愛するとい

うこと』を読み、そこにも書かれていたのですが、愛することは技術であって鍛錬が必要です。少し大袈裟に聞こえるかもしれませんが、僕が関わっている教育業界も、人を愛することが、その前提になっていると思います。僕たち教員は、毎日のように「どうやったら子供たちにより上手く教えられるか」とか「どうやったら子供たちの学力が伸びるか」と考えていますが、それは正に著者が言っている「人への愛情」なのではないかと思います。

仕事やサービスといった社会的なものだけでなく、人を思いやることは、例えば友人関係や家族といった日常のあちこちでも大切なのです。一瞬一瞬の相手に対する気遣いや工夫の積み重ねが、居心地の良さにつながるのでしょうか。また、そういうことができる人が他人を惹きつけ、魅力的に映るのだと思います。

最後に、僕がぼんやりと思っているながら自分で認めきれなかったことを筆者は次のように述べています。

「好きとか嫌いと言っているうちは、まだまだ子どもなんだな。大人になるということは、好き嫌いを卒業することなのではないでしょうか。」

僕は子供の頃から、食べ物の好き嫌いがとても多く、恥ずかしいことですが、30歳くらいまでそれを直そうともしませんでした。しかも好き嫌いは食べ物だけにとどまらず、仕事や人間関係や趣味においてもそうでした。今思うと、自分の好きなことと嫌いなことを、自分で勝手に仕分けして、決めつけていたように思います。しかし、大人になり、自分が苦手だと思っていた人と交流したり、自分に

は合わないと思っていた遊びに敢えて挑戦したりすることによって、新しい出会いや学びを体験するようになって、徐々に物事の好き嫌いがなくなっていったように思います。

大人になってから、これまでの自分がいかに愚かで未熟だったか気付かされることは少なくありませんが、好き嫌いに関しては、本当にもったいないことをしたと思っています。長い間、美味しいものが美味しいことに気づかず、出会えたはずの友人に出会っていても気づかずにいた可能性があるわけですから。

学生や20代の若者たちには、僕のように選り好みをして妙な仕分けをするのではなく、どんな人でもどんなものでもまずは信じてみることをお薦めしたいです。少し嫌な思いをしたり、失敗したりすることもあるかもしれませんが、最初から「私はこれは苦手」とか「僕はああいう人はダメ」と決めつけてしまってシャットアウトして大きなチャンスを失ってしまうかもしれないからです。

冒頭でも述べた通り、この本は恋人に語りかけるような優しい文体で書かれています。そして内容も非常に日常的なものでほっこりとするものが多いです。日常の忙しさで心が荒んでいるなど思っている大人や、勉強や人間関係で疲労を感じている学生に、この本はお薦めできます。疲れた心を癒し、優しさを取り戻し、前向きな気持ちにさせてくれる1冊です。

ソース

あなたの人生の源は、ワクワクすることにある。

著：マイク・マクマナス

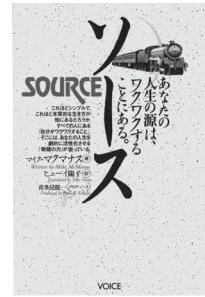
訳：ヒューイ陽子

株式会社ヴォイス

久しぶりに、あまりの面白さと痛快さに一気読みをしてしまいました。数ある自己啓発本の中でも、そのぶっ飛び具合と潔さに関してはトップク

ラスだと思います。人間なら誰しもあることでしょうが、この本を読んでいた時、僕の身の回りで嫌なことが続いて気持ちが落ち込んでおり、さらには珍しく体調もあまりよくありませんでした。そんな時にこの本に出会ったので、全身に活力が湧き上がってきました。

ところで、話は脱線してしまいましたが、気持ちが沈んでしまう時はどんな時でしょうか？少し考えてみたいと思います。僕は比較的メンタルは安定している方だと自分では思っています。基本的に毎日楽しいですし、仕事も自分に向いていると思っています。趣味もたくさんありますし、目標を持って精力的に取り組むことができます。それでもやはり、時折気持ちが落ち込むことはあります。そしてその理由が自分でもよく分からないこともあります。しかし、根本的には自分がそうになってしまう時は、やりたくないことをずっとし続けなくてはならない時のようです。体力的にしんどいとか、時間を取られるとか、そういったことはあまり関係がないようで、たとえ体力的には全く問題なくても、



自分がしたいことをずっと我慢しなくてはならない状況が長期に及ぶと、僕の気持ちはどんどんと沈んでいくようなのです。

さて、この本の話に戻りますが、タイトルの「ソース」はご存知の通り「源」という意味です。それでは何の源かという、僕たちが元気に生活できる源ということになります。そして筆者は次のように言っています。

「ワクワクは私たちにとって贅沢品ではありません。あなたがあなたであるためになくてはならない必要条件です。」

この本の副題にもなっている通り、筆者はワクワクすることを人生の中心におくことを一貫して説いています。

自分で言うのも気が引けますが、僕自身は筆者が述べているようなワクワク中心の生活をかなり実践できていることに気づかされました。仕事のコアとなる英語の授業は、20年以上教壇に立ってきた今でも楽しいですし、未来を担う高校生の成長に、ダイレクトに貢献できることにやりがいを感じることができ、僕の話を親身になって応援してくれる仲間や家族もいます。また、体を動かすことが好きで、ゴルフをしたり登山をしたりすることで定期的にリフレッシュしています。

高校生くらいの頃から、好きなものにはとことんこだわる性格で、趣味には時間とお金を惜しみなく使ってきました。家族からは批判されることもよくありました。書ける範囲で述べるならば、洋服、靴、ギター、ゴルフクラブなどです。少しでも心が動かされるものには挑戦してきましたし、欲しいと思ったものは、可能な限り手に入れてきました。ワクワクするものを見つけてしまうと、いても

たってもいられなくなってしまう性格で、大人になってからは、迷ったら購入したり、挑戦したりしてきました。試すこともなく、あとになって「ああ、あれをやっておけばよかった」と思ったり、買わずに後悔したりすることは何よりも嫌だからです。

この本の中で、筆者は「ワクワクすることは、その全てを同時に実行することが大切だ」と言っています。僕たちは日常生活の中で、優先順位をつけて物事に取り組みます。例えば、たいていのサラリーマンなら、まずは仕事が最優先で、その次が家族。あまった時間でエクササイズや趣味といったような感じになるでしょう。つまり、どうしてもしなくてはならないものが最優先になって、ワクワクさせるものは後回しになりがちなのです。しかもそのワクワクに割ける時間はほんの少ししかありません。

また、多くの人は、このことを、例えば仕事を取るかワクワクを取るかといった二者択一のトレードオフの問題として捉えています。ワクワクするものを仕事や勉強や、家族を理由にあきらめてしまうのですね。

僕の場合は、子供が生まれてから10年以上、学生時代からの趣味だった音楽をぴたりと止めました。ギターを弾くことだけでなく、音楽を聴くことから意識的に遠ざかるようになりました。当時は、双子の育児が想像以上に大変で、仕事でも重要な任務を任されていたので、体力的にもぎりぎりの状態で、他のことを考えている余裕はなかったように思います。それ以上に、「音楽なんかやっている余裕なんかない」「ギターを抱えるようになるとハマってしまっ抜け出せない」などと

考えて、自分自身でブレーキをかけていたように思います。そしてそう考えて実際に趣味をセーブできる自分を、愚かなことに「デキる大人」のように考えていたのです。

この本を読んで考えさせられたのは、時間やお金や体力に余力を残すためにワクワクすることをセーブするのと、時間もお金も体力も全く考えずにワクワクだらけにするのでは、どちらが幸福なのかということです。筆者は後者を推奨していて次のように書いています。

「それぞれのワクワクに同じ量の情熱をかけて、それぞれの小さな一歩を踏み出しましょう。その結果、すばらしい相乗効果が生まれて、人生に充実感と喜びがあふれます。」

確かに僕は育児や仕事、一度はまってしまうとどっぷりはまってしまう自分の性格を理由にして、ワクワクから意図的に距離を置いていた時期がありました。もし自分にブレーキをかけていなかったならどうなっていたかは自分では分かりませんが、その当時は考えもしなかったオプションがあったことに気づかされました。

最後に、この本を読んでいる間ずっと僕が関わっている教育について考えずにはいられませんでした。僕たち教育者は毎日子供と接することで、知らず知らずのうちに特定の価値観を彼ら、彼女らに刷り込んでいます。しかもそれらは、僕たち自身だって無意識に刷り込まれたものの可能性だってあります。

例えば、人生とは、大学教育を受けて一流企業に就職し、結婚をして家族を養いながら昇進に励んで豊かな生活を目指すことだというような刷り込みです。多くの人がこの考え

方に疑問を抱かないでしょう。しかし、筆者も書いている通り、本人が望まないのであれば、それは、他人が望んだ人生を生きているということであり、自分の人生を生きているとは決して言えないのです。

僕もそうですが、教育現場では「やる気」という言葉を頻繁に用いますが、誰もが同じものに「やる気」が出るわけでは決してありませんし、ましてや勉強のような忍耐と競争を強いられるものが、最初から苦手な人がいるのは当然のことです。やはり、本質論としては筆者がこの本で述べているように、「勉強をして偏差値の高い大学に行けば幸福になれる。だからやる気を出せ。」といった指導は適当だとは思えないのです。

いろいろなことにアンテナを立てておいて、少しでもワクワクを感じるものにはどんどんと挑戦してみることが大切だと思うのです。ワクワクするものなら、時間を忘れて長期的に取り組むことができるでしょうし、特にそれが家族や友人を喜ばせたり、社会貢献になったりする可能性があるのです。僕もそうでしたが、本当に感動したものには興味を持って取り組むことができます。ですので、僕たち教育者に必要なことは、子供にレールを敷いてあげるのではなく、感動しワクワクするような経験ができる機会をたくさん作ってあげることだと思います。

この本を読み終えて、自分自身の「ワクワク中心生活」をますます推し進めていこうと決意しました。

バリ山行

著：松永 K 三蔵

講談社

僕は数年前までほとんど1人で登山をしていました。僕にはあまり計画性がなく、「あ、今週末山行こうかな」という感じで直前になって計画することが多いので、仲間と予定の調整がなかなかまとまらないことが多いのです。そもそもそんなに仲間も多くはありませんし。また、僕が登山をする時は、朝の4時くらいに家を出発することが多いので、そのペースに仲間や家族を引き込むわけにはなかなかいかなかったのです。

家族や仲間と、わいわいと登山をするのは、それはそれで楽しいものですが、たった1人で誰にも頼ることなく歩き回るのは独特の良さがあるものです。ほとんど登山者のいない山に行くと、辺りは静まりかえっていて、人の声も人工的な音も全くなく、自然の音、つまり鳥の鳴き声や、沢の水の流れや風の音が鮮明に聞こえるものです。また、1人で誰とも話すことなく何時間も歩いていると、その間に普段の生活の中では忙しすぎて考えることを保留していたことに思いを馳せたり、新しいアイデアが生まれたり、日々の行いを反省したりします。1人で誰とも話さないでいる時間を持つことは、都会の生活ではそう簡単なことではありません。

ところが、2023年の夏に東京奥多摩の山中で熊に遭遇して以来、ソロで山に入る回数



は激減しました。登山道の向こうから歩いてくる真っ黒な熊の残像が頭にこびりついていて、1人で歩いていると熊のことが気になって気になって仕方がないのです。周囲でガサガサッと音がすると、なんでもかんでもが熊に思えてきて、いちいち飛び上がるほど驚くような軟弱者になってしまいました。

それ以来、僕は登山を計画する時は必ずと言っていいほど、同僚のX先生を誘うようになりました。彼とはここ数年間、頻繁に一緒に山に登っています。彼は運転免許を持っていないので、往復の移動は常に僕が運転しなくてはなりません。特に登山後の東京までの運転は、これ以上ないほどしんどく、さらには渋滞が追い討ちをかけてきます。

この本のことを初めて知ったのは、X先生と日帰り登山を終え、夜に東京に戻る車中でした。「そう言えば芥川賞の『バリ山行』読みましたか？僕はこれから読もうとしています。」彼はこんな風に僕に言いました。「バリ」とはバリエーションのことで、一般的な登山道ではないルートのことをバリエーションルートと呼ぶのです。すぐに図書館に行き、この本を借りて読み始めました。

この本の中で圧倒的な存在感を示しているのは、「妻鹿（めが）さん」です。彼は一言で言うならば粹から外れている人です。登山をするにしても誰も踏み入れたことのない道を好んで選びます。仕事においては、営業ではあるものの防水に関してスペシャリストで、自分で修理をすることもできます。

その存在は、主人公である「波多」を含めたどこにでもいそうな一般人とは対極の存在として描かれています。妻鹿さんは周囲から

見ると、敢えて他人と違うことを選んでいるかのように見えます。山に入れば人が誰も踏み入れようとしないうちに行き、仕事においても常に「一匹狼」的な存在で、仲間たちと群れることはありません。不況の中、社内ですトラが行われるという噂が立っても、妻鹿さんにとってはどこ吹く風といった様子で、毎週末山に入りマイペースを貫き通します。

波多は、周囲に流されない妻鹿に少しずつ惹かれていき、一緒に山に登るようにもなります。しかし同時に、彼のようにはなりきれない妬みなのか、否定的な感情も抱き始めるのです。

波多は妻鹿に対し、家族という責任があるにもかかわらず、仕事や山で好き勝手に振る舞うことを厳しく問い詰めています。妻鹿が命を危険に晒してまで山に向かう行為は、本物の危機から逃げているだけに過ぎないのではないかと指摘しています。そして、真に向き合うべきは山ではなく、家族や会社のある日常だとして、その無責任な行動を強く非難しています。

僕は人間には、程度の差はあれ2つの側面が備わっていると思っています。1つは、常識的であろうとする面です。周囲と歩調を合わせることで信頼を得て、友達になったり助け合ったりするに足る人物であることを証明しようとする側面です。それは人間的で、社会的存在でありたいという願望の表れと言っても良いかもしれません。もう1つの側面は、他人とは違う独特な存在であろうとする面です。たった1度の自分しか生きられない生を生きている実感を得るために、自分の信じた道をひたすら突き進む。それは、時に自分の

衝動や感情に導かれるがままに生きることと言っても良いかもしれません。

やや強引かもしれませんが、僕たちはこの2つのグラデーションで生きています。常にどちらかが強い人も弱い人もいるし、時と場合によってそのグラデーションは変化するものです。みなさんはどうでしょうか？

妻鹿さんをバリ山行に向かわせたものはいったいなんだったのでしょうか？それは「自分だけのかげがいのない一瞬を生きている」という実感がほしいからだろうと思います。

これは当然、登山でなければ得られないものではありません。しかし、僕にもわか登山家として言わせてもらうならば、登山はその感覚を比較的てっとり早く得られる方法であるだろうと思います。まず「山に行こう」と決意することで、挑戦をする前向きな感情が湧き上がってきます。それは大袈裟に言うと生きる意欲と言っても良いと思います。必要なものは全てザックに入れていきます。その時、仕事や人間関係などの全ての自分の問題もザックに入れていく感じがするのです。「よし、山で考えよう」といった感じでしょうか。山に入れば、一步一步踏み出すたびに目に飛び込んでくる風景が変化していきます。目の前に見える道は、自分の未来であり、振り返ると自分の歩んできた道、つまり過去を振り返ることができます。鼓動が早まり息が切れ、否応なしに普段あまり意識することのない自分の身体について意識できます。これらの都会ではなかなか実感をもって味わえない感覚は、自分の精神も肉体も「今、ここ」に存在し、その体験は確かに自分だけのものであることを感じさせてくれるのです。

波多は、妻鹿とバリ山行を共にした後、次のように言っています。

「深く眠るような感覚。これがあの時に妻鹿さんが言っていたものなのか。毎週毎週、妻鹿さんが憑かれたように山に登り続けたのはもはや理屈ではなく、それが妻鹿さんにとって快樂に近いものだったからだろう。」

他の本で読んだのですが、人が本当に集中している時、それはよくスポーツなどでは「ゾーン」などと呼ばれますが、実は非常にリラックスした状態なのだと思います。なので僕たちが思っている以上に長時間継続することができるし、心地よさを感じることができるのです。妻鹿さんが感じていたものはこの類の快樂だったのかもしれない。

さて、最後になりますが、この本はさすがに芥川賞だけあって、著者の文章力にぐいぐいと引き込まれ、特に中盤から非常に面白くてどんどん先が読みたくなりました。真正面から自然と対峙するような山岳小説ではないので、登山に興味がなくとも面白く読むことができます。

話は脱線してしましますが、学年主任としてこのおかしな書評を、自分の学年の生徒が卒業するまで書き続けるというこの意味不明な計画ですが、これについて初めて他人に話したのも山の中でした。前出のX先生との山行中に話したのです。ひょっとすると構想が生まれたのも、決心が決まったのも山の中だったかもしれません。物理的に空間を移動しなくても、本は僕たちの心が旅をすることを可能してくれます。別に本でなくても良いし、山でなくても良いのです。何か夢中になるものを見つけ、黙っているのではなく、

とにかく行動することが大切なのだと思うのです。多分、それが僕たちを幸福にしてくれるかなり万能で普遍的な方法なのだと思います。

世界のエリートは なぜ「美意識」を鍛えるのか？

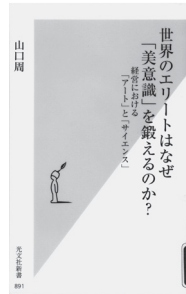
著：山口周

光文社新書

2024年の秋に行われたアメリカ大統領選挙。僕は、トランプ氏でもハリス氏でもなく、現代を代表する企業家のイーロン・マスク氏に注目していました。彼の政治参加にはいろいろなことが言われてきましたが、僕は彼の情熱に驚きました。十分に富も名声も手にしている彼が、必死になってトランプ氏支持のために走り回っている姿がとても印象に残りました。是非はともかく、第一線で活躍する実業家で、彼のように自分の国の政治のために手段を選ばず奔走した人はなかなかいないのではないのでしょうか。少なくとも日本においては思い出すことができません。

真意は分かりませんが、彼には自分の所属する会社の利益や名声といったものではない、「国はこうあるべき」もしくは「民主主義はこうあるべき」といった美学があったように僕には感じます。

20年以上英語の教師をしてきて、これからの国際人育成がテーマのセミナーに何度か参加しました。あるセミナーで次のような話を聞きました。世界各国の優秀な高校生を集めて、未来の環境問題を議論する大会が開かれた際、日本代表で参加した優秀な高校生は、他国の生徒に全く太刀打ちできなかつたそうです。その理由は意外だと思いますが英語力



ではなく、教養だったそうです。例えば、他国の代表がデカルトの『方法序説』を例に挙げて何かを説明しようとした時、日本の高校生のエリートは全くその知識がなく、議論に加われなかつたそうです。

この本は、上記のイーロン・マスクのような圧倒的な情熱をもつ日本人のエリート育成に必要なものはなんなのかを学ぶ最高の本だと思います。

まず、この本で一貫して述べられている論理的判断のネガティブな側面について、本の一部を参照しながらまとめていこうと思います。みなさんは物事の判断を論理的に行うほうですか？それとも直感で行うほうですか？筆者は論理的思考を「科学」、直感を「アート」と表現し対比させています。そして結論としては「科学とアートのバランス」が大切だと述べています。

自分自身のことを考えてみます。僕は幼い頃から判断が非常に早いです。それはプライベートでもビジネスにおいてもほとんど変わることはありません。なぜそうなのか自分でも理由はよく分かりませんが、あれこれ考えている時間をもったいないと思いますし、時間をかけて考えてもだいたい最初に感じたものと同じ判断になることがほとんどです。また、いろいろな本を読んで直感を信じるようになったことも大きな要因です。このように、僕は直感的判断をする傾向が強いことを自覚しているので、意識的に論理的に考えようと努めています。また、科学的な根拠のある意見には謙虚に耳を傾けるようにしています。

筆者は、日本人の多くが高く評価しがちな「論理的」で「理性的」な意思決定を、「決し

てそれが『巧みである』ことを意味しない』と書いています。また、「むしろ権力者が作り出す空気に流されてなんとなく意思決定をすることへの反動で、一種の虚勢である」と述べているのです。もしもこれが日本の現実なのだとしたら、打開策の見えない負の連鎖の中にいると言えるでしょう。特にビジネスの世界では、いろいろな思惑が交差しながら意思決定が行われます。そして日本特有の「空気を読む」文化の中で、論理的な意見は一見まともで説得力があるように思われるのです。なのでどんどん意思決定がアートではなく科学に頼ったものになりがちだと言っているのです。

論理的判断のもう1つのデメリットは時間がかかるわりには答えが凡庸なものになることです。筆者は「論理と理性」に軸足を置いて経営を行うと、必ず答えは同じ結論になると書いています。そして特に日本の企業は、人と同じ答えをより早く、より安く提供することで生き残ってきました。例えば車や家電製品などが分かりやすいでしょう。しかし、ご存知の通り、多くのケースで現代においては「早く、安く」の手法はもう通用しなくなっています。アップル社の商品群を思い浮かべると分かりやすいと思いますが、他と違う差別化されたものが求められる時代になったということは明らかなように思えます。

僕も含めて組織の中でリーダーシップを発揮しなければならない人には、ざくりとさせられる一節を紹介します。

「アカウントビリティというのは、絶対善のように思われている節がありますが、リーダーシップの放棄というネガティブな問題も

孕んでいる。意思決定の理由について、定量的で合理的な説明さえできれば、それが結果的に間違ったものであっても『あのときは、そのように判断することが合理的だったのです』という言い訳に用いられるからです。」

自信のないリーダーは、決断をする前から失敗した時にどう言い訳をしようかを考え、あとになって自分の決断が合理的だったことを証明できるように、つまり判断の正解不正解よりも、不正解だった時の言い訳のために判断を科学に委ねようとします。ただこの考え方は、筆者も述べている通り、あまりにも世の中に浸透していて、むしろ科学的に無難な判断ができる人が、「仕事ができる人」と考えられています。僕が思うに、ここから学ぶべき最も重要なことは、優れているのは、科学的判断か直感的判断か、サイエンスかアートか、という問題ではなくて、状況に応じて、その2つの長所・短所を理解した上でバランスをとるといことなのだと思えます。

この本の第5章では教育について述べられていて、僕はこの章が最も心に刺さりました。筆者は、かつて世間を騒がせたオウム心理教を例に挙げています。その特徴として、信者に受験エリートが多いこと、単純化された階層社会であること、美意識が極端に欠如していたことが挙げられています。確かに、当時のテレビ報道を観ていた人なら、彼らの外見や佇まい、施設や住居などから、美しさを感じた人はほとんどいないことでしょう。

僕は20年以上の高校教師としての経験と、自分の子育ての経験を通して、日本の偏差値至上主義的な教育には年々否定的な考えを持

つようになってきました。そして自分だってその責任を負わなければならないとも感じています。

もしも仮に、子供たちが情緒や感性を育む機会を一切与えられずに、幼い頃から塾に押し込まれ、「偏差値さえ上がれば親が喜んでくれる」、「偏差値の高い学校に進学すれば幸福になれる」と本気で思い込み、そのためならなんでもありだと考えてしまうのなら、それは教育の本質からはかけ離れていると言わざるを得ないと思います。教育の目的は、システムへの適応力をつけることではありませんし、盲目的にシステムを受け入れることを教えることではありません。筆者は「『システムに良く適応する』ということと『より良い生を営む』というのは全く違うこと」と書いています。

この問題に関して、本では明確な解決策が示されています。それは「システムを相対化すること」です。僕なりに解釈するなら、まずは自分が所属するシステムを具体的に考えてみてください。大きいものなら日本社会、小さいものなら学校のクラブ活動とか。まずはそのシステムを思考停止で無批判に受け入れるのではなくて、外部のモノサシ、つまり自分の美意識と照らし合わせるとどうなのかを考えてみる。これが相対化です。そしてその結果、システムを変える必要があるのなら、全く違うシステムに切り替えようとするのではなくて、今のシステムに適応しながら修正する必要があると言っています。次のような一節があります。

「システムに適応している人たちというのはつまり、いわゆるエリートのことです。最

適化していることで、様々な便益を与えてくれるシステムを、その便益に拐かされずに、批判的に相対化する。これがまさに、21世紀に求められている知的態度なのだ、ということです。」

最後に、読書、音楽鑑賞、絵画鑑賞、マインドフルネスといった単なる趣味の1つとして考えられているものは、「美意識」を鍛えるには非常に良いものだと書かれています。筆者は「美意識の復権」という表現を使っていますが、論理的で合理的なことではなく、アートに触れ感性を養うことは、もっと重要視されて良いのではないかと感じました。リーダーシップに興味がある人や、経営に興味がある人は、大変学ぶことの多い1冊だと思います。

砂の女

著：安部公房

新潮文庫

仕事帰りの電車の中で、なにげなくYouTubeで「読みたい本」とかなんとかで検索をしてみました。検索にひっかかってきた動画の中から、適当に数本の動画を聞き流して帰宅したのですが、今回読んだこの『砂の女』を推す人が何名かいたのです。それで、「これは読まなければならぬ」と思い、数日後に学校の図書館で借りました。



正直言って最近では経営学やら哲学やらといった難しい本ばかり読んでいて、「気楽に小説でも読もうか〜」という軽い気持ちだったので、このように書評を書くとは思っていませんでした。しかし実際は書評を書かなくてはならないと思わせるほど、人間の本性に迫る深みのある内容と、著者安部公房氏の天才的な文才に心を動かされました。

この本の主人公は、物語が始まってそうそうにアリ地獄を思わせるような、抜け出すことのできない砂丘の穴に落ちるのです。本の中では主人公はほとんどの時間を、この世のものとは思えない砂の中のおんぼろの家で過ごします。

著者安部公房氏は、なぜこのような特異な場面設定にしたのかを僕なりに考察してみます。砂と格闘するのではなく、例えば山奥だったり水中だったりといった多くの人に馴染みのある設定の方が、読者はその状況を比較的

リアルに想像し、登場人物に感情移入できたはずでしょう。僕も読み始めの時は、砂の穴の中にある家や、2階まで砂に埋もれた家が建ち並ぶ集落をなかなか想像することはできませんでした。

まず第1に、砂は常に変化し続ける世の中のメタファーだと考えられます。砂は、光や風や温度でその形や性質を変化させ、人間の手には負えない恐ろしい存在として表現されています。実際に主人公の男は何度も、砂の中から逃亡しようとしますが、一歩踏み出せば足は膝まで埋まり、斜面はいとも簡単に崩れ落ち、何度も失敗するのです。そう考えると砂は、どこにでもありそうなものが外的要因によって刻一刻と変化し続けるという世の無常感を表現したものだと考えられます。

また、口・鼻・舌といった粘膜にこびりついてくる砂は、おぞましさを感ずるほど不快なものであり、身体感覚としてダイレクトに伝わってくるものであると思います。それは同時に、その不気味さを感じている確かな生の手応えを肌感覚で感じさせてくれるものの象徴なのだと思います。

高校生のみなさんにはあまり理解できないかもしれませんが、大人になって都会の生活の中で忙しく暮らしていると、意外な時に生の感覚を感じるがあります。僕は、お酒を飲みすぎてトイレで嘔吐している時に、ふと我に返って「あ〜俺って生きてるな〜」と感じて不思議に思った経験があります。やや強引かもしれませんが、安部公房氏がこの物語に砂の中という舞台を選んだのは、流動する人智を超えたモノの中に人間を放り込み、その人間らしさを際立たせる狙いがあったの

だと思います。

この本は1962年の作品で、当時の日本の状況は、戦後の経済復興を経て高度経済成長期を迎えた頃です。まさに現代社会の基盤ができつつある時と言っていいでしょう。都市部では次々と高層ビルが建築され、車や家電製品の品質が向上していきます。人々の生活もどんどんと豊かになっていき、今まで満たされていたはずのものでは満たされなくなっていく時代です。

主人公の男は物語の中で、教師という自分の職業にやりがいを感じることができず、また同僚や自分の妻の目を、常に意識しながら生活しなくてはならない都会での生活に、不自由さを感じていました。この潜在的な苦しみは、複雑なシステムの中で生活している現代にも通ずるものです。

戦後の経済成長は、街の風景や生活様式だけでなく、人生観まで変えてしまったのでしょう。かつては家庭があり、食べ物があり、着るものがあれば人々は充足していました。しかし、ほとんど全ての人々が一定以上の生活水準を保てるようになると、人々は多くの選択からより良いものを消費することでしか幸福を得られなくなりました。そして、欲深くなった人を満足させるために世の中全体が競争をし始めるようになったのだと思います。

その副産物として、人々の心はますます空虚化して、生きがいや幸福感を感じにくくなったのでしょう。この物語の主人公は、都会の生活に不満を感じながら、砂丘というなんの束縛もない場所へ向かいます。これは、現代というシステムからの逃亡願望であり、この主人公と同じ願望を持っている人は、僕

も含めて今日でも多くいることでしょう。例えば、僕が山に登りたくなるのも、一部はこの願望からくるものでしょうし、ギャンブルやアルコールに依存してしまう人や、ニートや不登校だって本質的には似たようなものが原因になっているように思うのです。

物語の後半になって気づいたのですが、砂の女も砂の集落も、急速にシステム化し価値観が多様化する社会と対比される存在として描かれているのでしょう。本の中では、主人公の男は少しずつこの部落に馴染んでいき、砂の女に魅力を感じ、ラストシーンではずっと逃亡したかったはずのこの村に残ることを選択するのです。

砂の女、そして砂の部落は、やや強引に述べるのなら、近代化以前の何百年と続いていた原始的で動物的な存在の象徴なのだと思います。

例えば、男は最初は嫌がっていた果てしなく続く砂を掻き出す作業に、徐々に慣れていき、最終的にはやりがいのような満足感を得るようになります。それは、都会型の頭脳労働ではなかなか味わうことが難しくなった肉体を使った労働のやりがいなのだと思います。また、女は「この集落には愛郷精神がある」と述べていますが、人々は砂との格闘を宿命づけられた村での生活に疑問を抱くことなく、贅沢も求めず、しかし一生懸命に毎日の生活を送っています。

物語の後半で、水の確保が大変困難なこの砂の中での生活で、「流水装置」の開発に執着し、その装置を完成させます。この装置の完成は、集落の水確保問題を一気に解消させる可能性があり、男は「村人に教えたい」と

思うのです。この場面は大変印象的でした。今だってそうですが、特に都会での生活の中で承認欲求が満たされることはほとんどありません。例えば会社で大きな成功を収めたとして、誰かに感謝の言葉をかけてもらったり、大きな報酬をもらったりするケースはそう多くはありません。しかし、この前現代的な部落では、自分が望んだ自己実現によって、多くの人が喜んでくれて、社会に貢献するといった、承認欲求の実現を、手応えのあるものとして感じる事ができたのだと思います。

最後になりますが、この本は砂の女と砂の部落という、異様な登場人物と舞台を設定することで、欲望を満たそうとすればするほど心が枯渇していったり、自由であればあるほど不自由を感じたりといった、普遍的な人間の姿を描き出したのだと思います。

あまりにも面白かったので、安部公房氏の他の本もすぐに借りて読み始めました。

「利他」とは何か

著：伊藤亜紗 中島岳志 若松英輔
國分功一郎 磯崎憲一郎

集英社新書

この本は、伊藤亜紗、中島岳志、若松英輔、國分功一郎、磯崎憲一郎といった、順番に美学者、政治学者、随筆家、哲学者、小説家といった異なる専門の



人が、「利他」というテーマをそれぞれの切り口で考えを述べるユニークな構成になっています。そしてその切り口は全くといっていいほど異なり、まるで違ったテーマについて語っているかのように感じる瞬間もありますが、読み終えると「利他」について多角的な考え方を学ぶことができ、理解が深まりました。

そもそもこのプロジェクトは、東京科学大(旧東京工業大)の「未来の人類研究センター」の研究の一環です。僕は、旧東工大のリベラルアーツに取り組む姿勢に関心を持ってきました。2010年代に上田紀行、柳瀬博一、池上彰、伊藤亜紗などのそうそうたるメンバーが、東工大の教育の在り方、ひいては日本の教育の在り方を本気で検証し、再構築を図ろうとしたようです。アメリカやイギリスの名門大学にも実際に足を運んだようです。彼らの書籍やポッドキャストで、その頃の教育への情熱を感じ、うらやましく思ってきました。

今回は主に僕の考える「利他」と、この本から学んだ新しい視点をまとめていこうと思います。

特に高校生のみなさんは、「利他」という言葉を聞いてどんなことを思い浮かべるのでしょうか。一般的には「利他」の反対は「利己」なので、「利他」と聞くと、他人を思いやることやボランティアや慈善事業のような、100% ポジティブなイメージを抱く人が多いかもしれません。

みなさんは「教え魔」という言葉を聞いたことがありますか？一般的に教えることは良いことですが、「魔」は「悪魔」の「魔」ですから悪い意味で使われていますよね。例えば僕の場合、ゴルフの練習場に行くと、すぐに「教え魔」を見つけることができます。どう見ても僕と同じようなアマチュアであるにもかかわらず、自分の知っている知識を身振り手振り、手取り足取り、時には人のクラブで人のボールを打つ人までいます。教わっている側は、多くの場合、微妙な表情を浮かべています。多分、「あなたの言いたいことは分かった。だけど自分には自分のゴルフがあるので放っておいてほしい」と思っている人は多いことでしょう。多分教えている人に悪気はないのでしょうし、そうした時はなかなかその親切心を断ることは難しいものです。そして、こういったことは日常の多くの場面で行われているのです。

以前の書評でも書きましたが、僕自身は、利他主義そのものや、利他が素晴らしいことだと思っている人に対して、疑問を抱いています。本には、経済学者ジャック・アタリの言葉として以下が紹介されています。

「利他主義とは、合理的な利己主義にほかなりません。みずからが感染の脅威にさらされないためには、他人の感染を確実に防ぐ必

要があります。利他的であることは、ひいては自分の利益になるのです。またほかの国々が感染していないことも自国の利益になります。」

これが僕自身の利他主義に関する考え方とほぼ合致します。利他は、特にそれが度を超えると、他人に自分の考えを押し付けることになりますし、中には自分の行いに対して見返りを求める人がいます。さらにその見返りの欲求が攻撃的なものになるのを何度か見たことがあります。

利他は、相手の自由を奪い報酬を要求し、プレッシャーを与える危険性と隣り合わせだと思うのです。僕が所属する教育だとか、医療、福祉といった職種の人たちは特に気をつけなくてはなりません。良かれと思った利他的行動は実は自己満足でしかなく、結局やっていることは利己主義であるということは確かにあるのです。また、そういう人は、自分は他人に良いことをしていると、つまり自分は純粋な利他主義を実践していると思いついでいるので、この誤解に気づくことができないことが多いような気がします。

著者の1人である伊藤亜紗氏は、一筋縄にはいかない利他の在り方について以下のように述べています。そしてそれは、まさに僕の意見と合致するものです。

「ハリファックスは、『真の利他性は、魚の釣り方を教えること』だと言います。魚を分け与えても、放っておけばすぐにまた空腹になってしまう。それでは利他にはならず、悪しき依存を生み出すだけです。」

教育について語られる本の中にも、この「魚を与えるのではなく釣り方を教える」例えは

よく出てきます。魚を与えることの良くない点を2つ挙げてみます。1つは、自立を促すことができない点です。ずっと与えられないといけませんし、他者に頼る考え方が根付いてしまいます。2つ目は、階層を明確にしてしまう点です。物質的なモノを与え続けることは、与える側と与えられる側の区別を明確にし、そこに上下関係が生まれます。それは行き過ぎると、見返りを求めたり暴力を振るったりして、「自分は優れている」という満足を得るためだけの行為になり下がってしまうのだと思います。

みなさんは、「おはよう」「ありがとう」と友人や家族と挨拶を交わしますよね。僕らはなぜこんな言葉の交換をするのでしょうか？僕たち教員も、特に深く考えることなく「大きな声で挨拶しなさい」とよく言います。ところで、「挨拶をする理由は自分が得をするためだ」という信念を持って子供たちに指導をしている大人がいます。みなさんはどう思いますか？「おはようございます」と先生や上司に挨拶をするのは、自分が何か得をするためでしょうか？僕自身はそんなことを考えて挨拶をしたことは一度もありませんね。挨拶は自発的なものであって、何かの手段ではないでしょうし、強制されたりするものでもないと思います。

本の中には、真の利他のイメージとして『「うつわ」のようなもの』という表現で述べられています。相手のためになにかをしている時、自分の考えを押し付けるのではなく、相手が入り込めるような余白を常にもっていることが大切なのだと思います。これは見方を変えると、利他を本当の意味で実践できる

人の条件を教えてくれるものだと思います。つまり、その利他的と思われる行為があってもなくても、その人の人生の満足感は一定でなくてはならないのだと思います。利他が自分の人生を充足させる手段であってはいけないのです。もっと分かりやすい言い方をすれば、利他を実践できる人の条件は、自分に余裕がある人であると言っても良いのかもしれない。

本の中で、利他の本質を示すものとして以下のように書かれています。

「大切なのは意図的な行為ではなく、人知を超えた『オートマティカルなもの』であり、そこに『利他』が宿る構造こそが重要だと論じました。これも人間が『うつわ』として生きること直結します。」

確かに、老人に席を譲ったり、子供たちに一生懸命勉強を教えたり、介護、ボランティア、募金など、あらゆる場面で見られる、損得勘定なしの純粋な行為は、どこか自然で「オートマティカル」なもののように感じます。

この本の中で、哲学者の國分功一郎氏は、利他の本質を解き明かすために「能動態」でも「受動態」でもない「中動態」の世界を解説していて、非常に共感できました。

國分氏は、「私は水がほしい」という能動態の表現が、必ずしも自分の主体的な意思だけではないと指摘しています。喉の渇きという生理現象や、家族のために水を確保しなければならないといった外的要因によって「させられている」状況も考えられ、これは受動態に近い状態です。このように、能動態でも受動態でもない、主体と客体が曖昧な状態を

「中動態」と捉えています。

なんだか分からない人のために、僕なりに強引にまとめるのなら、中動態には「意思」は存在せず、何かに突き動かされるような「オートマティカル」な行為のことだと思います。そしてこの本の主題である、「利他」の本質もこの中動態の中にあるのだとこの本は述べています。利己的ではない利他、特定の人だけでなく世界の全ての人や物に開かれていること、相手を支配しようとするのではなく信頼して任せること、本物の利他とはそういうものなのだと思います。

他人の顔

著：安部公房

ほるぷ出版

安部公房の本を
しっかり読んだのは、
先日書評を書いた『砂
の女』が初めてでした。
読み終えて、著者の他
の本も無性に読みた
くなり、学校の図書館



に行き、すぐにこの本を借りました。2冊じつくりと読み終えて、著者の特徴を僕なりにまとめるのなら、感情の比喩表現が独特で多彩であることと、家族のような非常に親密な人にすら話すことを躊躇うような、人間の心の奥底にある欲求や葛藤を見事に表現していることになると思います。そしてSF小説のような奇想天外な状況設定に、登場人物たちがどうになってしまうのか、ぐいぐいと引き込まれていきます。また、そのはらはら感が心地よく、1冊読んだら同作家の違う作品を読んでもみたくなる中毒性があります。

さて、この小説のストーリーを簡単に述べると、顔をなくすほどの傷を負った男が、仮面をつけることで別の人間として生きようとします。そして、自分を馬鹿にしていると感じていた妻の前に、仮面を被り、いい男として現れ誘惑するのです。その作戦は成功するのですが、あとになって、妻に変装をしていることが分かっていた上で誘いに乗ったという事実を知らされるのです。

僕たちは日常生活の中で、多くの「仮面」を被って生きていると言えるかもしれません。例えば、化粧をしたり身なりを整えたり、

服装や装飾品だってある種の仮面だと言えるでしょう。周囲に合わせて空気を読み、心の奥底にある本音を言わずにいることも、仮面を被ることになるでしょう。家族や友人にも言えないような願望をひっそりと胸の奥にしまい込んでおくことも、誰にも言えない秘密があるという意味では仮面だと言って良いでしょう。

果たして仮面を被っていない人など存在するのでしょうか？秘め事が全くなく、他者に見せる顔と内心で感じていることのギャップが全くない人は存在するのでしょうか？そう考えると、他者の期待に応えようとして自分を演じたり、他人の視点を借りて自己探求をしたりするのは、人間の本質だと言っても良いことが分かります。

著者は、人間が顔を覆う「仮面」や「覆面」の重要性を説いています。文明が衣服によって肉体を覆ってきたように、将来的に覆面をすることが常識になる可能性は否定できないと述べています。そして、覆面は、素顔のとき以上に他者との関係を普遍的なものに高めてくれるかもしれないと示唆しています。

僕たちの日常生活の中で、自分の願望を押し殺して、何かの役割を演じなくてはならないことは確かにあります。例えば僕は、家では「父親」の役割、職場では「先生」の役割を担い、それぞれ役割に応じた「顔」を持っているわけです。正直に告白すると、「先生」という覆面を被ることなく、ごく近い人だけが知っている、もしくは自分だけが知っている剥き出しの自分のまま、教壇に立つのは不可能です。僕だけでなく、ほぼ全ての人は、状況に応じた「仮面」を被ることで自信をもっ

て行動することができ、他人に受け入れられることが可能になるのだと思います。

僕はみんなそれぞれ「顔」があります。その事実はあまりに当たり前で、疑問に思うことはありません。みなさん、恋人でも友人でも親でも良いので、好きな人の顔を思い浮かべてください。もしも仮に「自分が好きなのは外見ではなく、内面なのだ」と思っていたとします。そして、この本の主人公のように顔をつぶしてしまったとしましょう。果たしてみなさんは同じ感情を持ち続けることができるのでしょうか？その人を、以前と同じように好きでいられるのでしょうか？

正直言って、僕は自信を持ってイエスと答えることはできません。「僕は君の内面が好きなんだ」なんていうノータンキなことを言うてはいられない心境になるだろうと思います。表現するのは難しいですが、顔は人格のシンボリックな役割を果たし、その人格の内面に迫る入り口なのだろうと思います。人と人とを結びつける通路と言っても良いかもしれませんが、「顔は人格のほんの一部でしかない」という、真理らしいものは、この本の中で疑問視されていくのです。本の主人公は以下のように回想しています。

「むしろ、顔の喪失が、べつに本質的なものの喪失ではありえないという、終始一貫した自己防衛の見解の延長として、無意識のうちに、仮面そのものをも気軽に考えようと努めていたせいではなかろうか。」

この物語では、顔は、僕たちが社会的アイデンティティを形成する上で非常に重要な役割を果たしていることを浮き彫りにしていきます。主人公は顔を失うことで、他者とコミュ

ニケーションするツールを失い孤立していきます。そして「自分とは何か」という多くの人が向き合う難問に、強制的に向き合わざるをえない状況になり、自己の象徴というべき顔を失った主人公は、その内部、心や尊厳までも見失って行くのです。

他の動物と違い人間は、他人からと自分からと、両方の視点から自分のことを認識する宿命を背負っているのだと思います。他の動物のように、ほぼ本能100%で生きることは、社会が許さないのではなく、僕らの本質がそれを許さないのです。他人からどう思われるかを考えずにはいられない存在である僕らは、自分の外見・業績・社会的地位といったものを意識せずにはいられないのでしょう。そして、自分の存在を物理的に示す最も分かりやすいものが顔なのです。同時に人間は、自分の内部にも向き合わずにはいられません。そこには穏やかな気持ちや安らぎのようなポジティブなものもあるでしょうし、欲望や衝動なども存在するのです。

この本が書かれた1960年代の日本は、高度経済成長の真っ只中でライフスタイルとともに人生の価値観まで、現在にまでつながる現代型モデルへと急速にシフトしていた時期です。人々は外見や地位といった目に見えるものによって評価されるようになりました。多分、この本には、人間の内面や存在の根源的価値を軽視する当時の社会への痛烈な批判が込められているのだと思います。

最後になりますが、この本は単なるフィクションにとどまらず、人間存在の本質について考える機会を与えてくれます。僕たちは「仮面」を脱ぎ捨てることはできるのか？「仮面」

は自己の一部なのか？自己の本質とはどこに存在しうるのか？この本を読むことで、これらの問いを終始問いかけられ、読者は自己探求の旅に導かれます。

ワイルド・ソウル (上・下)

著：垣根涼介

新潮文庫

上下巻のボリュームある小説でしたが、あまりの面白さに1週間どっぷりとハマり込みました。章ごとにフォーカスする人物が変化し、それが複雑に絡み合っていく疾走感が最高に心地よかったです。



この物語の主人公たちは、日本政府に復讐を企てます。この本によると1960・70年代に、日本は、経済成長政策の一環として、多くの日本人をブラジルに移住させます。移住先には日本以上の豊かさが保証されているという嘘を信じて、多くの人々が移住を決意しますが、待っていたのは、文明の行き届いていない未開の地での原始人とほとんど変わらない厳しい生活だったのです。

主人公たちはその地で幼少期を過ごします。川遊びをしている時にワニに襲われたり、原住民に攻撃されたり、マラリアにかかって死んだ両親のウジの湧いた死体と何日も過ごしたりしています。幼少期のこの辛い思いは、彼らの心の奥底から消えることはなく、日本政府に一泡吹かせなければいっても立ってもいられない状況へと追い込まれていくのです。

高校生みなさんは、自分を1回壊してみようと思ったことはありますか？僕は思春期真っ只中だった中学生の頃、自分と他者との関係性についていろいろと考えていました。はたから見ればそんなふうには見えなかった

のかもしれませんが、僕自身は自分らしくいられず、もやもやとしていたのです。そんな自分が嫌だったので、高校では中学校での自分を一旦破壊して、新しい自分で生きようと決めました。あまり他人の目を気にすることなく、正直でいることを大切にしようと決めたのです。

やや危険な発想かもしれませんが、破壊と再生は、劇的な変化を求めるなら非常に有効な手段だと考えています。従来のもを一旦思い切って手放すことを恐れていては、なかなか変化を生み出すことはできません。また、その変化は、自分が主体的に「変化したい」のではなく、自分の内なるもの、本能とか情熱とか、そういったものによって突き動かされるのがたびたびあるように思います。

例えば、僕は3年に1度くらいの頻度で、英語の授業スタイルをガラッと変えます。その理由は、生徒により分かりやすい授業をしたいとか、もっと効率的に英語の力をつける授業をしたいとか、そういったものではないのです。自分自身が自分の授業に飽きてきてスリルを感じることができず、挑戦をしていない自分自身に腹が立ってくるからなのです。

僕はこの本を読んでいて、1つのテーマは、この破壊と再生にあるのだと思いました。登場人物の1人である松尾は、幼少期にブラジルからコロンビアに向け一家で脱出を試みたとき、盗賊に襲われ両親を殺され、マフィアのドンに命を拾われ育てられるのです。大人になった彼は、マフィアとして悪事に手を染める自分に違和感を感じながらも、仕方ないことだと自分に言い聞かせて生きていたの

ですね。そんな彼を解放する手段は、日本政府に復讐をし、自分を育ててくれたポストと縁を切ることしかなかったのです。そうです、生まれ変わるには破壊が必要なのです。

松尾には、首都高を改造された車で時速200km以上のスピードで疾走し安心感を得る妙な癖があります。ラストの場面では、死を覚悟しながら300km以上の猛スピードで海に突っ込んでいきます。僕は松尾が疾走する場面が出てくると、まるで自分も同乗しているかのようなスリルを感じました。推測するに、松尾は普段の生活では自分らしく主体的に生きている実感が得られなかったのでしょうか。両親の死というトラウマを抱え、他人に生かされている絶望的で窮屈な状況だったのだと思います。猛スピードで運転することで、彼はフロントガラスを通して、未来が一瞬で過去になることを目撃し、自分が生きている実感を得たのだと思います。また、危険を犯し、死を比較的近くを感じることによって、自分の生や生きたいと思う自分の主体的願望に触れることができたのだと思うのです。

主人公ではないものの、物語の中に登場する「貴子」はとても人間らしく魅力的で、僕は彼女にフォーカスされている章が最も好きでした。元テレビアナウンサーで報道ディレクターをしている彼女は、主人公の1人である日系2世のケイと出会います。彼女は才色兼備で、一般的には誰からも羨ましく思われるような女性です。しかし、年齢を重ね、若さだけでちやほやされることはなくなり、アナウンサーとしての仕事もどんどん減っていきます。建前が横行する毎日に怒りを感じながらも彼女は毅然として強い存在であろう

としますが、時折寂しさを感じてやけっぱちな行動をしたりもします。強さと脆さ、美しさと醜さが同居する、魅力的な存在です。

貴子が少しずつ惹かれていくケイという人物は、アマゾンで育った日系2世で、強靱な肉体を持ち、底抜けに明るく楽天的で、神も悪魔も己の命でさえも笑い飛ばすような、外見は僕たち日本人と変わりませんが、中身は全く違った野生的な人物です。貴子もまた、自己破壊と再生のきっかけを潜在的に探し求めていたのでしょうか。そんな時に、自分が知り合ってきた人たちとは全く違うケイとの出会いは運命的なものだったのでしょうか。貴子は自分の奥底でくすぶっていた、自分らしく生きたい情熱に気づき、精力的な人生を取り戻すのです。

僕はこの物語のラストがすごく好きです。貴子は仕事を辞め、ブラジルでケイと再会し、その後もそこで一緒に暮らすことが暗示されてこの話は終わります。つまり貴子は、富や安定よりも愛を選んだのですね。人生の中で重要なものはたくさんあると思いますが、その中でも自分らしく情熱的に生きることを最優先に考えたのだと思います。その潔さに感動し、読み終わった後、意味不明なやる気が身体中にみなぎってくる感じがしました。

この本の中には、大きく分けると2種類の人が登場します。松尾、ケイ、貴子のように「どう生きるか」を常に自分自身に問いながら葛藤する人たちと、社会やシステムに飲み込まれ、個人としてどうあるべきかに疑問すら抱かない、もしくは疑問を思っても考えることを諦めてしまっている人たちです。後者として、この本では外務省の人たちや、その命令

で、嘘だと知っていながら私利私欲のために海外への移住を斡旋した人たちが描かれています。このように言葉で分類するのは簡単ですが、ほんのちょっとしたことで、前者は後者に、後者は前者になりうる、紙一重なものだと僕は思うのです。

『ワイルド・ソウル』というタイトルにもあるように、僕ら人間はどう生きるべきかについて考えざるを得ない存在ですし、この本の登場人物のように、建前や一般常識から距離を置き、自分に正直に生きる姿に憧れを感じます。しかしながら、現代社会で生きるとは、我々人間が生み出した法律や秩序やルールといった、複雑なシステムの中で生きるということとイコールでもあるのです。みなさんは安心と冒険、どちらを選びますか？この問題にどのように向き合い、自分自身と折り合いをつけていくかは大変難しい問題だと思います。

天地明察（上・下）

著：冲方丁

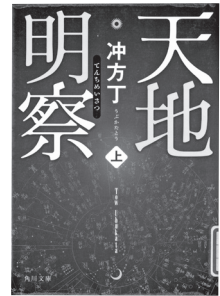
角川文庫

何か1つのことに生涯をかける人生は、とても魅力的ですよ。この本を読み終えて、主人公である洪川春海の生き様に感動すると同時に、激しい嫉妬心を抱きました。

歴史上の偉人の多くは、それがどんなに険しい道のりであっても、自分の成功を信じ抜きます。そしてその多くが、「自分にはこれしかない」という使命感を持っていたように思います。

僕は大学生の頃、ギターばかり弾いていましたが、最も影響を受けたのはエリック・クラプトンというギタリストです。今聴いても、例えばビートルズやローリング・ストーンズといった同時代の音楽と比べると、クラプトンのギタープレイは異彩を放っています。どうやら彼は高校生の頃にギターを手にし、同時にアメリカのブルース音楽に出会いました。彼自身の言葉によると、その時から全ての時間をギターと音楽を学ぶために費やしたそうです。同世代のミュージシャンがバンドを組みロックンロールに明け暮れている時、クラプトンは比較的地道なブルースを聴きまくり、ギターの手を磨いていたのです。彼は億万長者のスターになろうとは思っていませんでした。ただ、ブルースをもっと上手にプレイしたいだけだったのでしょう。

この物語の主人公は、洪川春海という人物



で、日本の新しい暦をつくることに人生をかけます。僕は知らなかったのですが、江戸時代に実在した人物で、物語も史実に基づいています。

彼は幼い頃から囲碁の棋士でしたが、少しずつ数学に興味を持ち始めます。そして、当時の日本が採用していた「授時暦」と呼ばれるモンゴルのカレンダーには、ずれが生じていて、日食や月食の日がことごとく外れるようになります。そこで、春海は仲間たちと日本全国を歩き回って、星をたよりにその土地の緯度を計測していくのです。その間およそ20年間、多くの奮闘と挫折を乗り越えて彼が完成させた「貞享暦」が新しい暦として採用されるのです。

僕ら現代人は、暦について疑問を抱くことはありませんよね。この本を読むと、暦だけでなく算術においても、いかに多くの人が古いものに疑問を抱き、新しいものを生み出すために奮闘してきたかが理解できました。どんな時代においても先人たちの努力の結果である知恵や科学技術によって、自分たちの生活の基盤が成り立っていることを再認識させられました。

また、洪川春海の朴訥で純粋な人柄もとても印象に残りました。この新しい暦は、実質的には春海だけで作ったと言っても良いのですが、彼は自分を支援してくれた人たちや、自分に影響を与えてくれた人たちへの感謝の気持ちを常に忘れずにいます。暦が完成して社会的成功を得た後も、その名声に奢るような様子は一切見られません。彼は純粋に、国を治めるためには正しい暦が必要で、それを成し遂げるからこそ自分の存在意義であると

確信していたのでしょう。彼の人生に、富を得て贅沢をしたいとか、苦しい観測作業から逃避したいといった迷いはありません。

この物語では歴史の教科書に出てくるような人物、例えば水戸光圀や保科正之といった人物が登場します。そんな中で、非常に印象に残ったのは、天才数学者である関孝和という人物です。僕はこの本を読んでいる間、彼が出てくる場面が好きで、最も興奮したのは2人が初めて対面した場面でした。

どんな数学の問題でも「一瞥即解」で解答してしまう関の存在に春海は気づき、春海は、その才能に畏敬の念を抱くのです。春海にとって関は、憧れの存在でありライバルであり、同志だったのだと思います。この2人が初めて直接顔を合わせるの、互いの存在を知ってから何年も経ってからのことでした。春海は、最初の暦を作りあげ、申請をするのですが、それが誤ったものであることが判明するのです。自決を考えるほど彼は落胆するのですが、その頃に初めて2人は対面します。まさに運命の出会いと言っても良いのかもしれませんが。関は独自で暦について調べていました。そしてその考察が書かれた紙を春海に渡してこう言います。

「持って行け。わしが持っていては何にもならん。頼めるのは、お主だけだ」

この言葉は、耳ではなく直接、心の臓に響いたと書かれています。これを機に春海は立ち直ることができるのです。僕が思うに、この本は数学に興味がある人も楽しく読むことができます。この時代に、算術においても多くの学者が新しいものを生み出そうと格闘していたことが分かります。春海と関

のやりとりを通して、数学とは今まで見えなかったものを見るための学問であるのだということが理解できた気がします。

最後になりますが、洪川春海のような、一生を1つのことに捧げるような人生を誰もが送れる訳ではありません。たった1つの人生の意義を見つけられない人がほとんどでしょうし、見つけられたとしても、その道の途中で挫折する人は少なくありません。そもそも何を成し遂げたかで、その人の価値が決定されるわけではありません。

しかし、「自分がやらずに誰がやるんだ」という使命感と、人生をかけて何かを成し遂げようという情熱に突き動かされる生き様は、間違いなく潔く、美しく、感動的だと思わされる本でした。

喜ばれる人になりなさい

著：永松茂久

すばる舎

「親が子どものことをよく理解しているように、子どもにも、親のことがよく見える。子どもも年齢を重ねてくると、それまで絶対的な存在だった親も、ひとりの人間だということがわかってくる。」

これは、この本の一節ですが、まさに僕自身も大人になって同じ体験をしました。人は大人になると、かつて自分と同じ年齢だった親のことを想像し、当時の親の境遇や気持ちを推測することができるようになります。例えば、自分に子どもが生まれて、親の気持ちが初めて理解できたり、自分も仕事をするようになって、親にも家で見せる「父親」や「母親」以外の役割があったことを実感できるようになったりするものです。

この本は、著者が、幼い頃から母親が言い続けていた「喜ばれる人になりなさい」という言葉を常に胸に抱きながら、様々な困難を乗り越えていくというあらすじです。ですので、普段あまり考えることのない、母親からの影響について考えさせられました。

僕の場合は、中学生の頃に、母親に依存しないようにしようと思い始めて、高校生になって実家を離れてからもあまり連絡はとらずにいました。今思うと、10代の後半から20代の頃は、母親に素直に愛情を表現することは、どこか「マザコン」っぽい感じがして、



かっこ悪いと思っていました。ですが自分にも子どもができて父親になり、様々な経験を通して、それまで知らなかった母親のことを知ることができ、心から感謝できるようになりました。

みなさんが母親から受けた影響とはどんなことでしょうか？今振り返ってみると、僕にとって母親は、家族の精神的な「安全基地」だったように思います。家族のメンバー、父と僕と姉と弟は、趣味も多かったですし、何かに夢中になると没頭するタイプでした。しかもメンタルが安定していたわけではなく、どちらかというと感情をすぐに表すタイプでした。僕が思うに、家族のメンバーがいろいろな無謀な挑戦に躊躇なく飛び込んでいったのは、母親の存在が大きかったのだと思います。無自覚でしたが、たとえ失敗しても母なら受け止めてくれるだろうし、見放したりすることはないだろうと感じていたのだろうと思うのです。それは現在も変わることはありません。僕にとって母親は、いつでも戻ることのできる基地のような存在なのです。

母からの影響としてもう1つ大きかったことは、子どもを信じるということだと思います。僕は母から「勉強なさい」と言われたことは一度もありませんし、東京で1人暮らしを決めた時も、就職や結婚などの人生の重要な決断をする時も、決断を僕に委ねてくれました。そのおかげで自分の人生は自分次第だと実感をもって大人になることができましたし、自分の決断には自分で責任をとらなくてはならないという姿勢が身についたと思います。

この本の中でも、筆者の母親が信じている

ことの1つとして「何があっても子どもの味方でい続けること。何があっても子どもの未来を信じること」が紹介されています。実際に親になって分かったことですが、自分の子どもを信じることは、言葉にするのは簡単ですが、実践するのは難しいものです。怪我をしないか心配になるし、もっと勉強してほしいと思うし、どうしても心配しすぎたり期待しすぎたりしてしまうものだと思います。

何があっても子どもを信じるという意味では、僕は母親に完敗ですね。この本を読んで母親の偉大さに改めて気づかされると同時に、今からでも自分の子どもたちを可能な限り信じるようにしようと思われました。生きていくと必ず困難に遭遇します。精神的に生きていけばなおさら大きな困難に出くわすものです。そんな時に、辛い時こそ、どんなことがあっても自分の子どもの味方でいてあげようと思われました。

筆者の母親は、この本のタイトルである「喜ばれる人になる」ことを非常に重要に考えていて、まさにその言葉通りに人生を全うします。そして息子である筆者も常にその母親の言葉を大切にしながら、さまざまな挫折を乗り越えていくのです。

みなさんは人を喜ばせることが好きですか？ひょっとすると、このことにネガティブな印象をもっている人もいるかもしれません。他人のために時間を使うのは時間の無駄とか、自分の人生は他人のためにある訳ではないかと思っていないでしょうか？実は僕も高校生の頃はそんなふうを考えていました。筆者は以下のように言っています。

『「喜ばれる人になりなさい」とはつまりは

『自分の人生を生きなさい』ということなのだ。』

世の中にはいろいろな仕事があります。よくよく考えてみれば、そのほとんどが他人を喜ばせるためのものであることが分かります。教育や医療や介護などは分かりやすいですが、例えばゲーム開発やサービス業に携わる人だって、人を喜ばせることが彼らの1番のモチベーションなのだと思います。

僕ら誰もがエゴがあります。社会的な成功を求め、お金も欲しいし、異性にもモテたい。油断するとすぐに自分のことばかり考えて、他人を蹴落としてでも自分の幸せを勝ち取ろうとします。しかし逆に、他人の役に立つ自分自身に喜びを感じ、それを人生の幸福の拠り所にして生きることだって僕たちにはできるのです。つまり、喜ばれる人になることは、他人だけでなく自分自身も喜ばせることにつながるのですね。

この本は、ポジティブな自己啓発書であると同時に、非常に感動的な、筆者と母親の愛情あふれる物語です。使われている言葉も分かりやすいですし、読書初心者には最適な一冊だと思います。この本を読み終えたら、誰だって他人に優しくしようと思うことでしょう。そして母親のありがたさについて考えずにはいられないでしょう。

あつという間に人は死ぬから

著：佐藤舞

KADOKAWA

正直に言うところの本にはあまり期待をしていませんでした。なぜなら、僕は時間効率やタイムマネジメントに関する本をたくさん読んできたの

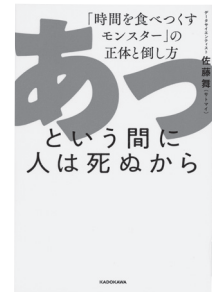
で、また同じようなことが書かれているのだろうと思っていたからです。この本はそれらのよくある本とは切り口が違います。

時間効率について語る多くの本が、どうやって時間を作り出すかというハウツーについて述べるのに対し、この本では、自分が時間を支配する方法と、そのことの基盤となるマインドセットを教えてください。

この本を読んで、すっと腹落ちして、「ああ、そういうことだったんだ」と理解できたことがあります。

僕は家族の中で一番のせっかちです。職場でもかなりせっかちな方であることは間違いありません。子供の頃からそうだったかという、決してそんなことはありません。大人になり、いろいろな経験を通して少しずつそうになっていったのです。

例えば、自分の子が小さい頃は常に「明日、また風邪をひいて職場に行けないかもしれない」と思っていて、やれることは早めにおこななければならないと思われる経験をしました。また、叔父さんや父が若くして亡くなったことを通して、自分にも間違いなくいつか死が訪れることを痛感する経験もしま



した。

自分にも、なぜ自分はこんなに人生を焦って生きているのか分かりませんでした。しかもその焦りは年齢を重ねる度に大きくなり、先を急ぐあまり目の前のことに集中しきれない自分自身に腹を立てていたのです。

この本には、人間は、3つの不安を紛らわせるためにほとんどの時間とお金を浪費していると書かれています。その3つの不安とは「死の不安」「孤独の不安」「責任の不安」です。正直言って、読んでいてドキッとさせられましたし、自分も気づくことのできなかつた心の奥底を覗かれたような気持ちになりました。筆者は次のように書いています。

「あなたは、本命の行動ではなく、[〃]代替の行動、に時間とお金を浪費して、満足した[〃]フリ、をしているために、いつまでも本命にたどりつけないのです。」

みなさんはどうでしょうか？死・孤独・責任に本当の意味で向き合っているのでしょうか？

人は誰でもいつかは死ぬなんてことは、小学生でも知っている当たり前のことです。しかし10代の頃は、明日自分が死ぬかもしれないなんて思わないし、「ああ、俺の人生はあと70年だな～」なんて考えることもありません。でも大人になると、家族や親戚、同じ会社の先輩方の死を目の当たりにしたり、自分と同じ世代、時にはずっと若い人でも、病気や不慮の事故で命を落とすことがあることを知ります。そういう経験を通して、自分の命が有限で、ちょっとしたことで消えてしまうものであるということを実感するようになってきます。

4代になって、僕は極端に時間効率を大切にするようになりました。今でも無駄に時間だけが過ぎていくことを我慢することは難しいですし、1日にやりたいことを可能な限り詰め込もうとしています。このこと自体は完全に悪いことだとは思いません。つまり、自分の死を意識するからこそ生きる情熱が生まれるのでしょうし、それを原動力にして物事を成し遂げた人はたくさんいます。

しかし、筆者はそのような状態は、死への不安の代替行動だと述べます。趣味の時間、例えば僕だったらギターやゴルフや登山は、その不安からの逃避なのでしょう？正直言って、こんなふうに疑問を抱いたのは初めてです。僕には確かに、目の前のことに集中しきれないことがあります。家族と食事をしながら翌日のゴルフのことを考えたり、ゴルフをしながら仕事のことを考えたり、楽しみに待ち望んでいたはずのものに集中することなく、先のことを考えていることがあります。これではなんのためのタイムマネジメントなのか分かりません。

次は「孤独への不安」について考えてみます。筆者は以下のように述べています。

「心理学者アルフレッド・アドラーは『すべての悩みは人間関係である』と言いましたが、そこを掘り下げていくと、『本当は、自分は誰かに必要とされたいのだな』という本心に気づくのです。」

人間は社会的存在としての運命を背負っているのです、どんな人だって周囲と同調したいし、他人に良く思われたいし、仲間外れにはなりたくないものです。その不安のせいで、やりたくもないことに多くの時間を費やすの

です。アルコール依存症、ギャンブル依存症やドラッグ中毒、ゲーム依存なども、根っこにはこの「孤独への不安」があるのではないのでしょうか？孤独と向き合うことを避けて、手軽に幸福感を得る方法を一度知ってしまうと、そこから抜け出すことはなかなか難しいものです。

正直に述べると、僕には興味を持ったものにはとことんのめり込んでしまう性質があります。この点に関しては父親もそっくりだったので、多分遺伝的に備わったものでしょう。この本を読んで、僕のこの性質もひょっとすると孤独を感じるのが嫌で、それから逃避するための代替行動だったのではないかと思われました。

人間はみんな1人で死んでいくという絶対的真理は、言葉にするのはいとも簡単ですし、理解しているつもりではいるものの、それを実感の伴ったリアルなものとして受け止めることは相当難しいことなのだと思います。

この本では、これらの不安の奴隷になることなく生きる方法も述べられていて、その中で印象的だったのは「価値観」を大切に生きていくということです。ここでの「価値観」は「ゴール」とは違います。「ゴール」は到達してしまうとそこで終わってしまいますが、「価値観」はそうではなく、どこかに到達するものではありません。例えば「西に行こう」とか「正直に生きよう」とかそういったものです。

生きていくと多くの選択をしなくてはなりません。迷うこともあるし、大きな失敗をすることだってあります。そんな時に、自分の中にしっかりとした幹となる「価値観」があ

れば、大きな手助けになってくれるのではないのでしょうか。

この本では、人それぞれの「価値観」の見つけ方についても詳しく述べられています。そしてその「価値観」は「アイスクリームの味」のようなものだとも述べられています。バニラでもチョコレートでもストロベリーでも良く、他人に決定されるものでもないと言われています。

筆者の価値観の1つとして、『ルパン3世』に登場する峰不二子の言葉が紹介されています。

「つまずいたのは誰かのせいかもしれない。けど、立ち上がらないのは誰のせいでもないわ。」

つらい境遇に追い込まれるとつい誰かのせいにしてしまいますよね。僕も自分のことを言われたような気がしてドキッとしました。多分、こんな価値観を持っている人は、どんなことにも前向きに挑戦できるし、失敗したり悩んだりしても、それを自分事として捉えて何度でも這い上がってこれるのだと思います。

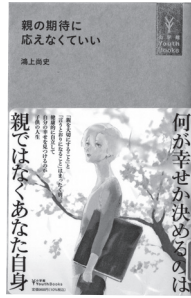
この本は基本的にはビジネス書ですが、非常に分かりやすい言葉で書かれているので、哲学に興味を持っている高校生には、入門書としてぴったりだと思います。今までにはなかった視点で、自分の人生や世界そのものを見られるようになるかもしれません。

親の期待に応えなくていい

著：鴻上尚史

小学館 Youthbook

この書評でも何度か書いてきましたが、小学館 Youthbook のシリーズは高校生にぴったりだと思います。どの本のテーマも、子供から大人になろうとしている高校生には最適ですし、使われている言葉のレベルも適切で読みやすいからです。受験勉強と同じくらい、ひよっとするとそれ以上に価値のあるものだと思います。



この本を読んでいる間、「親離れ子離れ」という言葉が常に頭に浮かんでいました。最近あまり聞かれなくなりましたが、僕が高校生くらいの頃はよく言われていたように思います。

まずは親の視点で述べていきますが、子供が小学生くらいまでは、子供1人ではほぼ何もできないので、ほとんどの親が子供と二人三脚で生活せざるをえません。しかし中学生くらいになると、親がどこまで子供に干渉するかは、かなり差が出てきます。

筆者は親の役割を「健康的に自立させること」だと繰り返し述べています。親は、子供が中学生くらいになったら、少しずつ子供から距離を置き、自立に向けて「子離れ」を開始しなければならないのだと思います。子供の部屋を掃除したり、進路選択に必要な以上に口を出したりしていると、いつまでたっても自分1人では何も決められず行動ができない人になってしまいます。

父親としての経験上言えることは、子供を突き放す親としての覚悟が必要だということです。それはリスクのある行動です。野生動物の中には、分かりやすい行動をするものがあります。子が1人で生き抜くために狩りを教え、子を置き去りにする動物もいますよね。

筆者も本の中で述べていますが、この問題でもっとも深刻なのは学歴に関するものだと思います。筆者は、子供を一流大学に進学させられずに恥ずかしいと相談してきた母親に、次のように回答しています。

「息子さんの大学が自慢できないのなら、あなたが頑張って受験して、一流大学に入って自慢したらどうですか？」

冗談のような回答ですが、筆者はいたって本気です。

僕も親であり教員なのでよく分かりますが、親は子供に過度の期待をしてしまうものです。理由は多分2つあります。1つは、自分ができたことは子供もできるはずだと決めつけていることです。自分が得意だったスポーツや勉強が、子供も同様に得意とは限らないのは明らかです。もう1つは、自分への自信のなさです。自分に自慢できるものがないから、子供を自慢したいのです。筆者は、「子供を通して、自分を確認し、自分を承認し、世間に対して自分の価値をアピール」すると述べています。

子供の学歴や就職は、親の人生を充足させるためのものであってはいけません。また、仮に子供が親の期待に応えるためにのみ勉強するのだったら、その子が親になった時、自分の子供に、その価値観を疑問を感じることなく押し付けるかもしれません。そうなって

しまうと、主体性のない大人がどんどんと増えていって、もはや日本の未来に関わるレベルの大きな問題になる可能性だってあるでしょう。

ここからは、子供にフォーカスしていきます。筆者は、親子は「他者度0」から「他者度100」を目指して成長していくと述べています。この他者度という考え方はとても分かりやすいと思いました。

高校生のみなさんは、自分の親の他者度はいくつでしょうか？小学生低学年の頃を思い出してほしいのですが、親は他の人と比べると全く異なる存在でしたよね。その頃、親なしでは生きられないですし、親の言うことに疑問を持った記憶はほとんどないはず。これが「他者度0」の状態、つまり親は全く他人ではない状態ですね。でも中学生くらいから、親も完璧な存在ではなく、良いところも悪いところもあることが分かってきます。自分にとって親が一番的確なアドバイスができる人とは限らないということも分かってきます。そうやって、親も自分とは違う存在であることを認識していくのです。「他者度」が上がっていくわけですね。もう1度聞きますが、今、親の他者度はいくつくらいでしょうか。考えてみてください。

「そして、これが大切なのですが、親と子供が考えていることが違っていることは、悪いことでも、間違ったことでもありません。」

筆者は本の中でこのように述べています。当たり前のことですが、親子であっても他人です。親も子も、まずは考えが違って当たり前だという前提に立たないといけません。そして重要なことは、しっかり互いに言いたい

ことを言って、適切なコミュニケーションをすることだと筆者は言っています。そうやって、親子の「他者度」を、0か100で考えるのではなく、例えば「他者度48」とか「他者度72」とか、適当なバランスを維持しながらゆっくりと高めていくと良いのだと思います。

20年以上教員をしてきて分かったのは、親子の関係について悩みを抱えている家族は、一般的に考えられているよりもずっと多く、その数は年々増えていると感じます。インターネットやSNSの登場によって、人間関係や社会の在り方そのものの変化に合わせて、親子の在り方も従来とは違ったものになってきています。例えば、僕が子供の頃は、当然ネットもSNSもなかったので、家族全員でリビングでテレビを観ながら、どうでもいい話をよくしていたものです。このような昔なら当たり前な家族の在り方は、今はほとんど見られなくなりました。

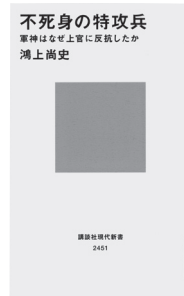
親子関係はこうあるべきという正解などないのでしょうが、教員としても父親としても、親子の関係の在り方についてしっかり考える必要があるなと思われました。高校生のみなさんがもし、親と違う意見をもつことに罪悪感を感じているのなら、この本を読んで勇気ももらってほしいと思います。

不死身の特攻兵

著：鴻上尚史

講談社現代新書

札幌の北に当別町という田舎町があります。僕の故郷から車で1時間半ほどでしょう。恥ずかしながら、僕はこの本の主人公である佐々木友次さんのことを全く知りませんでした。



第2次世界大戦中、佐々木さんは当時21歳で、特攻隊として出撃しました。特攻とは、航空機や小型艇に爆弾を搭載し、敵の艦船などに体当たりする戦法です。大戦末期に日本軍が組織的に行いました。ネットの情報によると、特攻で亡くなった人数は、陸軍と海軍を合わせて約6,000人とされています。

佐々木さんは特攻隊として9回出撃し、9回生きて帰ってきました。著者である鴻上尚史氏は、その特殊性に興味を抱き、存命で入院中だった佐々木さんに会いに行き、インタビューをしています。

必死忠臣の特攻隊が、9回生還したのにはさまざまな理由があったようです。特攻隊でありながら生き延びた人は、多くの場合、愛国心がなかったなどと批判されます。しかしこの本を読むと、実際には、軍人とはいえ1人ひとりにそれぞれの価値観と考え方があり、それほど単純なものではなかったことが分かります。佐々木さんの場合は、愛国心の欠如というよりもむしろ、愛国心と忠誠心の深さゆえに自分の信念を貫き、生還したと言っても良いかもしれません。

佐々木さんは、飛行機操縦の技術が高く、彼自身もその技術を誇りにしていました。その技術の高さゆえに、彼は作戦の初期から特攻隊に任命されました。軍は優れたパイロットに特攻をさせることによって、その作戦の重要性と正当性を証明したかったのです。しかし彼は、自分のような優秀なパイロットが、爆弾を機体に縛り付けられて爆撃することもできず、命と引き換えにたった1回の攻撃しかできないのは、国のためにならないと強く信じていたのです。現在の感覚からすると、非常に合理的な考え方です。

ある時、特攻から基地に生還した佐々木さんは、司令官に「貴様、それほど命が惜しいのか、腰抜けめ！」と言われます。それに対して佐々木さんは「お言葉を返すようですが、死ぬばかりが能ではなく、より多く敵に損害を与えるのが任務と思います。」と言い返しています。彼の置かれた特殊な状況下で、彼の行動が正しかったかどうかはいろいろな考え方があられるでしょう。しかし、いかなる状況下でも自分の信念を貫き通した彼の生き様には、個人としての潔さと強さを感じ、尊敬の念を抱かずにはられません。

著者の鴻上尚史氏は多くの本で、現在にも通ずる日本の特徴として、「社会」と「世間」の分化を指摘しています。そして「世間」を重要視するあまりに、独特の行き過ぎたルールができたり、「世間」の外にいる者を排除しようとしたりと述べています。みなさんは「お前、空気読めないよな」と言われたことはありますか？僕は数え切れないほどあります。もう空気を読もうとすらしなくなりました。この文脈における「空気」は「世間」

に似ているかもしれません。

世間体だけを過度に重要視していると、間違ったことも正しいものになっていくことがあります。誰もその間違いに対して声を上げることができず、物言わないことが空気を読むことになっていき、空気を読むことが世間の作法になり、思考停止になり間違ったものを無自覚に受け入れるようになるのです。以下のような一節があります。

「こんなに若い兵隊さんが、自ら志願して、祖国のために率先して身を捧げている。それを知れば知るほど、米英への憎しみや戦い続ける決意、窮乏に耐える根性、不屈の闘志を強くしていけだろ。そのためには、『戦果』より『死ぬこと』の方が大切だと司令官が考えても当然だと思うのです。」

この本を読んで分かったことは、いくら戦争という特殊な状況においても、軍人のように、そのど真ん中にいた人たちですら、ほとんどの人が人間らしい尊厳を保ち続けたということです。隊長の中には特攻に疑問を感じた者もいましたし、命を捨てる必要はないと実際に命令を出した者もいるようです。しかし重要なことは、「死にたくない」とか「特攻はおかしいのではないかと」いくら思っている、どんな立場であっても、それを言葉にすることはほぼ不可能な「世間」もしくは「空気」が、その当時にはあったことは間違いありません。そしてそれは当然、戦争に勝利するために意図的に作られたものでした。当時の「空気」を完全に知ることは不可能ですが、戦争を経験していない僕たちには想像できないくらい重苦しいものだったと思います。そんな中で、佐々木さんのように、自ら

の言動で自分の信念と正義を貫いた人がいることは日本の誇りなのだと思います。

著者は、当時の首相が敗戦の責任を国民全体で反省すべきだとした発言を批判しています。リーダーと部下をごちゃ混ぜにした無責任な発言だとし、いかなる組織においても、責任を負うべきは命令を出したリーダーであり、指示に従った部下まで責任を負うのならば、「責任」という概念自体が無意味になると述べています。

命令をした人と命令を受けた人の責任は同じではないはずです。特攻についても多分これと同じことが言えるのだと思います。特攻という作戦を決定した人。推進した人。反対した人。生還した人。その命令に従って死んだ人。それらの責任が同等で、みんなで懺悔しようという考えは、納得することは難しいものではないかと思います。

しかもこの命令は、乱暴な言い方をするなら「死んできなさい」という命令です。どれだけ愛国心が強くとも、軍人としての志が高くとも死にたくはなかったでしょう。世の中には、自分の命と引き換えに恋人を救ったり地球を守ったりする話はいくらでもあります。自分の判断で命を捨てるのと、命令されて命を捨てるのでは全く次元の違う話ではないでしょうか。

僕は、職場では「ベテラン」に分類されるようになり、リーダーの役割を担うことが増えてきて、その役割の難しさを感じることは少なくありません。リーダーに求められることも確実に変わってきています。その中でも、明らかにひと昔前と変わったことは、精神論が通じなくなったことです。僕が学生だった

頃は当たり前だった「あとは気持ちでなんとかしろ！」という指示は、高校生にはもちろん、20・30代の同僚にもなかなか通用しなくなりました。筆者は以下のように言っています。

「職場の上司も、学校の先生も、スポーツのコーチも、演劇の演出家も、ダメな人ほど、『心構え』しか語りません。心構え、気迫、やる気は、もちろん大切ですが、それしか語れないということは、リーダーとして中身がないのです。」

特に僕たちのように子どもの教育に関わる現場では、まだまだ心構えだけが語られることがあります。日本の教育に改革すべき点があるとしたら、多分このことも変わらなくてはならないもののうちの1つだろうと思います。日本の教育現場にだけ従来の精神論が残り続け、どんどんと教育後進国に成り下がっていくことだけは避けなければなりません。

最後になりますが、この本で述べられている佐々木友次さんの生涯は、日本人なら1度は読んでおく価値のあるものだと思います。僕は何度も胸が熱くなり、心の奥底から訳の分からないやる気が込み上げてきました。彼が悩んだこと。貫いた信念。死ぬまで抱えていた思い。死の直前に語った言葉。それらは丸ごと戦争のリアリティであるし、僕たち日本人が引き受けて風化させてはならないものだと思うのです。

クール・ジャパン!?

著：鴻上尚史

講談社現代新書

僕はみなさんと同じように17歳か18歳だった頃、東京に憧れる田舎者だったので、今思うと恥ずかしいくらい世間知らずでした。何が日本らしさなのかなど、ほとんど考えたことすらありませんでした。

「灯台下暗し」という言葉がありますが、あまりに身近で当たり前のことは、分かっているつもりで意外と分かっていないものです。自分自身のことや自分の国のことなど、これ以上重要なものはないと言っていいほど大切なことを、僕たちは分かっていないことが多いのだと思います。

僕の場合、大人になって海外で過ごし、知り合いができたり本を読んだりすることで、日本文化や日本人としてのアイデンティティなどについて少しずつ分かってきた気がします。でも自分の国について知らないことはまだまだたくさんあり、「日本人は海外からそう思われていたのか」とか「それって日本が発明したんだ」などと思わされることは頻繁にあります。

2010年代、仕事でオーストラリアに行くことが何度かあり、そこで感じたことを述べようと思います。いくつかの学校を訪問したのですが、女性のスタッフがとても多く、校長や広報部長など重要なポジションに就いている人が目立ちました。そして多くの方がしつ



かりと自分の意見を持っていて、イキイキとしているように見えました。男女平等指数の低さは長年日本が解決に向けて取り組まなくてはならない課題ですが、僕はオーストラリアの地で世界のスタンダードを肌で感じ、日本の状況が当たり前ではないのだということを実感したのです。

学校にはさまざまな式典がありますよね。日本の生徒とオーストラリアの生徒で、静かに話を聞くのはどちらだと思いますか？日本の方がしっかりしているイメージがあるかもしれませんが、少なくとも僕が訪れたオーストラリアの学校では、司会者が最初の一言を発した途端に、生徒はピタリと私語をやめていました。当時、僕はまだ若くて無知だったので、「日本=真面目」「海外=自由」みたいな大雑把な固定観念を持っていて、海外で何百人もの生徒が一斉に静かに誰かの話に耳を傾ける光景を想像できなかったのです。

僕が実験として語れることのもう1つは、フィリピンでのことです。コロナ禍以前の2019年に約5週間をこの地で過ごしました。タクシーで町を走ると、入口に「日本製高品質」と書かれた中古家電を扱うお店がいくつもあって驚きました。車も古い日本製のものがたくさん走っていました。友人となった現地の先生と話をしてみても、日本製製品に対する信頼感の高さを感じることができましたし、インフラの向上に日本の製品が随分と貢献しているようでした。

意外かもしれませんが、教育現場でのコンピュータ活用と生徒のリテラシーに関しては、若干フィリピンの方が進んでいる印象を受けました。見学に行った小学校では、子供

たちが平然とパワーポイントで資料を作っていましたし、グーグルワークスペースの活用もこの時すでにかなり実装されていました。

10年以上前にオーストラリアから日本にやって来た先生が、黒板を見て「日本にはまだ恐竜でもいるのか」と冗談を言っていたことを思い出しました。よほど彼にとっては古臭く感じたのでしょうか。僕は密かに日本の教育が世界の中で取り残されないか心配し続けてきました。今でこそ日本でも当たり前になりましたが、教室にプロジェクターが設置されたり、インターネットが利用できたりするまでに随分と時間を必要としました。変化に時間がかかる日本で、特に教育業界の変化は遅いのです。

さて、ここまで僕はどちらかと言うと、思っているほどクールではないことについて述べてきましたが、日本文化や日本人の素晴らしさは、この本にたくさん出てきますし、僕も誇りに思っていることはたくさんあります。しかし筆者は以下のように述べています。

「日本人であるということが無条件で偉くなったと感じることは別だ。」

特にこれから日本を背負っていく若者たちにとって、このことは非常に重要だと思うのです。いくら文化や伝統であっても、時代に合わせて変化しなくてはならないものはあるのではないのでしょうか。その伝統にがんじがらめになって他国に遅れをとったり、馬鹿にされたりするのは、1人の日本人として情けなく思うのです。

クールの定義は非常に曖昧で、国によっても個人によっても、何をクールに感じるかは異なります。最も重要なことは、やはり多様

性の理解であらうと思います。さまざまな風習や考え方を学び、日本がどのように見られているかを知ることは、自分の国を見る解像度を上げる唯一の方法なのだと思うのです。

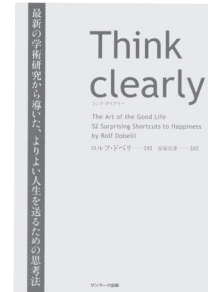
Think clearly

著：ロルフ・ドベリ

訳：安原実津

サンマーク出版

小学生や中学生の頃、僕は今ほど本を読む方ではありませんでした。野球やスキーをしている方が何倍も面白かったですし、受験勉強もあつたの



で正直なところ、本を読んでいる時間があるなら勉強をしたかったですね。でも、当時は現在のようにインターネットもYouTubeもなかったので、何か情報を得たいなら本や雑誌を購入して知識を得るしかありませんでした。なのでスポーツや音楽やファッションなど、興味を持ったものに関してたくさん目を通してきました。思い返すと、熱心な読書家ではなかったものの、本から正確な情報を得ようとする姿勢は幼い頃から身につけていたのだと思います。

高校生の時も、塾や予備校に通おうとは思いませんでした。必要なことは参考書に全て書いてあって、やるべきことはもうすでに目の前に揃っていたので、それ以上のことをするのはナンセンスだと思っていました。大学生になってギターやゴルフを始めた時も、上手になりたいなら本を読むことが一番の近道だと思って、さまざまな技術や理論を本から学びました。多分これからも、何か新しいことに挑戦しようとするなら、僕は真っ先にその入門書を読むだろうと思います。

今回読んだ『Think clearly』は、文字通

り、考え方を明確にして人生をもっと幸せにしましょうという自己啓発書です。僕が思うに、自己啓発書や哲学書やビジネス書は、長く複雑な人生というスポーツをプレイするためのガイドブックのような存在なのだと思います。「より幸せな人生を送る」というのは、洋の東西を問わず、誰もが願うことでしょう。ですから、これらの本は読めば読むほど多くのヒントを得ることができますし、時には自分の考え方や生活ががらりと変わってしまうような本に出会うこともあるのです。

この本では、シンプルに物事を考える約50の方法が述べられていて、1つ1つ筆者の主張が明確で分かりやすいので、非常に読みやすいです。ここでは、読み終えて印象に残ったことをまとめていこうと思います。

まずは「なんでも柔軟に修正しよう」という章が非常に印象的でした。本では以下のように述べられています。

「経験から言えば、よい人生とは『一定の決まった状態を指す』と思っている人が多い。それが間違いなのだ。よい人生とは、『修正をくり返した後に、初めて手に入れられるもの』なのだから。」

確かに、一度何か決定したらどうやってもその判断を曲げようとしない頑固な人や、1つのことに執着するこだわりの強い人は周りに少なくありません。「頑固親父」という言葉があるように、一般的には人は年齢を重ねると、思考の柔軟性を失い、頑固になっていくと考えられています。

みなさんは自分の頑固さについてどう思いますか？僕は高校生、大学生の頃が一番こだわりが強くて、大人になってどんどん柔軟に

なっていました。今思うと10・20代の頃は、自分の生き方に執着していたので、それが理由で悩みも多かったですし、今よりも他人に厳しかったような気がします。

物事に固執せず、状況に合わせて積極的に修正していくことは、ひょっとすると、理想を捨て人生を妥協するような態度に聞こえるかもしれません。しかし、生きていれば自然と分かることですが、人生には予想しないことが次々に起こります。計画していない出来事も次々に起こりますし、自分自身の考え方も一定ではありません。自分の人生は自分でコントロールしたいですが、実際コントロールできることはほんのわずかです。自然災害や病気で人生が思いもよらない方向に行かざるを得ないこともあります。ましてや他人の行動や気持ちは全くコントロールが効かないものです。

「柔よく剛を制す」という諺があります。置かれた状況に応じて対応できる柔軟さを持ちましょう。そうすれば、予期せぬ出来事に慌てたり苛立ったりしないで済みます。仏教に「無常」という考え方があるように、世の中に安定しているものなどなく、常に変わり続けるものだという前提で生きていた方が幸せになれることはほぼ間違いありません。

もう1つ印象に残っているのは「自分の感情に従うのをやめる」という章です。僕ら人間は、瞬間瞬間でさまざまな感情が湧き起こってくるものです。目をつむって何も考えないように必死に努力しても、何も考えないようにすることはほぼ不可能に近いのです。著者は、その感情を鳥に例えて以下のように述べています。

「私は自分のことを、『感情というありとあらゆる種類の鳥たちが飛んで来ては去っていき、開けていて風通しのいい屋内市場』のようにとらえているのだ。」

この一節は、この本の中で僕の一番のお気に入りであり、とても面白いと思います。僕はもう十分大人になりましたが、今でも時々、過去のことを思い出して悔しい気持ちになったり、将来のことを考えて不安になったりすることがあります。それらの感情に支配されてしまうと、目の前のことに集中することが難しくなったり、睡眠不足になって体調を崩したりすることにもつながります。

ここで主張されているのは、沸き起こるさまざまな感情は、実はそれほど重要なことではなく、多くの場合、それらはそう長く続くものではないということなのだと思います。まさに飛び回っている鳥と同じように、入れ替わるようにいろいろな種類の鳥が上空にやってきては飛び去っていきます。こんなふうに、嫌な感情や不安な気持ちを感じた時に、それらを鳥だと思えることができれば、非常に気楽にそれらと向き合えると思います。

最後に紹介したいのは「必要なテクノロジー以外持たない」という提案です。僕も最近、同じようなことを感じていたのです。スマホ、iPad、スマートウォッチ、ノートパソコンと多くのハイテクデバイスを手に入れても、購入した時は何か強くなった気持ちになるのですが、ノートパソコンでできることはiPadでもできるし、iPadでできることはスマホでもできるということが分かり、「結局スマホでいいじゃん」という気持ちになるのです。

また、いつもスマホが身近にあるのでちょっとした暇な時間でも耐えられなくなり、気が付くと興味のないネットの情報を見て時間を潰しています。僕はSNSをあまり利用しませんし、ゲームもやりませんが、そんな僕でも少し依存症っぽくなっているような気がします。筆者は以下のように述べています。

「テクノロジーというものはたいてい、登場したときにはすばらしく、とても便利になったかのように見えるが、人生の質という観点からいえば『反生産的』に作用することが多い。」

僕は職場では、どちらかと言うとハイテク大好き人間の部類でした。2013年からタブレットを使って授業をして、職場の後輩たちには「これが1人ICTだ！」などと言っていい気になっていた時期もありましたね。でも最近になって急に冷めてきたのです。新しい電子機器を買っても生活は大きく変わることはないし、自分の人生の充実感とは本質的にはハイテクによって得られるものではないということに遅まきながら気づいたからです。

世の中にはたくさん自己啓発本やビジネス本があります。その中で、読んだ後に生活や考え方ががらりと変わってしまうような本に出会えることは、非常に幸運なことだと思います。高校生のみなさんにとって、この本はその運命的な本になる可能性は十分にあるでしょう。僕の感想を読んで興味を持ってくれた人は読んでみてほしいです。

還暦からの底力

著：出口治明

講談社現代新書

僕は出口治明氏の本が大好きで、定期的に手に取ります。これまで何冊も読んできたので、考え方や主張はおおよそ理解しています。彼の本を読むたびに、「ああ、また来たな」という痛快な気持ちになります。

彼の考え方は、僕の血肉となり、思考や言動、無意識に至るまで、深く浸透しているように思います。言い換えるならば、彼の本は僕にとって人生のガイドブックのような存在で、読んでいると心が安らぎます。

この本はタイトルにもあるように、シニア世代に焦点を当てており、シニアになっても生き生きと幸せに生きる方法や、社会的存在意義などについて述べられています。

僕は3月に49歳になりました。還暦まであと10年あります。見た目は老けたかもしれませんが、20年前と比較しても、それほど体力が落ちたとは思いません。しかし、明らかに変わったことは、自分のことよりも他人のことで喜んだり悲しんだりすることが多くなったことです。自分の子供や学校の生徒たち、職場の後輩たちのことを考えている時間が増えました。そして、彼らの成功を心から応援し、喜ぶようになりました。

しかし、厄介なのは、僕の中にいる自己中心的なもう一人の自分がささやくことです。「そうやって人生を妥協するつもりなのか？



自分の人生は他人のためではなく、自分自身のためにあるはずだ。労力もお金も時間も自分自身に投資すべきではないのか」と。

出口氏は本の中で以下のように述べています。

「人間は何のために生きるのか、という哲学的な問いが出てくるかもしれませんが、これももうとっくに答えが出ています。動物である人間は、すでに述べた通り、次の世代のために生きているに決まっているのです。自然な感情としても、誰でも子供や孫のためによりよい世界を残したいと思うでしょう。」

つまり、僕のような50歳近くの大人が、自分以外の他人や社会全体に関心を抱くのは、当然のことだと言っているのですね。確かに、僕たち人間は動物であるという大前提から逃れることはできないので、20・30代は、自分の遺伝子を後世に残すために、他者よりも自分自身の能力を高めることに関心があるのは当然のことだと言えます。それならば、その時期を過ぎた40代以降に、自分より若い世代のことを考えるようになり、彼らのために貢献したいと考えるようになるのもまた、動物として当然のことなのだと思います。

僕はこの一節を読んで、教育に関わる仕事をしていて良かったと素直に思いました。僕の場合は、16～18歳の多くの高校生と毎日のように顔を合わせ、彼らに直接影響を与えることができます。「若い世代のために何かしたい」と思っても、そのチャンスがない人はたくさんいるのだと思います。しかし、僕も含め教育に携わっている人たちは、常にそのチャンスが目の前にある状態なのです。「次の世代のために生きる」ことが生物として当

然のことなら、教員の仕事は、非常に本能的で重要なものであると思います。

この本の中で出口氏は、日本の社会構造を変えるために行動を起こすべきだと主張しています。グローバル化が進む世界で、日本はいくつかの大きな社会問題を抱え、解決の糸口を見出せずにいます。例えば、ジェンダーギャップや少子化などが代表例でしょう。

先進国で最下位のジェンダーギャップに関して述べるなら、「男はこうあるべき」とか「家事は女性がするのが普通」という考え方は、僕たちの無意識に根付いています。日本人全体の意識を変えることは非常に難しいことです。

人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースは「人間の意識は社会構造がつくる」と述べています。出口氏はこの言葉を本の中で紹介し、シニア世代が社会構造を変えることに尽力する必要性を主張しています。

育児も家事も介護も全て女性に押し付けているような社会構造の中では、女性が仕事も子育ても積極的に取り組めないのは当然のことです。男女平等先進国では、人生に前向きに挑んでいく女性は子育ても仕事も積極的に取り組み、社会構造もそれを後押しできるようになっているようです。

ある程度経験を積み、社会的に影響力を持つシニア世代が、若い世代のために社会構造を変えようとするのは、シニア世代ができる最大の貢献なのだろうと感じました。正直言って、こういう視点は自分にはなかったもので、これから歳を重ねることの意義を見出せたような気がします。

出口氏の考え方には共感できることがたくさんあるのですが、その中でも教育に関して

は、「まさにその通り」と思われることがこれまで何度もありました。

著者は、変化の激しい現代において、物事を根本から考える力や探求心を持つことの重要性を説いています。髪の毛を結ぶ理由を尋ねた生徒に対し、「それが常識だから」と一方的に押し付けるのではなく、なぜそうしなければならないのかを説明できなければ、教育者としての資格はないと、学校関係者に向けて批判しています。つまり、生徒の疑問に向き合い、対話を通じて思考力を育むことこそが、教育者の役割であると強調しているのです。

僕も全く同じ考えです。時代の変化と生活スタイルの変化に伴い、高校生もその保護者の考え方も変わってきました。かつて学校教育で当たり前だった「～するのが当たり前」とか「ルールはルール」という指導法は、現代にマッチしていないように思います。

なぜ受験勉強をするのか？なぜ校則を守るのか？なぜいじめをしてはいけないのか？これらの質問に対して、僕たち大人は、「常識だから」とか「ルールだから」という曖昧な答えではなく、明確な答えを持つべきだと思います。そして、時代に合わせて考え直し、考え方を更新していく柔軟さが必要です。教育の目的は、思考停止でルールを無条件に受け入れることを教えることではありませんから。

最後になりますが、今回読んだこの本は、高校生にももちろんお薦めできますが、僕のような40・50代で、職場の中で中堅的な役割の人にこそお薦めしたいです。僕もそうでしたが、「シニア世代も楽しそうだな」と思わせてくれる一冊だと思います。